法華

KG314
+1

樣

危機頭上に落ち來る、常套の警語を以て排し得可きにあらず。我黨口を開けば漫罵、筆を執れば烈罵、好んで敵を天下に求むる者、豈奇を衒ふが爲ならんや。吟花嘯月、江湖別に其人有り、我黨一管の筆、これ紫電の劍、社會刷新の爲に揮うて、只我天職を全うせんのみ。

KG314
41

国会図書館
53.3.24
図書館蔵書

910.26

78W11290

三十棒目次

其一（文壇）

上流と文藝の嗜好……一頁
青年文界の弊風……四頁
今の美術家……九頁
文壇益々寂寞なれ……十二頁
綠雨に與ふ……二十頁
綠雨の女子論……二十六頁
井の哲學派……二十九頁
學界の閥閱……三十一頁
文壇の社會的罪惡……三十三頁
高山樗牛氏に質す……四十頁
青年詩人に警告す……四十四頁

地方の某文士に與ふ……四十六頁
新聞小說……五十一頁
新聞記者の品性……五十四頁
同情の範圍……五十六頁
作家と風紀問題……五十七頁
趣味の偏狹……五十九頁
第一流の讀者……六十三頁
實質ある文壇……六十七頁
文學と實世間……七十一頁
批評と私交……七十四頁
小栗風葉に與ふ……七十五頁
失戀を吹聽する者……七十八頁
學士號……七十九頁
脩養時代……八十頁
虛名の文壇……八十二頁

劍を執らん乎……八十四頁
一種の仙人……八十五頁

其二《社會》

才子とは何ぞ……八十七頁
名とは何ぞや……九十四頁
年少者遊學の地に非ず……百頁
事業とは罪惡の異名也……百五頁
上流人士の冷血……百九頁
義太夫學……百十一頁
甚しい哉淫靡の風……百十三頁
佛教界の現狀……百十五頁
大谷派の改革奈何……百十七頁
南洲の銅像……百二十頁
東都の書生と娘義太夫……百二十二頁

三十棒目次

教育者に敬ふ……百二十四頁
冷淡なる講師……百二十六頁
生意氣なる女學生……百二十八頁
地方の風俗……百三十頁
高等乞食……百三十一頁
咄々怪事……百三十三頁
雜居後の我婦女……百三十四頁
嗚呼驕奢の俗
（上）何の進歩ぞ……百三十六頁
（中）奢侈は全然非行也……百三十八頁
（下）勤儉の美風を皷吹す……百五十七頁

三十棒

新獻社同人著

上流と文藝の嗜好

人は皆上流とさへ云へば、何事も尊敬的意味を以て迎合するを常とす。素より上流社會が下流社會に比して階級の一段高きとは明白の事實也、渠等のあるものは爵位を有す、黄金を有す、馬車を有す、美姫を有す。外面に於ては、慥かに高貴也。然れども其文藝の趣味に至ては果して能く之に恊ふものある乎、形式に於て高きが如く、渠等が文藝に於ける嗜好は高き乎、外容に於て優れるが如く、渠等がテーストも亦優れる所ある乎。まづ之を渠等の文學に檢せん、渠等の文學として樂むところは果して如何なるものぞ、ポエトリー、ノーベル歟、將た又ドラマなる歟、ノーベルを愛するものもあらん、ドラマを好むものもあらむ、然れども其大部分に至てはポエトリーの一部なる

和歌と漢詩とを以て無上の大文學と思惟せるに似たり、殊に和歌の趣味が一般に普及せるは古來より自然に及ぼしたる結果也、殿上に於て、和歌を奬勵したると、和歌の特色が優美にして品性あるとに基つく。而かも和歌のみに對して嗜好の偏重せるか如きは決して喜ふへきことにあらずと雖、尚ほ無きに勝るや勿論也。

和歌に對するの嗜好や、誠に喜ふべし。然れとも渠等は眞正なる明治の和歌を解するものにあらさる也。渠等の崇敬するところは依然として俗悪なる舊派の歌人也、從て其謠ふ所も亦依然として古人の思想也、古人の思想を歌ふの形式も亦古人の形式以外に脱却する能はさる也。故に美を樂むと雖も、明治の清新なる詩趣と情操とは渠等の終に知らさる所なりとす。上流の文學なるものか、果して云かく幼稚にして陳腐なるものなりとせば、文學の趣味に於て、渠等は下流社會にあるものと何等の徑庭なきのみならず、却て幾等を輸せさるべからさる也、憐むへきは渠等の文學觀にあらずや。

更らに渠等の美術に見むか。渠等は室内を裝飾する必要より、幾分か繪畫、彫刻等の趣味を解す、然れとも渠等か短歌に對すると一般、亦極めて幼稚なるもの也。渠等の

崇邦し、愛重するところは古畫に非されば、俗悪なる舊派の趣味也、是等の趣味を除きては、何等の新趣味をも解する能はず、清新、妖艶を極盡せる西歐繪畫の趣味に對しては比較的冷淡也、冷淡なるよりも、解する能はさるもの多き也。よしや、時に其室内に掛れるものあるも、こは唯形式的に掲けたるのみ、決して其嗜好の上より愛重せるものにあらさる也。渠等の藝術に對する趣味も亦極めて狹小にあらずや。

外國の上流社會に於ては、文藝の趣味を多く解すれば、解する程、他の尊敬を享くるに至る、故に渠等は、文學に於ても、能く新趣味を解し、藝術に於ても、廣く樣々のテーストを解す、其室内には文豪の傑作、金彩燦爛として粧られ、壁間には名家の畫幅、掛りて、一見、其人格を愛慕せしむるの情を生せしむ。然れとも我上流社會の人士に至ては、斯くの如き文藝の嗜好を有するもの果して幾人かある。

是猶忍ふべし、甚しきに至ては、全然文藝の趣味を解する能はさる下劣の輩あり。唯單に酒を呑むを以て、美妓を買ふを以て、妾を蓄ふるを以て、無上の嗜好と爲すものあり、斯くの如きの奴輩は、熊公、八公の趣味と何の異なる處かある、其爵位を除き、

馬車を奪ひ、高閣大厦を破壞して、渠を赤裸々となさば、渠は熊公、八公にあらずや。趣味の点より見れば、我國の上流社會なるものは、極めて愚劣也、幼稚也、醜陋也、斯くの如き上流社會は、恐らくは、我國の特有産物たらんのみ。再言す、形式に於て上流たり、趣味に於て乞丐たるものは、渠等の現狀にあらずや。

青年文界の弊風

頃者忙裡の閑を偷みて、書庫に入り、試に數年前の青年文學雜誌を檢す。其内容を粧るものは、主として評論的性質を帶ふるものにして、論題の種類は多少時事的性質を含むもの也、『男兒の本領』『邦家の前途』『文士の本領』等、是青年文士が得意の論題として萬丈の氣焰を吐きたるものなりき。其用語の拙形的にして口吻の豪壯を衒ふの風あるが如き、見識徒らに低らして着眼幼稚に失せるが如き、素より識者の一嗤に値せずと雖も、而も一片殘々の弱氣、凛として人を凌かんとするの概は即ち是あり。

顧て現時の青年文學雜誌を檢するに、其進跡の大誠に驚くべきものあり。是を數年前

のものと比較すれば、著眼の高低、修辭の巧拙、素より日を同うして語るべからず、其の評論の題目に於ても、『男兒の本領』『邦家の前途』等の陳腐なる論題は全く跡を絶ちて、『西行法師』となり、『詩歌論』となり、『人世觀』となりたるを見ても、略ぼ其進歩の一端を窺ふへきに非すや、殊に美文の盛行、天下を蔽ふに至ては吾人大呼して、青年文界の前途を祝せさるべからず。

然れとも、是と共に一の忌むべき弊害を伴生したるを悲む。弊害とは何ぞ、第一は青年界の思潮が漸く勇氣を失ひ、活力を喪ひて、徒らに厭世的となり、消極的となり、一も濶歩進取の態度を見る能はさると是也。第二は研究的態度を失ひて、怠慢となり、惰弱となり、眞面目なる風尚を失はんとする是也。評論の衰微美文の盛行は明かに是を立證せるに非すや。

第一　吾人は美文の盛行を以て、直ちに今の青年文界の思潮を罵倒し去らんとするものに非す。されど所謂美文なるもの、内容を檢するに、多くは悲哀的快活の分子なく、女性的にして男性的氣象なく、『吾はハイヲを抱いて泣きぬ』とか『あゝ君よ！我は月

を仰いで君の姿をしのび、よもすがら泣き明かしたりき』など、唯めそ〳〵と泣いて得意とするを見れば、如何に渠等の思潮の女性的となれりしかを想見するに足らむ、是決して賀すべきの傾向に非ざる也。論評文の衰微は、實に是が反證として見るべきもの、月に泣き、花に泣き、女に泣き、蟲に泣き、あらゆる事物に對してめそ〳〵泣く聲は聞くとも、一世の汚風を罵倒し、社會の墮落を慷慨するの聲は、終に聞くべからざる也。

余を以て漫に大言壯語を快とするものとなす勿れ。徒らに大言壯語するは、決して喜ぶべきことに非すと雖も、若し是を猥りに悲む者に比すれば、余は寧ろ前者に與みして後者を排せんと欲す、殊に青年時代は、進取の時代也、濶歩の時代也、直前邁往の時代たるを知らば、益々悲哀的分子適切に云へば神經性の悲哀を排して、雄壯、快濶、健全進歩の分子を注入せざるべからざるの要を感す、此点より云へば不健全なる美文の流行は決して賀すべきことに非ざる也。吾人は今の青年文士が活力の消耗を吊せざるべからず。

第二　青年文士が美文に熱衷するの結果、自家の理性を發達せしむべき要務を閑却して、研究的態度を失ひしは、又喜ふべきの現象に非ず。吾人を以て美文排斥者となす勿れ、余は素より美文の進歩を歎ふるもの也、されど此進歩と共に他の一面に於て如上の弊風を生ずるを悲むもの也、青年時代は修養の時代也、蓄積の時代也、研究の時代たるを知らば、比較的に研究の勞を要せざる美文にのみ筆を染めて、西歐の思潮を眺はず、前代の文學を研究せず、唯悲哀的文字を連ね、女性的言辭を弄するは、實に其一生を誤るものに非すや、余は今の青年文士を以て悉く然りとは云はず、されど大部分の青年が僅かに斯の如き境域に身を沈めて、唯一文の速かに成らんとを願ひ、一章の直ちに成らんとを思うて、苦心經營、是が爲めに其日を送りつゝあるは非定すべからざる事實也。筆を美文に染むるもの、須らく此に三省するを要す。

吾人は終りに臨んで青年文士に警告せんとす。請ふ、卿等の無定見を去れ、評論盛なれば評論に走り、新體詩旺なれば新體詩に走り、俳句旺んなれば俳句に熱中し、美文勃興すれば又他を捨てゝ是に熱衷す、恰かも輕薄浮靡の妓女が、昨は西家の郎に媚び、

今は東家の新郎を迎ふるか如きに似ずや、斯くの如くにして得る所は何ぞ、徒らに一吟双涙を流したる堆積の癈稿に非すんば、經營苦心の爲めに自己の要務を忘れたる失敗の歴史に非さる乎。而して彼に於ても、是に於ても、僅少なる成功を得るは十中の一二にして、他は不成功に終るもの、滔々、皆然るに非すや。是實に自家が守るべき一定の本領を捨てたるか爲也。故に先つ自己の長とすへき處に熱中して他に赴くか如き没見識を止めよ、無定見を去れよ。美文可なりと雖も、必ずしも美文のみに力を盡すを要せず。余をして忌憚なく云はしめば、余は此際評論の方面に盡さんとを切望するもの也。縱横の筆、直截の文、今の政界の腐敗を指摘して山師の頭上に痛棒を喰はすも可ならずや。今の教界の内幕を曝露して、墮落坊主の膽を寒からしむるも可ならずや。今の文界を論じて、女子の如き文學者を痛罵するも可ならずや。今の紳商なるもの、の魂膽を洞破して、其姦詐を叱責するも亦可ならずや。腐敗混濁の社會は、實に青年文士の筆に俟つもの多し。徒らに不健全なる美文を作らんよりも、直ちに自家の所見を公にして一世の悪風を罵殺するの快に如かざる也、何ぞ女子的態度を學ふの要あらんや、吾人は斷じて悲哀、消極の分子を青年界より排斥し去らざるべからず、而して快活、健全の分子を注入せざるべからず。假令大言壯語の弊ありとするも、一片稜々の意氣は、天下を敵として縱横の熱罵を爲すの男らしきを取らん。青年の活氣則ち此にあり、青年の特色、則ち此にあり、青年の本領、則ち此に在り。進取の氣、邁往の情一に此に存するにあらずや、聊か現時の狀態に激して奇矯の言を爲す、識者願くば吾人の疎狂を容れよ。三十三年二月）

今の美術家

美の神は、嫉妬の神也。吾人は是に對して、全身の熱血を捧げされば、決して滿足せざる也、若し他のある物の爲めに美の神を疎かにせば、渠は直ちに去て吾人を顧みさちむ、今の美術家は則ち美の神の捨つる所となれるものに非さる乎。

吾曾て二葉亭四迷の『肖像畫』を讀む、篇中の主人公たる一畫工が自己と同じ仲間なる某の、名聲已れを凌くを妬みて是を壓倒せんと欲し、熱心畫を作ると雖も、滿足すべ

き大作を得る能はず。懊惱煩悶、轉々し、反側するに及んで、翻然として其非を悟り、潔濟沐浴、日夜聖經を誦し、所禱を爲し、其心地玲瓏として水晶の如く、胸中高潔にして蓮花の一塵を帶ひざるが如きに至て、聖母の像を畫く、神來の筆、高潔の想、一代の美術界を靡倒せしむるに至ると云ふを見て、心弱かに感する所ありし也。

今の美術家に對して『肖像畫』の主人公を求めんとするか如きとあらば、こは大なる誤謬也。渠等の腦はパンの爲めに滿され、黃金の爲に滿され、虛譽の爲めに滿され、其間寸毫の美すら容るゝ餘地なきに非ずや。嫉視反目は渠等の常也、同黨伐異は渠等の常也、傲慢不遜は彼等の自ら得意とする所也、高潔なる品性、多趣なる詩的情趣を彼等に求めんとするは、全然誤れりと言はざるへからず。

吾人は屢々美術家の軋轢を聞けり、而かも其爭や堂々たる主義の爭に非ずして、勢力の爭也、道の爲めに爭ふに非ずして、利己の爲めに爭へる也、此一事を以てするも、彼等か精神の如何なるものなるやを、解釋するに難からざるに非ずや。

吾人は今の美術家なる者に接せしと屢々なりき、而かも渠等の口にする所は黃金也、パン也、パンと黃金に非されは、自家の吹聽也、他の讒謗也、此一事又以て彼等か精神の如何なるものなるやを、解釋するに難からざるにあらずや。

斯くの如き美術家の頭腦に、美の神は宿るべき乎、虛譽を得るに忙しく、黃金を得るに忙殺せられつゝある彼等の狀態を見ては、美の神は直ちに是を醜として野外に去るべき也、斷橋淺水の邊、花飛んで落紅を浮へ、春風輕く吹いて漣波を織るの處、別に純潔清淨の境あり、美の神は此に潛んで再び俗惡なる今の美術家を顧みさらむ。

今の美術家よ、請ふ卿等の罪を悔改せよ、パンを得る必すしも不可に非す、唯パンの爲めに其心を奪はるゝ勿れ、黃金を求むる必すしも卑しとせす、唯黃金を求むるを以て唯一の目的とする勿れ、名譽を得んとする吾人是を退けす、何となれば、人間へ到底不完全の動物なれは也、唯名譽を得んか爲めに漫りに惡作を公にするが如きは、決して喜ふへきことに非す。而して其嫉妬の心を去りて、他の美を悅ふの寬容を有し、伐異の弊を除きて能く友を容るゝの胸襟を開かば、美の神は求めすして汝の家を音づるべき也。

今の美術家よ、願くは爛熟の花に對して汝の心を恥ぢよ、玲瓏の月に對して汝の汚れたる胸を洗へ。而して其身を清め其垢を取り、美の神の御前に其罪を悔ひ改めよ、然らずんば、到底神來の作を得べからざる也。（三十三年三月）

文壇益々寂寞なれ

新春の文壇に於て、過ぎし一年を回顧するものは、寂寞の甚しかりしに見て、今年の再び轍を履まざらんことを希はざるはなかりき。げに首を回らして、一歳の間を顧みれば、冬枯の光景四季を蔽うて、何の處にも駘蕩たる春色を見る可からざりし。然りと雖も是れ果して去かく憂ふべきことなる乎。文壇寂寞と云ふ。卒然として見れば、誰か是れを喜ばん。而も審に味ひ來れば、極めて文學を冷遇せし昨年の社會に對して、吾人は大なる感謝を捧げざるを得ず。吾人は斷言す、希くは今年も亦前車の轍を履めと。

書籍の販路日に狹りて、書肆の産を破るものあり。有力なる文學雜誌相踵いで倒れ、

人をして我社會は到底文學を容るゝの餘地なきかを疑はしめ、才氣溌溂たる新進の作家尚ほ志を文壇に絶たんとせしき。斯の如きは實に昨年の文壇の光景なりし也。何を以て我文壇は斯る悲境に陷りし乎。疑もなく、都べての社會が生活に困難なる一事は、文學の占め來りし領土を蠶食し去りたるが爲めのみ。蓋し物價の騰貴せること、昨年の如きは、已往十數年間絶えて見ることなかりしもの。生活難を嘆ずるものは至る處に在り。金融の切迫に困ひの聲は行く處に響き、山に入りて草根に僅に命を維ぐ者、川に溺れて自ら苦みを脱せんとする者、擧げて數ふ可からざりし。文學は畢竟するに、資足り財餘りありて、後是に耽り、是れを樂むを得るのみ。資なく財なく汲々として生活の困難を脱せんとするの時、何の餘裕ありてか、小説に熱中し、詩歌を愛誦することを得ん。昨年の文壇の不振なりしは、實に當然の事なりしのみ。然り而して此間に於いて、幾多の年少の士が志を文學に絶ち、才秀氣鋭の士にして、尚ほ文界を去らんとせしが如き、吾人是れを以て大に喜ぶ可きの事となすなり。

明治に入りて、文界は既往二千載に追蹤するの盛況を來せしと云ふも、いかなる文士

を得、いかなる作物に接せし乎。紅葉露伴は明治の二大文豪なりとは、今に變らざる相場なれど、氏は只ろれ無花園の芥子に過ぎざるのみ。泰西の文豪と比して、耻づるなきの作物果して一篇だに見るを得可き乎。紅露にして尚は且つ然り。況んや他の碌々たるものに至つては、亦云ふに足らざる也。我文壇の外形のみ花々しくして、實質の極めて薄淺なる斯の如きは、因多かるべしと雖も、畢竟するに、我文壇は一面に於いて文士たる、一面に於いて遊治郎たる者を以て滿つるか爲めのみ。彼等がいかに淫靡なる乎、いかに驕奢なる乎、いかに無定見なる乎、いかに無信仰なる乎、是れ既に吾人の幾度も論じ、幾度も說き盡せし所、煩を厭ひて茲に筆を費さざるも、一言すれば、彼等は實に体のよき遊人なる也。元祿時代より傳へ來りし戲作者氣質は今に殘りて、通を衒ひ、粹を誇るを以て、特色と心得る也。就中小說家の如き其品性の墮落せる、其心事の陋劣なる、見る者をして直に嘔吐を催さしむ。斯くの如き輩の文壇に滿つる間は、いかにしてか、吾人は文學によりて、一陣の天風に接し一道の光明を認むるを得ん。大文學を得、大作家を得んとせば、先づ是等狐鼠の輩を打掃せざる可からず。打掃し盡くし

て文界の空氣を肅清せしめざる可からず。然り而して彼等を打掃するの策奈何。只文界の社會より冷遇せらるゝの一事あるのみ。所謂文壇寂寞の聲をして長からしむるのみ。蓋し今の文士は毫も社會に貢獻するの念なく、人道の爲めに盡くすの意なし。而も筆を執れば意外にも孜々屹々大に勉めて、一文成れば剖劃に附し、一章成れば梓に上すもの、これ豈に名譽を博せんが爲めのみならんや。只天下愚衆の目を瞞して幾何の阿諂を得んことを欲するのみ。彼等は文に意を致すよりも、原稿料の計算に苦しみ、貧民に同情を表することなきも、富者の膝下に叩頭す。學識や極めて淺きも處世術は最も巧慧也。彼等は一種の商賈のみ。若し文學にして利すること能はずんば、更に志を變へて他に向はん。即ち社會は文學を樂む餘裕なく、從つて作家を冷遇せば、彼等は何を以てか貧に耐へ節を持し、尚ほ守る所を固持せんや。即ち平然として文壇を去らんのみ。果して斯くの如くにして狐鼠の輩全く跡を絕たば、是れ眞に太白を擧げて文壇の爲めに祝すべきことに非ずや。然り而して社會の文學を冷遇すること甚しきの時、尚毅然として守る所を失はず。筆を執りて他を顧みざるの士あらば、此人必ずや眞に文

に忠なるべし。理想は高くして心事は皎潔なるべし。己に文事に忠にして道を守るに固からば、時非なれ益々激し、窮すれば愈々固からん。固ければ、激浪幾たび寄せ來るも巉巖の動かざるが如く。激すれば疾風の走る所一物なきが如し。固きが故に理想確然として心絃緊張し、激するが故に熱血腔に滿ち高興旺發す。高興旺發し來る時、筆を揮うて心絃の響を漏す。筆に神あり、紙に靈あり、一氣呵成渾灑自在、千言萬言唇を衝いて迸り、筆手を脱して飛ぶ。名篇是に於いてか成り、鉅作是に於てか成る。古今幾千載、東西幾萬里、吾人は未だ驕奢淫逸女郎の膝にもたれて、天籟の響を漏らしたる者を見ず。晏臥悠々養老金に生活して、嘯々の光明を與へたる者あるを聞かず。カーライルを看ずや、彼れ眞に稀世の文豪、一管の毛錐百代の人心を皷吹し、一卷の書千古に福音を傳ふ。而も彼れや二十年の長き、貧と孤獨とを凌ぎて屈する所なかりし也。社會の文學を冷視するは、實に薄志弱行の徒を戒けて、堅忍精進の士を奬するものに非ずや。文界に充ち滿てる腐氣汚俗を打掃し去るものに非ずや。故に云ふ、文學を冷遇せし昨年の社會に對して大なる感謝を捧げざる可からずと。希くは今年も亦

去歳の轍を履めと。

文壇の寂莫なるは豈獨り群小作家を淘汰するのみならんや。年少將に文壇に足を投せんとする者に向つて、亦大なる訓戒を與ふるものなる也。思ふに群小作家の跋扈することゝ、今日の如く甚しきに至りし者、主として文界の名を成し易きに因す。政界や、教育界や、實業界や、名を成すこと敢て難しとせず。然りと雖も亦多少の實力と經歴となかる可からず。必ずしもこの二者伴ふことなくして、名を成すことを得るは、只獨り文界あるのみ。試に一篇の詩一章の文を草して公にせよ。書肆固より鑒識の眼あるなく、讀書界亦徒らに雷同附和するのみ。批評家と雖も確然たる批判力あるに非ず。天下皆盲、若し僥倖を得ば、忽ちにして大家と稱せられ、名流と尊ばる。名を成し易きこと未だ文界の如きは無し。是に於いてか空想燃ゆるが如く、名譽心の最も甚しき年少の士は、一攫直ちに盛名を得んことを欲し、相爭うて文界に入る。而も彼等の始めや、文學の如何なるものなるかを知らず、僅に文字を列ぬるを得るに至れば、直に文學者を氣取りて、雅號の堅穿に頭を苦しむるに至る也。文章は只自己の思想を表はし、

感懷を記するの具なるのみ。文學は更に文章によりて、詩想を發揮するもの也。文章に達す、即ち文章家と稱すべし。文學者たるに至つては、更に特種の思想と學識なかる可からず、即ち文學の眞髓を研むると共に、温き同情の涙と、豊かなる想像の念となかる可からず。今の少年の多くは殆んど此睹易き理を解せず、僅に文字を列ぬるを得るに至れば、直に詩人たらんと欲し、小說家たらんことを希ふ。始めや路僅に一歩、進み進みて遂に差千里の遠きを効す。彼等は歲月を送るに從つて、其性質の適せざるを知り、境遇の不可なるを自覺するも、浸潤の久しき脫する能はず、遂に碌々として一生を送り、彼の政界の壯士の如き者となりて、全く國家の癈材に終る也。是實に一箇人として悲しむ可きのみならず。國家の人物經濟上より見るも最も憂ふ可きことに非ずや。這般の傾向や一日も早く矯正せざる可からず。年少未だ染まざるに於いて、救はざる可らず。然り而して是れを矯正し、是れを救ふの策奈何。只それ文壇をして寂寞を極めしむるにあるのみ。彼等の文界に志を起せるものは、畢竟するに文界の名を成し易く、得る所多きを見て、垂涎三尺、遂に身に餘る大望を起せしとせば、若し文

界にして、社會の冷遇を受くること甚しく、書を著すも社會に喧傳せられず。脩養を積むも世に用ゐらるゝことなくんば、彼等は看て以ていかにしてか、之れを羨み之に入らんや。眞に堅忍不拔の志望を抱き、所謂美神の膝下に一身を捧げんとする底の精神ある者ならば、社會の潮流は敢へて其眼中に存するなからんも、只一時の附和氣に乘じて、身を文界に投せんとするものは、必ずや茫然自失して、意を絶つに至る可し。果して然らば、天下の少年の方向を誤らしむると、大に減ずべき也。是實に文壇の爲めに喜ぶべきことなるのみならず。國家人物の經濟上より見るも、大に祝すべきことに非ずや。

嗚呼文壇の落莫たるは、滔々たる群少作家を淘汰すると共に、少年をして身を誤らしむることなからしむ。寂莫なれや、益々寂寞なれや。能ふ可くんば、翌年も又翌年も、大に落莫蕭條の光景を現はし來れ。（三十二年四月稿）

緑雨に與ふ

齋藤緑雨、『萬朝報』紙上女子論を草して、法律の尤ひる所となる。曩には『新著月刊』に於いて淨猥の言を縱にして、其編者は警視廳の注意を蒙ひれることありき。嗚呼飜せられて悟らず、誡しめられて悔ゐず、汚醜の氣、已に黄肯に入りて、亦治す可からざる乎。

明治文學史を編する者あらば、必すや緑雨の名を逸することを能はざる可し。紅露や明治文壇の二雄鎮、紅葉は纖巧洗煉、藕糸の微に通ずるが如き文に於いて、今の文壇を獨歩し、露伴は豪健雄大、天驥の峻阪を下るが如き文に於いて、他の企及を許さず。然りと雖も、奇警奔放、利刀を手にして切廻はるの快に至りては、遂に緑雨に待たざる可からず。試に看よ、彼れの文、其批評たると、論文たると、小説たると、隨筆たるとを問はず、漫罵の辭を以て之を一貫し、冷嘲の言を以て、之を縱横し、他の模す可からざる奇語警句を充して、見る者をして應接に遑あらざらしむ、若し彼れの文より漫罵の辭と、冷嘲の言とを除き去らば、剩す所何物ぞ、彼は常に鳥の如き眼を以て社會の裏面を眺め、人生の弱點を看る、一度其瞳孔に映じ來るものあるや、得意の筆を揮うて、縱横に飜弄し、自在に熱罵し、創痍滿身、再び起つこと能はざるに至らしめて則ち已む、緑雨亦一世の才人たるを失はざる也。惜しむらくは、此奇警縱横の筆、揮うて社會の爲めに盡すに意なく、描いて文壇の爲めに貢献するを思はざるを。彼れの著作を通覽するも、未だ一篇の、先人以外に一新境を拓きて、靈活なる人生を解剖したるものあるなく、一章の、燃ゆるが如き滿腔の熱血を迸いで、天下の痛苦に同情を表したるものなき也。小説といへば、陳套平凡極まれる新聞種のみ、批評といへば、徒らに一字一句のあらを探すのみ。隨筆といへば、くだらなき通をふりまはすのみ。明皎々たる秋水も、彼れが手に在りては、庖丁に同じ。

彼れの手に在る秋水の、庖丁に終らば尚ほ可也、妄りに人を傷け他を害せんとするに至りては、遂に默す可からず。即ち『雨蛙』の荒子落雁の如き、毒にも藥にもならざる者を描きて、得々たらば、强ひて言を費すの要なしと雖も、其常識を離れたる毒言の

人の對手とならざるを奇貨として、例へば車夫馬丁の徒の禮を失せること甚しきも、已を顧みて之を尤むることをせざるが如きに乘じて、社會の秩序を紊り、人生の大道を壞らんとするが如きの擧あるは何ぞ。固より今の世は混沌闇黑の中に在りと雖も、人生の大道、社會の秩序、豈綠雨一輩の徒によりて、動搖を來すべけんや。來すことはなきも、其亡狀の甚しき、毒言の甚しき、社會の一員たるの資格だになきを見ては、遂に口を緘して終ることを能はざる也。

吾人は到底綠雨の如き者に向つて、循々として教ふるの根氣なし。否教ふるの要なし。誰か日は西より出で、東に入るといふも信せんや。今の世いかに道德頽廢せるも女子を以て犬に比較し、婚姻を以て人生の最も笑ふ可きものとなし、女子の集會所を設けて亂淫す可しなどの言に耳を傾くる痴漢あらんや。紫紬は暴戾至らざる所なかりしも、尙は淫逸を肆にすべし、獸慾を逞うすべしと令を敷きて、民に命せしことなかりき。多少の教育あり、多少の地位を占むる者にして、斯くの如き暴戾の言を吐けるものは、吾人の寡聞、只一人の綠雨に於て知れるのみ。知らず綠雨は何を以て斯の如きに

至れるか。彼の春街の賣婦の如き、柳陰の私窩子の如き、他の劣情を惕ばさしむるを以て目的とする者と雖も、始めに於いては、人間普通の道德心あり、人間普通の良心あり。而も浸潤の久しき、遂に境遇の同化する所となり、淫行を以て人生の最大快事となし、賣色を以て正しき職業視し、道を語らず節を口にせず、不貞破倫の一動物となるに至る。綠雨と雖も豈始より、斯る暴言を吐き、毒舌を逞うせしものならんや。思ふに花街情巷の間に彷徨すること多年、習ひ性となりて、聞くもの見るもの敢て怪まざるに至り、色を賣り淫を鬻ぐ三千の紅妓を以て、我妻となし、樓々相接する翠甍紅瓦を以て我家となし、思へらく、女子は一種の商品のみ、之を弄するも金だに拂はば何の罪かあらんと、未だ神聖なる愛情の如何なる者なるかを知らず、純潔なる戀愛の如何なる者なるかを悟らず。只賣女を以て、婦人の都べては斯くの如き者となし、春街に於ける痴男醜女の關係を以て、天下の夫妻の間亦斯の如きものならんと斷じ、今の文士の斯る愚說を抱くものなきを見て、よしあるも口にせざるを見て、己れ天下の大眞理を發見せしかの如く、揚々乎として、婦人の價値の極めて劣等なるを說き、婚姻の不

必要なるを言ふに至りしに非ざる乎。果して然らば、彼れは盲人の象を品すると同一般のみ、笑ふ可きの限りならずや。吾人の言或は禮を失せること大ならん。然りと雖も、普通人間の心を以て想像すれば、豫に此以外に及ぼすこと能はざる也。

更に一言せざる可からざるものは、彼れの通を街ひ、粹を誇るの一事也。一部の『わられ酒』を繙きし人は、讀んで『をぼえ帳』に至り、花街の微事瑣談を喋々し、飲食衣服の事を喃々して、倦むなきの狀に驚かざるを得ざる可し。衣服飲食はた、春街情巷の事に思を勞するは、是れ小人賤夫の事のみ。而も今の小說家となちんとするには、必す此二者の研鑽を積むこと深からざる可からざる也。即ち小說家となるものは、通人たり粹士たるの免許狀を有せざる可からざる也。道行く婦人を見て、一目直ちに其著せる衣の裏までも洞見するの眼光なかる可からす、名高き料理店に赴きて、これはおつなりと感歎するの同情なかる可からず、淫街に流連して馬を連れ飯るの膽力なかる可からず、此眼光あり、此同情あり、此膽力あらは、社會の缺陷を訴ふるの要もなく、野に臥ふ民の慶を聞くの要もなく、頽落せる趣味を救ふにも及はす、饑に泣く老叟

る趣味を救ふにも及はす、饑に泣く老叟を顧みるにも及はす。斯くの如き世界のいかなる處に於いても、見ると能はざる痴呆極まれる者は、即ち今の小說家の本色なる也。

蓋し是れ、德川時代の所謂戲作者氣質の今の傳はり來りしもの、彼の德川時代の作家か置位極めて低く、所謂戲作者の名稱の敎ふる如く、幇間賤夫と同視せられ、理想もなく信仰もなく、只市井の瑣事巷街の醜話を描きしか如きは、其識見の狹小、寧ろ憫む可きものありと雖も、今の文學者は何の必要ありて、之を摸することをなさん。文學者の天職は別に存す。大に我文學の發達を計りて、世界の騷壇に覇を爭はさる可からさるの時、須らく文學者の品性を高むるを要す。文學者の品性を高めんとせば、聞くだに忌はしき通、粹なるものを棄てざる可からず。之を棄てんとせば、先つ『あられ酒』を火中に投せざる可からず。浮靡厭ふ可き詮穿に百餘の紙數を費せる此書の如きは日本の文壇を汚すこと、決して少小に非ざる也。

重ねて云ふ、緑雨、吾人の言を了したる乎。少年の客氣、激し易くして、或い不穩の文字あらん。而も吾人は聊か日本文學の現狀に慨するもの、一片の微衷抑ふると能は

ざるに出つ。若し綠雨にして依然暴論をふりまはすが如きことあらば、去れ、我文壇を去れ、否我社會を去れ、去りて不毛蒙昧の地に赴け、水草を逐うて東西するの民は女子を以て一種の玩具となし、淫慾の奔勢を滿すを以て、男女の目的となす。是れ綠雨の意と符を合して、肝膽相照らさん。綠雨亦此不毛の地を以て、理想の天地となさん。去れ、去れ、去りて此地に赴け、吾人は之を强迫すべき權利あり。(三十二年四月)

綠雨の女子論

明治文壇に詭辯家あり、綠雨と云ふ、黑を白と爲し、鹿を烏と呼んで自ら得意たり。赤門の天狗も、彼の前には鼻垂小僧以上の價値を有せざる也。文士も學者も彼の眼には三文丁稚より、より多くの資格を認められざる也。矜誇倨傲の氣充滿せる今の文壇、須らくこの詭辯家なかるべからず。

然れども彼は故らに新奇を趁ひ、創見を衒はんと欲して、往々沒道義の言を敢てし、不健全、不條理の空談を事とす。斯の如きは人倫の常規に於て乃至社會の風紀を維持するに於て默々に附すべからざる也。

彼は女子を將て犬にだも若かずと爲し、其節操を疑ひ、其心事を罵り、戀を笑ひ、婚姻を蔑視し、夫婦を罵殺せり。吾々痛快ならざるに非らず、皮肉ならざるにあらず、而も遂に自家の小觀に跼蹐し、東洋的固陋の頭腦を曝露したるもの、一言以て之を掩はは女子と小人とは養ひ難しの支那的思想を敷衍して、之に加味するに、七人の子は爲すとも女に心許すな的の見解を以てし、卑近なる佛教々理を演繹し來れりし也。陳腐を粧ふに彼の奇警なる筆先を藉す、一時を瞞過すべし、以て多く欺くを得べからず。

人間は遂に神聖なる能はざる乎、少くとも人間は神聖なるものを解釋する能力無き乎先づ此の一疑問を抽出し來つて彼の論據を突かん。蓋し陰陽の兩極は宇宙の元機、男女の兩性は人類の大本、夫婦は即ち道德の泉源を蘊蓄す。親子の關係は此れより發し君臣の名分は此より生し、兄弟朋友乃至國家の複雜多面なる連鎖は、一に茲に繫からざるは無き也。夫婦の道無くんば人倫は生せず、男女併存せざれば、人類は絕滅す、人界已に詩人の涙あり、孝子の涙あり、愛國の士が濺げる熱血の量、殉教の徒が割ける

肉身の價、誰か之を神聖ならずとせん、神聖を解する能力なしと云はん。果して然らば、此等の超絶せる心靈上の動機は、其根底を何處に托し來れる乎、溷濁の汚水は、流るゝこと百里千里なるも、常に溷濁にして、到底一掬の清泉を得る能はざるや明けし。神は肉交を目的として、男女を作らざりし。然るを猥りに詆訾、嘲罵の語を逞うし、獸慾の傀儡と叫び、肉情の交換と呼び、非神聖、非倫常を連唱す、已に根本に於て大誤謬なるなからんや。

彼は戀愛即肉交と解釋し來つて、口に美しく手に汚きものとの一句を其眞理に觸着し得たるものゝ如く思惟して得々たり。焉んぞ知らん、其口に美しきもの、即戀愛の實相にして、手に汚きものは、單に其假相たるに過ぎざるを。父母の愛を解して、食はしむる事と、着せしむる事と、住ましむる事のみと、云ふものあらば、誰か其淺薄を笑はざらんや。衣食住以外、別に神の如き愛情あり、誰か之を拒否するものぞ。戀愛は肉慾にあらず、少くとも眞正の戀愛は、形而上の靈的關係なる事を認めざるべからざる也。

殊に彼の論は甚しく弱い者いぢめ也。否例の東洋的道德を備ひ來て、女子を貴むると、と頗る酷也。彼は暴言を放て曰く、犬の爲す事をも妻は爲さゞるなり、犬の爲さゞる事をも妻は爲すなりと。反問す、犬の爲さゞる事をも敢て爲すの夫はあらざる乎、犬の爲す事をも敢て爲さゞるの夫はあらざる乎。有夫姦は法律の禁ずべきものにあらずと冷罵しつゝ、有夫姦を行はしむる無情輕薄の男子あるに想到せず、女子の進退は毫も曆日と關係なしと嘲弄しつゝ、多くの離婚を甚せる浮華淫逸の夫あるを說破せず、妻が眼の何ものに注がるゝかを穿鑿して、已の眼に何ものゝ映れるかを口外せず、妻が夜毎の夢の始終を心配して、已が夜毎の放蕩三昧を棚に上げたり。天下豈に斯の如き得手勝手の大愚論あらんや、頭腦の不透明を憫むと公言せる彼の頭腦が、甚だ透明に過ぐるを笑はずんばあらざる也(三十二年三月)

井の哲學派

牛蒡は玄妙至靈なる宇宙の大秘奧に參ること愈深くして、神の前に脫帽せざる能はず

と言へり。學殖益々宏遠にして、人物愈謙遜なりしは吉の碩儒。文明の御代は重寶なる哉三年の修學、忽ちにして人類以上の靈智を悟得し、五年の洋行立處に、全智全能の神と通ず、文學博士井上哲次郎氏は、即ち其御本尊也、高山林次郎・木村鷹太郎以下某々の諸氏は其氏子也、或人稱して之を天狗學派といふ、蓋し失禮也、吾人は唯井の哲學派を以て呼ばんとす。

井の哲學派の特色は、自大に在り、自尊に在り、高慢に在り、矜誇に在り、苟も大學の出にあらざるの士は直に無學無識と罵り、平凡淺膚と貶し去つて、敢手たるに價せずと喝破する、其唯一無上の武器と賴む所也。新春劈頭、井の哲博士は、『帝國文學』誌上に天狗的馱法螺を吹立てゝ、傍ら人無きが若く、文學宗教を撫斬りの餘勢、熖は島田沼南氏の頭上に飛んで、爾無識、少しく學ぶに不若との既宣を爲せりき。吾人は博士の平生に鑑みて、太だ多く怪まざりしと雖も、同時に林次郎氏が嘗て、宙外に愛山に乃至反省雜誌記者に進上したる贈り物を聯想し來つて、滔々風を成せる此の高潔の云爲に呆れ、竊に驚惑せざる能はざりし也。

林次郎氏、頃日詩歌と人体美なる題目の下に、古今東西の文學を引証して論理精確、聊今の文界の時弊に中るものあり、然れども楮墨の間、例の驕慢の氣に滿ちて先つ感情的に人の厭惡を導くものある也。これ果して讀者の罪乎、抑も亦筆者の罪乎、林次郎氏たるもの一番の省慮を經ずして可ならんや。

井の哲學派にして、其自大自尊を撤し、虛心平氣の態度を取らざる以上は、彼等の言は假令聽くべしと雖も、世人は耳を掩うて之を避けんのみ。天國の門を開かんと欲せば須らく小兒たらざるべからず、學界の門を開かんとするにも、亦小兒の如く無邪氣ならざるべからず、鬼面を着けて、人に臨むは單に一嘘に價せんのみ(三十二年二月)

學界の閥閲

藩閥黨閥なる名の下に、崩す可からざる障壁を築き、黨に同して異を代つもの、吾人は彼醜陋極まれる政治屋のみなるを信ぜしに、今や此惡流は淨乎として學界に氾濫せるを見る。藩閥黨閥と共に、學閥の牢乎拔く可からざるに至れる也。

政客の黨を結び派を樹て、他と抗し他と論爭するは已むを得ざる事なるべし。即ち政治は多數によりて勝ち、少數の爲めに敗るゝものなれば也。然りと雖も學界に於いては、何の必要ありてか是れに摸するとをせん。學界は討論會に非ず。多數を恃みて少數を苦むる要なく、黨を結び派を樹つるも何の效あるなし、學界は決して黨同伐異の痕を止む可からず。論爭も可也、辯難も可也、其學の爲めには飽く迄も爭ひ飽く迄も辯ずべしと雖も、論爭以外に於いては、寸毫も妬意を含む可からず、若し自己の地位を利用し、自己の權力を振り廻はして、他の弱點に附け込み、他を陷擠し排斥するが如きは、是れ已に學者の資格なきを表はすもの也。

史料を大學の專有物とし、絶にて民間に之を漏さゞるが如きは、既に世人の熟知する所、吾人は茲に之を云ふの要なし。頃者博士選定の事あるや、農科大學は其優勢なるを恃みて、札幌大學派を排せんとせしが如き、吾人は實に其心事の陋劣なるに驚かざるを得ず。更に之を高等學校に看よ、增田氏先づ罷められ、落合氏小中村氏去り、佐藤氏亦斥けられ、所謂古典科派なるものゝ都べては排せられて、大學派の代りたるは

果して、何を意味する乎。吾人は井上哲次郎、上田萬年兩氏の畏敬すべき學者なるを知る、井上氏の哲學に造詣厚き、上田氏の語學に研鑽深き、兎に角今の學界は其獨步を許さゞるを得ざる可し。而も氏等にして大學派の羽振よきに乘じて陋劣彼れが如き學をなして、毫も顧みざるは果して何の意ぞ。井上、上田氏等は日本主義の張本人也といふ。而して日本主義なるものは光明を喜び、生々を尙びさへすれば、己を欺き人を陷れ友を賣るも不可なき乎。さらば井上氏等の日本主義ほど世に都合よく勝手なるものはなかる可し、慧眼なる井上氏、何ぞ日本主義を改めて、御都合主義といはざる。咄咄。（明治三十二年四月）

某氏に與へて文壇の社會的罪惡を論す

某君足下。再三、足下が今の文壇に對する高見を聞くを得たるは、僕の大に喜ぶ所也。足下が縱横快利の筆文壇の暗黑面を爬羅摘抉し來て、熱罵冷嘲、殆んと餘すなきに至ては、案を叩いて覺えず快を呼はざる能はず。柔弱女子の如き文士中に於て、氣骨稜々、

男兒漢の面目を持する、足下の如きを見て、余は甚だ意を強うせり、僕が滿肚の磊塊足下を措いて亦誰にか語らむ、足下が余の卑言を徵するを機として、一言文界に於ける社會的罪惡を論し、極力是を拚し去らむと欲す、請ふ暫く耳を假せ。

足下の言の如く、今の文界に於ける暗黑面を探査し來れば、醜怪百出、一々是を擧くるの煩に堪へず、今辭書の中よりあらゆる惡德文字を拉し來て是を連ぬるも、尙足らざるの憾あらむ、此以外に於て恐るべく、憂ふべき目下の緊急問題は實に社會的罪惡なりとす。社會的罪惡とは、曰く、原稿の二重轉賣、寄稿の違約、此二弊害たる也。今の文界に於ける或一部分の士を除く外は、滔々皆此惡潮流に惑溺せざるなし。二重轉賣を爲すに非されば、寄稿の違約を爲し、寄稿の違約を爲すに非らされば、二重轉賣を爲す。而も罪惡を構成したる文士夫れ自身は恬として是を恥つるの色なきのみならず、寧ろ其狡獪、變詐を以て働きありと誇るを聞くに至ては、陋の陋、醜の醜、吾茫然として自失せざるを得ず、渠等は斯くの如くにして、文士の体面を損せすとなす乎、愚も亦甚しからずや。

足下よ、思へ、僕が編する某文學雜誌に於て往々豫告に背くの場合ありしとを、是僕等が知名の士の名を連ねて、江湖の視聽を引かんとするが爲めにあらで、聊か今の文壇に貢獻する所あらんと思へば也、而して固く是を某々文士に約せしに關らず、將た再三是を督促せしに關らず、終に何等の謝辭もなくして、稿を寄せざると屢〻也。是獨僕が編する所の雜誌のみに非らじ、猶他に是あらむ、其影響や唯單に文士夫自身の恥辱たるに止まらは則ち止む、然れとも啻に此に止らずして、雜誌社、其物の信用を破壞せらるゝに非すや。僕、頃者、知友某氏より一の實例を聞けり、某文士、新聞小說を擔任して、其初めの一二回のみは熱心にやりたれど、其後漸く倦怠して容易に筆を執らす、而して冷然、報酬の要求を爲して曰く、願くは月給の半額を借せ、然らば大に勇を皷して、立ろに一週日分を書せんと、社主是を諾してまづ報酬を與へしに關らす、渠は依然として執筆遲意、僅かに一日分宛を草して、前約に背けり。斯くの如きもの再三、社主、其違約の爲めに少からぬ損害を受くるに至れりと、是獨某文士のみに止らさる也。足下よ思へ如何に是が爲めに書肆の迷惑を來すべきかを、書肆に於て既に

豫告を爲しなから、忽ち此一大變動の爲めに違約せざるへからざるのみか、其利潤の上にも多大の損害を波及し、慘憺たる經營も、水泡に歸するに非ずや。斯くの如くにして、文士は猶ほ欺瞞的惡手段を誘らんとする乎、鐵面皮も亦甚しからずや。

『染屋の明後日』とは、今の商工社會に於ける一の警語也。此言直ちに移して、今の文界に用ふべし。染工がある一定の期間を要するに關らず、其客を欺いて短時間に注文を染め終るべしと明かに約束しなから、期日に及んで是を問へば、低頭平身言を天候の惡しきに託し、理を業務の多忙、職工の缺員に寄せて、一日延はし、二日延し、三日延はし、漸くにして是を染め終るが如き實例は、人の屢〻聞見する所なるべし。文士の違約は是に似て更に甚しき醜陋を極むるに非ずや。第一、報酬を前借し、第二に懇請を容れたるに關らず、容易く約に背いて、一片の謝辭すら寄せず、これ禮を失ひ道に背くの甚しきもの也。殊に報酬の前借を閑却し去るか如きは、是を一種の詐欺と云ふも可也、是一方より云へば、即ち文壇に不忠實なる者也、他の一方より云へば、道義、法律に於ける犯罪者也。斯くの如くにして、猶文士々々とは如何なる面を爲して云ふ

にや、さても文士とは重寶なる者かな、吾人も亦文士の覆面の下に、此詐欺を行はん乎、唯其程に悧好ならざるを如何せん。否乎枚張の面の皮なきを如何せん。是不幸中の幸、苟くも一片の道義心ある以上は、斷々乎として此忌むべき汚風を一洗せざるべからざる也。足下以て如何と爲すや。

第二は原稿の二重轉賣なりとす。是決して實例に乏しからず、今一々其名を擧げなは恐らくは今の小說家とやらの一大恐慌を來さん乎、予は簡單に一例を足下に告けて止まん。

僕是を先輩某氏に聞く。今の小說家が原稿の二重轉賣を爲すや、まづ、小說中の人名と地名とを改め、而して更に題名を改めて、新作の如く云ひ做し、巧みに報酬を詐取する也と。其智や終に及ぶべからず、愚や更に及ぶべからず。小刀才子、徒らに小才を弄して、自己の品性の墮落を曝露す、寧ろ憐むべきに非ずや。斯くの如き醜態を爲す輩に向て、ヒユマニチーを說くは、說くものゝ愚なりと雖も、渠等亦一片の眞情なきにあらじ、既に眞情あらは何を以て其卑劣なる行爲を改めさる、思ふに是を改むる能は

さるは、渠等が薄志弱行、斷して其醜を排するの勇なきに依る乎。

彼の私書を偽造して、金錢を欺瞞するものは、法律上の罪人ならば、原稿を二重若くは三重に轉賣して、不當の利を貪るも亦法律上の罪人に非さる乎。嗚呼、足下よ、渠等は、屢〻此罪惡を行ひて顧る所を知らさる也、是實に購求者の面上に、汚泥を塗るに均しきものに非すや、吾人は斷々として、此汚風を一掃し去らさるべからず、足下以て如何となすや。

十　　三　　梓

辯者あり、曰く、足下の言や、誠に酷、今少しく文士の内情を窺うて後、難すへくんば、大に是を難せよと。文士の内情、吾是を知らさるに非す、知るが故に猶是を難するの必要ある也。

足下よ、足下が既に知悉し給ふが如く、今の文士が生活に困みつゝあるは、主として放蕩、淫佚の結果に非すや。其衣は最も美なるを選ひ、其食は最も佳なるを選ひ、得る所の金を花柳の街に一擲して、美人一片の笑渦を買ふを以て、無上の榮とす。放蕩斯の如く、淫佚、斯の如くにして、猶ほ内情を察せよと云ふが如きは、勝手千萬の極に非すや、自己の衣食を節し、自己の慾情を制して、後、費用猶足らす、終に如上の罪惡を犯すに至ては、猶少しく恕すべきものありと雖も、是十中の一部分に過きす、既に十中の一部分に過ぎさる以上は、吾人の言に反抗して、之を打消すこと能はさるは勿論の事のみ。故に吾人は斷々乎として此二弊害を矯めすんば斃るゝとも止まざるべし、而して其一者として、如上の罪惡を犯せし文士の姓名を、一々發表し、如何なる事情に依て、如何なる醜態を爲せしかを曝露せんと欲す。足下よ、斯の如き過激なる審判を降さゝれは、此弊害は到底去らさるのみならす、書肆、及ひ雜誌新聞等の發行者の迷惑計るべからさるものあらむ、是余か最後の方針を取らんとする所以也とす、嗚呼我文界の道義の振はさる、又甚しいかな。

足下よ、願くは、此問題に對して、適當の所置、方策あらは、是を披瀝するに吝なる勿れ。僕鶴首して、足下が痛切の言、熱罵の辭に接せんとを待つ。頓首。

（三十三年一月）

『與晩翠書』を讀んで高山樗牛氏に質す

樗牛足下。

頃者『太陽』紙上に於て足下が晩翠に與へて、今の文壇を論じたるの書を見る。一言一句、肯綮に當るものあり。殊に足下が常に沈著の態度を取るに反して、慷慨の情字句の間に躍如たるに至ては、如何に足下が今の文士の薄志を嘆し、社會の偏狹を憤るかを想ふに至る。嗚呼足下、少年の血氣、燃ゆるが如き余に至ては、此問題に對して、一層痛切の感なき能はず、されど翻て思考するに、足下の言は、餘りに詩人、小説家に對して好意を表するの傾向なき乎。社會の單調や、沒趣味や、賊に足下の言の如し、文士が清貧に安んずるの精神を缺くも、亦足下の説の如し。而かも足下は猶今の詩人、小説家に對して難ずべきの點なしとする乎、社會が詩人を冷遇し、小説家を侮蔑するの罪、素より恕すべからず、而して、詩人小説家が言行の卑きも亦罪せざるべからざるを知らざる乎。森鷗外、土井晩翠氏の如きは、今の文壇に於いて稀に見る眞摯の

士也、されど、今の文士は悪く鷗外の如くならず悪く晩翠の如くならざる也、淫猥なる肉的戀愛を排して、男らしき詩を求めんとする晩翠の意氣、吾是を他に求むる能はざる也。獨逸文學の趣味を紹介して、詞壇の盲を開かんとせし鷗外の熱誠、吾是を他に見ざる也。紛々たる詩人、小説家、多くは其肉慾を滿たし、虚名を得んが爲めに筆を執るもの、其操行の修らざるは自然の徑行のみ。從て今の社會が詩人を冷遇し、小説家を侮蔑するも亦一面の理なしと云ふべからざる也。足下が此點に關して一言を費さゝるは何そや、足下は是を看過し去らんとする乎。吾曾て晩翠を訪うて今の詩壇を論ずるや、晩翠肩を揚げ、腕を扼し、大に詩人を罵て曰く、『渠等の語る所は一にも戀也、二にも戀也、戀に非されは夜も明けぬと云ふ始末に非すや、而かも其戀を語る中に高潔純白なる詩想を求むる能はずして、大低醜陋卑猥に陷れるは、人をして徒らに嘔吐を催ほさしむるのみ、余は最も斯の如き不健全の詩を排斥す、』と。言々痛切、能く時弊に當る。されど是れ獨り晩翠の罪に非ずして、讀者の罪也、今の詩人なるもの、意氣揚々、バイロンの狂熱を負ひ、ウヲズウヲースの同情を有するを自負する

も、何ぞ其歌ふ所の眞ならざる。浮華に非ざれば則ち輕佻、皮相に非ざれば則ち淺薄、徒らに綺字を連ね、美辭を飾りて內容の平凡を蔽はんとするに過ぎず。殊に自己が失戀もせざるに失戀の詩を作りて得々たるが如き、田舍の醜女に岡惚れせられて、艶福を衒ひ、のろけ出すが如き、噴飯に堪へず。斯くの如き詩は、例令審美眼なき者と雖も、一見直ちに唾棄し去らんのみ。今の詩人が社會に冷遇せらるゝもの、素より社會の偏狹、沒趣味に依ると雖も、又自ら招くの罪に非ずして何ぞ。其身を清めんとせば、まづ自家頭上の汚泥を拭はざるべからず、然らずんば、詩人冷遇の聲は、到底消滅するの期なからむ、足下以て如何となすや。

若夫れ小說家が社會の侮辱を受くるに至ては、其原因一二に非ず、其學識なく見識なきは、慥に其原因の一なりと雖も、最も大なる原因は、品性なく、道義なきにある也。吾をして直言せしむれば、今の小說家は一種の詐僞師也、自墮落の國民也。斯くの如き不節操漢に對して、社會が侮辱を以て酬ゆるは至當の事のみ、吾人は社會の沒趣味を罵るの前に、まづ小說家の不道義を排せざるべからず。足下以て如何となすや、我

は此點に於て足下の高見を聞かんと欲す。

然れとも、今の詩人小說家の中に於いて、能く其体面を維持し、道義を守るもの、なきに非ざる也。詩人としての藤村、晩翠、泣菫の如きは、是を人格の上より見るも、決して難する所あるを見ず、殊に泣菫か故山に歸つて鄕黨に容れられず、父と相抱いて不幸を哭すと云ふに至ては慘の極に非ずや。我は是等の詩人が今の紛々たる俗詩人と同一の冷遇を受くるを悲むもの也。

其他小說家としての露伴、花袋、嵯峨の屋の如きは、純潔眞摯の士也。而かも他の輕薄文士と同一視せらるゝに至ては、啻に其人の爲めに哭せざるべからざるのみならず、抑亦我文壇の爲に哭すべき也。鷗外氏の如き、又露伴等と不幸を同うするもの『鷗外漁史とは何ぞや』の一篇、無限の血涙を字句の間に藏するを見すや。余は足下と共に如上の諸氏に對しては、是を難する能はざるのみならず、諸氏の爲めに、今の社會を痛罵するを辭せざる也。是を要するに、詩人及ひ小說家を辯護するの前に、まづ渠等をして其非行を改めしむるを要す、其醜陋の筆を燒き去らしむるを要す　然らさ

れは、社會の冷遇、侮辱を排し去ると、到底不可能の事に屬せん。

樗牛足下、云ふ所、素より陳套の言、足下の一笑に價せざるを知ると雖も、足下かゆ上の一面を閑却せるが如きを以て敢て一言を呈したるのみ、足下が指教を得は幸ひ是に過ぎず。頓首　（三十三年二月）

青年詩人に警告す

高山氏が晩翠に與へて今の文壇と社會を論じたるの書は、青年詩人諸子に向つて好個の注意を與へたりと信ず。諸子にして若し詩人たらんと欲せは、これ又を以て自己の喉に擬せんとするもの也。エメルソンが詩人を贊したるの言は慥かに詩人か精神的快樂を享受し得るを證明する者なりと雖も、人は精神的糧良にのみ依りて活くるものに非ず、又一方に於てパンと黄金とを得ざるべからざるの必要ありとせは、詩人たるものは此点に於て、最も不幸なるものと云はざるべからず。

詩人か一の短詩を作るに於てすら、其要する所の勞力は決して僅少に非す。一句を得

んか爲めに數月を費し、一章を得んか爲めに一歳を經たるが如き事例は、吾人の屢〻聞く所に非ずや。是を以て唯單に一箇の好談柄に過ぎずとなすは、詩人の腦中を知らざる冷血漢の言のみ。而して今の社會なるものは、則ち此冷血漢の言を實行しつゝあるもの也。今の詩人の報酬なるものは、勞力の百分の一にも價せず、渠か數片のパンと一臠の肉を得るの餘裕すらなき也。斯くの如き時に當て、詩人たらんとするものは、自ら饑寒窟に投せんとするに似たらずや。貧の魔神は其背後に來て詩人の血肉を啖ひ、健康を奪ひ去らんとするに非ずや。此の如き妨害と災厄に堪へんと欲せば、非常の勇氣と忍耐とを有せざるべからず、然らざれば、身は懦弱となり、精神は不健全となり、到底一個の自墮落見となり了らむ、故に若し諸子にして詩人たらんと欲せば、まづ饑寒に堪へ得るや否やの問題を解釋せざるべからず、而して後、確乎不拔の勇氣と忍耐とを以て幾多の困苦を排し得ることを覺悟するを得ば、苦寒決して恐るゝに足らず、貧賤決して憂ふるに足らず、其一呼吸は直にミューズの神の祭壇に通して、不朽の大作を得る必すしも難きに非さらむ歟。詩人此に至て始めて可也、吾人は眞摯なる年少詩人が

晩翠、藤村、泣菫と同一運命に陷らんとを恐れて特に一言するのみ、吾人の言杞憂に終らば幸甚也。（三十三年二月）

地方の某文士に與ふる書

某君足下。

春風今や都門に滿ちて、梅花至る所に笑ふ、思ふに湘陽の地、曾遊の當時と全く面目を異にして、梅花白雲を搖曳し、靜の舞殿の邊、旅客をして今昔の感に泣かしめん乎。文壇の近況、依然として落寞、獨多枯の狀を見る、足下に報導すべきの快事、未だ是を耳にせざる也、例に依て僕の抱負を語らん乎。

曾て『新聲』紙上に於て、僕の革風的言議を公にするや、少からぬ江湖の同情を得たりし也。後同志を糾合して是を實際の間に行はんとしたるも、志業蹉跎、加ふるに俗務身邊に蝟集して、徒らに空論橫議を爲すの譏を免るゝ能はざりし也。心窃かに痛恨の情に堪へず、再び社中の同人と共に革風的事業を試みんと欲して遂げず、失敗に失敗を重ね、蹉跎に蹉跎を重ねて、平生の抱負に負きたるは、僕の大に慽む所なりとす。

僕は以上の失敗に對して、是を償ふべきの責あるを信するもの也、故に余は更らに一個の青年の社團を結合し、まづ文壇に向て、道義的制裁を加へんとす。文壇の惡弊や一二にして足らず、是を一新せんと欲せば、須らく純潔なる青年文士を結合して、此弊風を打破すべきの要を感ず、僕をして暫く志の存する所を述へしめよ。

嗚呼足下。理想は美しく現實は醜陋也。余が鄉里の村塾にありて、夢の如き空想に驅られ、幻の中に東都の狀態を想望せし時や、誠に美はしきものなりき。一朝機に會して、孤身京に入るや、俗塵紛々氣候劣惡、殊に所謂江戸ッ兒的の氣風なるもの、全然地を拂うて、徒らに輕薄浮華の士女を見るに過ぎざる也。彼文壇なるもの〻裏面に至ては更に一層醜陋にして、一点の美所すら認むる能はず、吾をして、匆惶故山に歸て、田園の間に來鉏を執るの可なるを知らしめぬ。然れども僕は曾て商に失敗し、工に失敗し、終に文に志したる者、今如何ともするに由なき也。寧

ろ直前の勇を鼓して今の文壇の關門を打破せん乎、今の文壇に於て最も甚しきは同黨伐異の弊也、正を以て不正を擊ち、善を以て惡を伐つは則ち可也。然れども唯單に自己の權力を爭はんが爲めに、他を擊つは果して正當の行爲なりと言ふを得べき乎、視友社派は其社友の外と親まず、赤門派は赤門派以外と交らず、互に壘を築きて、相睥睨するに非ずや。渠、是を排すれば、是も亦渠を排し、渠、其非を攻むれば、是も又他の非を難して、假借する所なき也。而かも是、學理の爭に非す、美の爭に非す、唯單に感情の上より嫉視反目するに過きざる也。渠等の胸襟の小亦甚しからずや、余は第一に此弊を破らざるべからず。

第二に破るべきものは渠等が放佚也とす。こは評論家の側に於ては極めて少數也と雖も、創作家殊に小說家に於て屢〻見聞する事實なりとす。今の小說家が往々財に窮して原稿の二重轉賣を爲し、報酬を前借して是を其儘に放任するが如きは、蓋し不品行の結果に非すして何ぞ。渠等の一ヶ月毎に收むる報酬は比較的に多量也、多きは月、百金に上り、少きも三十金を得るに難からざるべし。而かも此百を得るもの、猶ほ日常の

生活に窮し、僅かに一二金の小額に困む者あるは、是蓋し一家の經濟を理するに疎なるが爲め也、十金を得れは十金を散し、五十金を得れは又直ちに五十金を散し去て、自己が酒色の資に費し了る。若し是を事實とせは、渠等は生活難を唱ふるの權利なき也、其報酬の多寡を議するの資格なき也。游惰放逸、昨は南巷の花を折り、今は北郭の柳に戲れて、蝴蝶の春に狂ふが如く、自己の責任を顧みず、体面を維持する能はず、徒らに其父母をして困窮せしめ、弟妹をして滿悲に泣かしめ、一個堂々たる男兒と爲つて、未た一家を保つと能はざるは、是其放佚の結果に非すや、吾人は須らく此壞風を排せさるべからず。

第三に打破せさるべからざるは、渠等が道義の範圍を脫して、醜陋の材を採り、醜陋の事實を叙するの弊風なりとす。文學が人の性情に感化を與ふるは、今是を論證するの要なし、唯今の社會に於ける家庭の無味索寞を補はんとせば、須らく清新純潔なる文學に依らざるべからず。而かも今の文學なるものは、徒らに材を狹斜の街に取りて、男女の痴話を書き、甚しきに至ては、閨房、生殖機の事を大膽に直敍して顧みざ

る所なきもの多し、斯くの如きものを、如何にして家庭の間に誦するを得べき乎、唯徒らに人の性情を汚すに過ぎざる也。

故に今後斯くの如き醜陋なる作物に對して、相當の筆誅を加へ、更に百合の花の露に沾ひながら、曉の星を宿すが如き、清く、麗はしく、一塵にすら汚れざる純潔なる者を迎へざるべからず。

以上の三点は、素より弊風の一端を擧げしに過ぎず、要するに僕の云はんとする所は如何にして是等の醜風を革新すべきかにあり、方法とは先きに述へたる青年文士の結社團なりとす、然れとも單に青年文士と概稱するは吾人の好まざる所也。純潔なる青年文士に非すんば、決して此改革的事業に與る能はす。弊衣破帽、短褐孤杖、大道を濶歩して恥ぢざるの人たらざるべからず、香水を振りかけて頭髪を奇麗に分け、新調の洋服に紳士を氣取るものは共に此事業を爲すべからず。夙起夜寢、一日も怠るなく、其學殖に力め、素養に力むるものに非されば、此事業に與る能はず、漫に閲歴と稱して、鼓樓に登り、女色に耽るものは、是に參するの資格なし。總ての人に對して能く人道を守り、文學の上に於ても、人道を皷吹するの意氣なきものは此事業に與る能はず、彼女郎文學に通を衒ひ、粹を誇るものゝ如きは、全然此事業に參ずるの權利を拋ちたるもの也、要するに青年らしき青年、則ち青年の本領を守て誤るなきの文士を結合し、而して文壇に於けるあらゆる弊風を除去せんとする、是僕の志也。其實際的方法に至ては更に是を次便に述ふる所あらん、足下の高見に至ては、僕の切に聞かんとする所也、頓首。（三十三年三月）

新聞小說

頃者何すれぞ、作家の新聞社會に投ずる者の多き。曰く、某は筆を戟せて、關の西に赴けり。曰く、某は波を越えて、北海の天に行けり。曰く、某は某新聞雜報主管の任に當れり。曰く、某も亦新に起れる某紙の三面記者となれり。曰く何、曰く何。其他吾人の知悉せざるもの、思ふに少なからざる可し。而して是等の多くは、新進作家中の尤にして、文壇の麒麟兒を以て目せられたる者。斯くの如きの現象は、果して慶す

可きことなる乎。

操觚の事業中俗の甚しきこと、新聞の如きはなし。地は、紅塵萬丈鐵車雷の如くに轟いて、烟筒黑龍を舞はすの處。人は、輕薄片々、韻事を解せず、詩美を知らざる乾燥無味の輩。此所に居りて此人に交り、一定の字數を以て制せられ、一定の時間を以て縛せらる。而して其新聞の位置によりて筆を曲げ、讀者の種類によりて、趣を構へざる可からず。深刻奇拔のものは、當に斥けられて、單調平凡僅に三面の記事を敷衍せるが如きもの、多くは歡迎せらる。斯くの如くんば、いかなる天才者と雖も、其伎倆を充分に發揮することと能はざるや知るべきのみ。弦齋は今の新聞小說家のうち最も成功せるものと稱せらる。而して其成功の秘訣は、たゞ彼れが單純なる、くだらなき勸懲主義らしきものと、極馬鹿氣たる文章とによりてのみ。『朝日新聞』は『萬朝』に次いで、多くの讀者を有すと云ふ。而も桃水の『行合心中』の如き、淺薄平凡とすら稱し難きものにても、間に合ひ居るに非ずや。要するに新聞小說として價値あるは、含蓄なく、主張なき平凡淺薄のものならざる可からず。是を以て此境に入る者の、次第

に俗了し去るは、自然の趨勢也。十年以前の遲塚麗水は、其豐富なる想像、現實の世界を超脫して、天葩の奇馨を採るの概ありき。而して今や僅に弦齋一輩の徒の間に伍して、平凡なる新聞小說家になり了りしもの、吾人の言を俟して餘りある也。重ねて云ふ、喧囂の巷は靜思の暇なく、俗界は走屍行肉の徒を迎ふ。靜に文を鍊り、徐に想を練ひ、他日の大成を期するものは、斷じて足を新聞社會に入ること勿れ。彼の、靜定の工夫、是れを忙裡に試むと云ふが如きは、只一場の放言に過ぎざるのみ。

殊に雜報に筆を採るが如きは、亦憐む可からずや。身は高く標榜して、堂々文士と稱する者にして、春街情巷の醜話、市井賤坊の瑣事、若しくは、横町のボヤ騷き、隣りの夫婦喧嘩迄記して、其務となす、天下斯くの如く不見識なる者あらんや。人は必ず自ら愛惜する所なかる可からず、自己の地位を顧み、自己の天職を躰し、常に昂々然として世に立つは男子漢の本色也。自ら曲げ、自ら屈し、他の膝下に甘ずるが如きは、是れ小人匹夫の事のみ。今の文士の、理、當に社會の尊敬を受く可くして、冷視薄待せらるゝ者の多きは、蓋し彼等の好んで招ける所。自ら侮りて、而して人の侮りは禦ぐこと

と能はざる也。（三十一年六月）

新聞記者の品性

新聞記者となるの道は、之を『世界之日本』記者に聽くことを得たり。不幸未だ新聞記者の品性を論じたるものあるを聞かざる也、彼等は社會の耳目を以て居り、輿論の木鐸を以て任じ、天爵法官と誇り、無冠宰相を氣取る。然れども社會は『羽織ごろ』の尊號を上つて敬遠主義を取りつゝあるにあらざる乎。世人は『新聞屋』と呼捨にして、毛蟲の如く待遇しつゝあるにあらざる乎。彼等は素より衆愚與みすべからず、世俗畢竟盲目のみ、乃公を煩はすに足らんやと一嘯に附し去つて白眼冷笑、獨り自ら高しとするの坦懷と雅量とに乏しきものあらざるべし。然れども鏡面の影は實体の反映也、輿衆の聲は天爲の審判也、彼等の素行修まらず、彼等の品位高からず、猥りに酒に酒し、色に溺れ、往々筆を役して強迫の具に代へ、ペンを動かして私利を營まんとし、殊に其末派末流に至ては、人の私行を摘發して金錢騙取の大惡を働くものあるは、決して彼の惡徳新聞を以て指目さるゝ一連のみにはあらざる也。猶中叢あり、高潔の士、往々韜晦して其社中に在るもの之なきにあらざるべしと雖も、所謂新聞屋氣質なるもの滔々風を成し、弊根牢として拔くべからす。假令其一半を社會の誤解に歸するも、彼等は到底其半面の罪責を免るゝ能はざる確證を握られ居る也。蓋し新聞紙其者は彼等の自信する如く社會の活ける耳目なるべく、新聞記者の職務は、神聖なる天爵の法官なるべし。而も耳目其用をなさず、法官其器にあらず、沐猴の衣冠、自ら恬然たるが如きは今日彼等の狀態にあらざるなき乎。內地雜居は眼前に迫れり、教育あり品位ある歐米の新聞記者は又內地に入來らん、此際吾人は文明の紳士として耻しからぬ人格の修養と、品性の陶冶とを切に彼等に向て希望せざる能はず。殊に後の新聞記者たらんとする青年文士に對しては、最も此一事に留意せられん事を勸告して止まざる也。

（三十二年一月）

同情の範圍

爾の敵を愛せよとは博愛の絶頂也、徳禽獸に及ぶとは同情の極致也。ステパノが敵のために祈れりしは、やがてパウロの悔改める所以にして、ツゲルヂーフが傷ける母鴉を憐みしは、彼が他日大文豪の名を得る因緣となりし也。今の文士素より同情なきにあらず、或は女郎の爲めに泣き、或は藝妓の爲めに憂へ、或は細君の境遇を憐み、或は失戀の處女を悲む、又往々淺からずとせず。然れとも其範圍の何んぞ甚だ狹小なるや、其同情の作用のまかく千偏一律なるや、日本の大國辱たる海外出稼の醜業婦を聳誅し去るは論客の事也、彼等の境遇に萬斛の熱涙を濺いて一種の哀音を傳ふるは詩人の博大なる同情にあらさるなき乎。紡績といひ織布といひ、生糸といひ、鉄工といひ、諸種の會社製造所に勞働する男女の職工が、墮落腐敗を救濟するは、宗教家の天職也、彼等の心情を彈發して空靈の琴線に觸れしむるは、文士の深厚なる愛情にあらさるなき乎。孤兒院はあり、未だ孤兒院を描きしものあるを聞かず、乞丐は累々たり、未だ乞丐を題目としたるものあるを聞かず。監獄の裏面は。如何に斷腸傷心の事を以て滿たされつゝある乎。華族の家庭は如何に紊亂無秩序を極めつゝある乎。車夫社會は如何、巡査は如何、僧侶は如何、俳優は如何、相場師は如何、吾人は此等の疑問に對して、甚だ首肯すべき作物の供給を得ざるのみならず、殆んど未拓の荒野に屬するものあるにあらずや、斯の如きは文士の閲歴問題と關聯し、又觀察の高低深淺に基くものあるべしと雖も、畢竟、同情の博大を缺けるが故に、冷眼以て之を看過し、敢て執着する所なきに由る、詩材は渚砂の如し、唯同情の足らざる也。（三十二年一月）

作家と風紀問題

これ單調なるが如くして而も決して忽せにすべからず。The greate is the mission of poets. 大なる思想は果して此の遊蕩子の腦裡に索むることを得べき乎、荆棘より葡萄を取り疾黎より無花果を得べからず、大なる思想は又大なる品性を有する人の所產たらざるべからざる也。吾人は必ずしも文學者に天使たれよと强ふるものにあらず、又必ず

しもストイク的の難行苦行を冀はず、然れども文學者は已に宇宙の美神に接吻して清高なる理想の頂點に鼓吹するものなりとせば、少くとも其人格に於て俗流に一歩を抽き普通人士の模範たり標識たる所勿るべからす。イヤに色男ぶりて、にやけ言葉を遣ふが小説家の本領にはあらざるべし、時流の衣裳を著飾りて舉止に優倡を學ぶが文學者の能事にはあらざるべし。女郎買、待合入乃至後家荒らし、姦通私通、其他吾人は一々之を列擧するに忍びずと雖も、兎に角彼等は得意然として濡事師の醜名の下に斯くの如き悪徳を働きつゝあるにあらざる乎。此等の俗才が恣に跋扈跳梁せば遂にヒウヾンの劇場破壊を我國に再演せしむるやも計るべからざる也、試に見よ歐米の詩人文學者として尊重せらるゝ者を、彼のウオルツウオルスは實に清廉高潔の士君子なりし也、彼のミルトンは實に自信力行の熱血漢なりし也、カーライルは女皇の前膝を屈せず、ユーゴーは小傘倫を面罵して怖れず、深遠の哲理觀を寓して自ら高く一世に標置せるトルストイ伯は如何、基督を唯一の理想として無限大を謳歌せるテニツンは如何、自ら漂蕩兒と名乘れるバイロンも實に幾多の美徳を有したりし也。中ごろ懐疑の巷に彷徨したりしシルレルも遂に獨逸人士の思潮を高所に導き得たりし也、小文士を以て自得するものは暫く問はず、苟も詩人文學者を以て自ら任ずるの士は、須らく明治理想の gentleman たるべき資格を備へざるべからず。而して吾人は此の希望の滿足を得んがために、彼等に宗教信者たらん事を勧告せんと欲す、必ずしも耶蘇教と云はず又佛教と云はず、要は教理の堂奥に參して此と同化することを得ば乃ち足れり矣。されど此の希望猶彼等の容るゝ所とならずんは、せめて彼等にバイブルを研究せしめ、若くは佛典を繙かしめて、至高至上なる理想の半臠だにも翫味せしめん事を冀ふ。吾人の屢〻此問題を繰返すもの、實に文界第一義の重要問題にして、而も他の批評家論客が多く忽諸に附する所なれば也。今や韶陽熙々人は酗醉して喜ぶ、されど吾人の性素固僻椒頌の屁を嘔むを希はず、先づ筆を呵して一喝自ら快と稱す。（三十一年一月）

趣味の偏狭

若草萠ゆる野に、咲く紫の色ゆかしき菫の花、錯綜して一片の綿を織ると、洋々たる

大海、風吹きすさびて波濤洶湧、白雪と亂れ、珠玉と散り殷殷轟轟、天を破らんとすると、何れか美なる『梅一輪〳〵づゝの温かさ』と『猪も共に吹かるゝ野分哉』とは何れか美にして、何れか醜なる。『花咲いて鳥居小さく見ゆにけり』と『とあろてん倒まに銀河三千丈』とは何れか醜にして、何れか美なる。一は纖麗優美、一は豪宕壯大其美たるに至ては何等の異なる所なきに非ずや、而かも我國の人士が、唯單に優美纖麗の美を見て、豪宕壯大の美を認めざるは何の故ぞ。是趣味の上について忌むべき現象なりとす。

蓋し我國人の趣味は極めて偏狹也、渠等の大部分は蝶と菫の美を解して、劍と虎との美を解せざる也、梅一輪〳〵づゝ咲き匂ふ纖細的美を謳歌するも、一天打曇りて白雲去來、寒風颯然として砂を飛ばし、木葉を散らすの豪壯美を顧みざる也。櫻桃社頭に匂ひて赤鳥居の花の間よりほのかに見ゆるが如き優麗的美を謳うて、銀河三千丈、一氣直下し來て、草木震ひおのゝくの壯大的美を解せざる也、『荒海や佐渡に横ふ天の川』の大觀は、多く渠等に迎へられざるに非ずや、『雲の峰いつかくづれて月の山』の壯觀は概して渠等の間に歌ばれざるに非ずや。果して然らば渠等の趣味が如何なる点に存するか知了し併べきのみ、其偏狹なる寧ろ憫笑すべき也。

今是を古來の文學藝術の上に徵するも、所謂壯大的美なるものは、僅に十分の一すら認むる能はざる也、『萬葉集』は比較的這般の分子に富むもの、而かも、其大部分は『わが背子か挿頭の花におく露をさやかに見よと月は照るらし』の優麗に非されば『戀しくば筐にせよと我背子がうゑし秋萩花さきにけり』の優婉美に非ずや、下て『古今集』となり『新古今』となるに至ては、一層優美纖麗、菫に眠る蝴蝶の如き趣味の增加し來れるを見る。轉して之を俳諧に見るも亦然るに非ずや、『猿蓑』『炭俵』『續猿蓑』等を觀へば略ぼ其其一般を察すべき也。下て天明時代に至り、千古の俳傑、蕪村、赤手狂瀾を排するの時に及んで、比較的壯大美を謳歌したりと雖も、是を全体の上より見れば、極めて、僅少なる部分に過ぎざる也。三度轉じて、他の散文に徵するも、『祝詞』『古事記』等を除いては、所謂優麗美を以て一貫するのみ。其他の藝術亦概ね然りとなす。吾人は美學上の批判を煩はさゞるも、我國人の趣味が極めて狹小なるとを斷定するを

得べし、是最も忌むべきの病弊也。

吾人が幽玄と云ひ、温雅と云ひ、平淡と云ひ、古雅と云ひ、優麗と云ひ、纖細と云ひ神韻縹緲と云ひ、豪宕壯大と云ふ、各趣味に於て異り、性質に於て違へりと雖も、美の一要素たるに至ては則ち一なりとす。故に若し美を愛せんとせば、温雅可也、平淡可也、古雅可也、優麗可也、纖細可也、壯大、豪宕、是も亦大に可なりとす。必すしも、優麗纖細のみを愛せよと云ふの制裁なき也、而かも吾國人が獨り此に偏する所あるは、是眞に美を愛するものに非ず、我詩人が蝶と蕚を謳歌して劍と虎とを閑却するは、是決して美を解するものに非ず、何ぞ壯大を謠はざる、何ぞ豪宕を愛せざる、怒濤澎湃、山立十丈巉巖に激して忽ち崩壞し雷霆の音、天を劈かんとするの壯大に接して、誰か襟懷を濶大にせざるものぞ、一笠孤杖、斷崖を攀ぢ、蔦蘿に依り、萬丈の高岳に登て下界を俯瞰し、天空を仰視して、誰か意氣千秋の概を生せざるものぞ、徒らに薄に涙を潸くの同情あらば、何ぞ比しく巨岳大海に同情せざる、吾人は我詩人文士に向て切に此点に顧慮せんことを望まざるべからず。吾國人に向て其同情を大にせんことを願はざるべからず、若し然らずんば、我國の文學は一個偏狹の畸形文學となり、我國人は一個の偏愛的好尚者として、他の憫笑を甘受せざるを得ざる也、請ふまづ趣味の偏狹を排し去れ（三十三年四月）

第一流の讀者

文學は決して人を害するものにあらず、唯其本質に背けるもの、若くは讀者が一種の虚榮心に驅らるゝ場合に於て大なる害毒を與ふ。文學其物は決して、毒藥視すべきものに非ざる也。

今日の小說は、淫靡卑陋、文學其もの、本質を傷けつゝあるにあらずや、今日の年少讀者は、虚榮心の爲めに創作に熱衷して他を顧みざるにあらずや、斯くの如くにして、文學排斥の聲を聞くに至れるは、偶然にあらずして寧ろ自然の結果也。

作家の趣味が相率ゐて淫蕩に趨けるについては、吾人曾て之を難じたるか故に、今又云々するの要なし、唯讀者の虚榮心に至ては、一言せざるべからざるものある也。

虛榮の二字、之を說明せずと雖、全然排斥せざるべからざるの理由は、寧ろ明々地に過ぐ。

渠等が唯單に讀者の地位を以て滿足すると能はず、進んで文を作り、詩を作り、之を活字に附して、自己の名の紙上に現はるゝを樂むに至れるは、これ既に一歩、虛榮の混濁中に投したるものにあらずや、而して自作の大に歡待せらるゝを見るに及んでは、得意滿面、直に讀者　地位より作家の地位に轉じ、虛名の大ならんことを願ふに至る、此に至て、渠は全く虛榮心の奴隷となりしもの也。

然り吾人は全　之を排斥せんとはせざる也、若し渠等にして、ゼニヲスを有するならんには　進んで讀者の域より作家の範圍に入るを妨げざる也、然れども斯くの如き秀才、果して幾人ありや、將た渠等にして其課業を開却せざらんには斯くの如き異議を唱へんとはせじ、然れども這般の著實なる青年果して幾人ぞ。

渠等の事態既に斯くの如しとせば　渠等は作家たるの資質なきもの也、而かも自ら之を揣すして、唯虛榮心の爲めに、生活の實務を抛ち、學校の課業を無視して徒に自稱

文學者を氣取るに至ては、これ既に一個の不生産者と、一個の懶惰者とを生じたる也。

不生産者と懶惰者とは、社會に於ける一種の罪人也。社會は決してこれ等のものに向て何等の同情を寄せざるのみならず、進んで之を酷遇し虐待するに至らむ。これ或少數者に限れば可也、然れども幾百もしくは幾千を以つて數ふるに至ては、文學に依て如何に身を誤れるもの多きかに驚かむ、然れどもこれ文學の害にあらずして、渠等が自ら求めて其渦中に投したるのみ。文學排斥の誤謬論、屢々堂々たる識者の間に唱へらるゝは、全く此に因す。

果して然りとせば、吾人は斷々乎として這般の惡弊を絶滅せざるべからざる也。

余は乃ち渠等に警告せんとす、區々たる凡庸作家たらんよりも、寧ろ第一流の讀者たるを期せよ、と唯單に作物をのみ讀むに止らば、決して虛榮心に驅るゝの憂なし、虛榮心に驅らるゝなくんば、決して不生産者と懶惰者とを生ずべき理由なし、懶惰者と不生産者を生ずるなくんば、文學排斥の聲は、其一半を減するに至るべき也。

思ふに今日の社會は、讀書眼に於て、極めて幼稚なるもの也、曙山、弦齋の評論は、

僅かに之を証す、稍進歩したる讀者と雖も、未だ第一流の人を認むる能はず、大抵第二流以下の人士のみ（此等級は坪内博士の說くところに從へる也）斯くの如くにして文學の進歩改善は、終に何等の功をも收むる能はざらむ、何となれば、如何に高潔なる文學を產するとも、社會に於て之を迎へずんば、書肆は止むを得ず、下等の作を以て、社會の意を迎合せんとすべければ也。

故に眞正なる文學好愛者は、一方に於て、自己の實務に力むると共に、余暇を劈いて東西の作物を味ひ清新高潔の趣味を迎へ、自己の知れる人々を指導するに力め、著眞なる作家の味方たらば、文學改善の動機となり、文學排斥の聲を減じ、而して又不生產者を出す弊を減ずるに至らん。之吾人が區々の凡庸作家たらんよりも、第一流の讀者たれよと云ふ所以也。

試みに思へ、苦吟鏤琢、漸く一篇の詩を作りて平凡徒らに冷笑を買はんよりも、セークスピヤの博大、バイロンの熱烈、ユーゴーの豪壯、ウヲーズウヲースの清新、李白の飄逸、韓退之の醇正等東西の作物を味ひ來るの優れるに如かざることを、これ余りに無禮の言なるが如しと雖も、露骨に、淡泊に、明々白々に云へば、即ち斯くの如き也。

然れども詩を作り、文を作るものゝ中に於いて之を筐中に藏して自ら樂み、若くは唯何等の意なくして、之を雜誌新聞等に投するものあらば、吾人は之を難する能はざる也。されど前者の安全なるに反して、後者は恐らく例の渦中に陷らひ。これ殊に戒心一番を要す。（三十三年九月）

實質ある文壇

名と實とは決して抵觸するものにあらずして、半隨するもの也、背反するものにあらずして合一するもの也。若し此約束に背いて、名と實と稱はざるの場合あらんか、其名は眞成の名にあらずして、之を虛名と云ふ。吾人は現社會に接觸して虛名の多きに堪へざる也、政界も虛名也、書界も虛名也、商界も虛名也、殊に今の文壇に於て虛名の

最も旺んなるを見る、これ吾人の痛嘆に堪へざる所也。

世に惡むべきもの少からず、而してわれは虛名を其一に數へんと欲す、實を有せずして、徒らに名を盜む、これ一種の詐僞にあらずや、今の文壇は實に這般の惡德者を以て滿されたる也。

何を以てかくの如き暴言を吐くか、乞ふ其理由を聞け。

思ふに、斯くの如き異現象を呈するに至りたるは實に時代の思潮に依れる也。蓋し今の文壇を以て幼稚也、拙劣也と云ふものあれど、之を七八年前の文壇に比し來れば、實に長足の進歩を爲せるもの也と言はざるべからず。或は心理小說となり、社會小說となり、美術の評論となり、藝術の鑑賞となり、幾多の方面に於て、從來よりは、數歩を拔くを見る。之を世界文學の大局より見れば、素より云ふに足らずと雖も、我國の文學としては、中々に重視するの價値あり。

されど七八年前の文壇は決して今日の如く其進路を拓開しゆくべき光明に接せざりし也。闇黑にして黯澹、唯目的もなくして、闇中に飛躍するに過ぎず、斯くの如き混濁

時代に於ては、少しく伎倆あるもの、忽ち迎へられて、作家の列に加はり、跳梁跋扈、恣まに文界を混亂するも、未だ之を難するものすらなかりし也。

從て當時の小說家として一家を成せるもの、充分文學者たるべき修養と人格とを有するものにあらず、大抵自己の道樂より他の事業に失敗して、行く所なく、終に文界に投じたるもの多き也。紅葉の如き、小波の如き、柳浪の如き、或は法律に失敗し、或は醫業に失敗し、或は實業の方面に失敗して、此に投じたるものにあらずや、これ獨り三子に止らず、其大部分は此經歷を有するもの也と云ふに至ては、吾人呆乎として自失せざるを得ざる也。

素より塚原蘇州の如きは、慷慨激烈の人、政界に運動して、屢々獄に投せられ、悲憤激越の情禁ずる能はず、意を政界に絕ち、筆を驅て滿腔抗憤の氣を吐露し來る。かくの如きは、猶多少男兒漢の面目を見るべき也。されどこれ寧ろ異例と爲すべし、其多くの部分は道樂より轉じて、文界に入り來りしものいみ。

故に渠等の名聲の比較的傳播せらるゝと雖も、實際の伎倆に於て、能く之に恥ふものあ

りや、紅葉、露伴、の二子を除けば、概して云ふに足らざる也、嗚呼かくの如き文界を有せるは我國の恥辱にあらず哉、これ神聖なる文壇にあらずして、虚名に汚れたる文壇也、虚名に汚れたる文壇は、實質に於て全然空虚なり、空虚なるが故に、薄弱也薄弱なるが故に倒れ易し、憐むべきは虚名の文壇なる哉。

然れども物は決して停滯を免さず。常に流動し又能く變異す。

虚名の文壇は、何人か現はれて、之を革新するの機運に會すべし。吾人は慥かに此潮流の横溢しつゝあることを認むるもの也、實質ある文學、根底ある文壇は、實に此潮流より生れ來らむ。

これ如何なる潮流ぞ、曰く、從來の惡弊を打擊し盡さんとするもの、及び詩想空虚なる俗文士に反して眞に修養蓄積を爲さんとするもの、此二樣の思潮を指せる也。

見よ、今の青年文士にして、將來大に爲すところあらんと欲し、一方に於て人格を作ると同時に、西歐文學の研鑽に熱中し、廿世紀の新文士として覇王の桑冠を戴かんとする熱誠の士あるにあらずや、將に又眞摯嚴正、文界の腐敗に慨して、直言直筆一歩

を假さず、之を論難し、辯詰するものあるにあらずや。

これ等純潔なる青年文士が相協力して、文界革新に力むるところあらば、空虚なる文壇を破壞すること決して難きにあらず、否、難きにあらずして、既に破壞せられつゝある也、而して青年文士が伎倆を揮はんとを待ちつゝある也、果して然りとせば、吾人は須らく實質ある文壇の建設に力めざるべからず。（三十三年九月）

文學と實世間

美は美の爲めに存すとの見地は、やがて美も亦人間の爲めに存するとの眞諦に到達するに及んで、文學と實世間との問題は、愈、其威嚴を加へたるもの、如し、蓋し其所謂、實世間なる語義に就ては、大に考究すべきものある也、

若し實世間とは實際社會即人間世界の事を指せるものなるべき乎、否、斯の如き疑問はノンセンス也、何となれば、人間を描かざる小説は、到底成立するの謂なければ也、然らば實世間とは、世間眞相、若くは人間の眞意義と云ふ程の義に解す可き乎、

蓋し今の文學者の多數が描く所のものは、淺薄也、輕浮也、未だ人間の中心に徹入して其肺腑を抉し來る底の妙文字を求む可からず、這般の要求は遂た失當に非らずといふべし、而も吾人は猶、他の意義の存立し得べき事を信ず、即實世間とは當時の社會の人心及び事件、風俗、習慣等の謂也。

斯かる意義に於ての實世間は即彼の時代精神論等と氣脈相通ずるものなきこと非らず、問題や頗る宏汎也、故に吾人は、其當時の事件と云ふ一點を捉へ來りて、試みに之を觀んとす

如今、東洋の風雲轉々穩ならず、機一發せば、世界を挙げて修羅の劫火に附し、大亂又大亂、日本帝國の同胞は先づ、其第一の犧牲たる運命を荷はんとす、思念一度茲に到れば吾人、慄然として肌に粟し、冷汗の腋下に淋漓たるを禁ずる能はざるものあり。

此の時に當りて、政治界の紛亂は云ふに及ばず、實業界、教育界、宗教界、亦動搖して日に益多事也、而も文學界は宛然たる武陵桃源の別天地を開き、僕不關爲的の態度を取りて、嘗に伏り、お染久松流の戀愛談、女郎文學等をのみ繰返し、悠々閑々たるが如きものあるに至ては、其呑ン氣サ加減に感かざる能はざる也。

斯く云へばとて、吾人は、文學者に囑して「きわもの師」たらん事を冀ふものにあらず、否「きわもの師」たるは世間の意を迎合する所以を含む、斯の如きは斷して不可也。然れども其刻々に吾人の眼前に現はしつゝ去來する事相の中に詩美を認め能はずとは信じ得ざる也。「きわ物」を「きわ物」として描くは、俗輩の事也、「きわ物」を詩化して、同時代の社會人心に一大暗示を與へ、一大感化を刻み、愛國の精神を燃えしめ、偉大なる觀念を皷吹し來るものは、一に卿等文學者の責任にあらずや、又其天職の存する所以にあらずや、

吾人は這般の秋に際しては、彼のストウ夫人の『アンクル、トマス、ケビン』が北軍に十萬の援兵以上の勢力を寄與せしといふ美譚を追憶するの念に堪へざる也。ストウ夫人は一巾幗にあらずして、堂々鬚眉の作家、國家に對して一の爲す所なく、猶ほ慨然文學者と自稱して世治文壇を横領するの權利ありや、嗚呼ストウ夫人地下の笑を如何せん

（三十三年七月）

批評と私交

評家の筆を提げて紙に滋び、尚は法庭に嚴たる判官の如かるべし、非違を檢し、邪曲を懲さんが爲には、富貴に阿らず、威武に屈せず、彈劾檢舉憚るなきを要するが如く直筆讜言正を守り公を持して、一字枉くるなく、一句掩ふ所あるべからず。若し批判斯くの如くなる能はずんば、寧ろなきの勝れるに如かざる也。今の文壇評家の多き殆んど作家に次き、新聞に倚り、雜誌に倚り、旗幟を樹て、相下らず、壯觀人を驚かすと雖も、正言讜筆毫も情實の爲めに束縛せられざる者、知らず幾人を屈指すべき乎。己に慊らざれば、狂犬の如く吠え付くの機會を求めて、漫罵冷笑を逞うし、変りある者は、筆を極めて過褒激稱し、短所尚は綿縫辯護に汲々たるもの、實に一般の狀なる也。腐敗せる漢詩壇の如き、新聞の短評の如き、今暫く措き、純文學の批判に、這般の弊、風をなすは、極めて慨す可き事ならずや。吾人は此點に於て、大町桂月を多とす。人は云ふ桂月は情感の士也、激すれば勃然として色を作し、悲しめば潸然として泣く、終に冷靜なる批判に適せずと。言やよし、而もこれを以て直ちに評家の資なしと斷ずる勿れ。彼は今の批評界の頽弊たる私交と批評との混淆に、一歩も足を投ずる左し。十年學窓を共にせる知己も、時に熱罵して顧るなく、面に唾せんとする敵手も、或は稱揚して措かざることあり。稱すべきに稱し貶すべきに貶す、直筆讜言の評家、大町桂月の如きは、蓋し黨同伐異の文壇稀に看るの快筆(三十年十二月)

小栗風葉に與ふ

風葉足下。

文壇寂寞として振はざるの時、足下が屹々として、日夜筆硯に親み、毫も倦怠する所なく、屢〻大作雄篇を草せんとするの意氣あるを見るに至ては、足下の文に忠なるを思ひて、聊か意を強ふするに足る。

足下は鏡花と共に牛門の二秀才也、牛門の二秀才にあらずして、文壇の二大秀才也、鏡花氏の著想や文章や懊婉や警拔の妙を盡くして容易に他の追陪を免さず、嶄として

擬秀、自ら他を拔くものあり、此点に於て、足下は鏡花子の敵にあらず、然れども行文の纖麗なること、五彩の絲の如きに至ては、足下獨特の文想、鏡花子と雖も、其上に加ふると能はざるべき也。足下以て『小紅葉』の名を恥つかしめずと謂つべし。

其想の濃艶なること、牡丹の露に咲き亂るゝが如

然れども舊態依然として『蟲惡流し』『下士官』等の陋劣なる或一種の淫事を記するに至ては、吾之を厭棄せんと欲す、足下は社會風紀の上に全然色盲なる乎、何ぞ醜態を重ねて、而かも恥つる處なきや、厚顏も亦甚しいかな。

さらでだに社會は、淫靡卑猥なりとして小說を蔑視するの時、斯の如き卑猥の作物を出すは、益々小說をして文學の下層に置かしめ、亡國の根原なりと排斥せしむるに至るを知らざる乎、小說家は敎師に非ず、傳道者に非ず、されど或一面に於ては敎師也、傳道者也。眞理を敎へ善德を傳ふべきもの也、若し小說の中より斯の如き分子を除き去らば餘す所は何ぞ　嗚呼餘す所は何ぞ、社會に向て何の寄與する所かある、何の貢獻する所かある、唯人をして愉快を感せしむるに止らば小說よりも猶優りたるもの多し、足下に至ては更に大なる害毒を加ふ、小說は人心を腐敗せしむるを以て唯一の目的とする乎、小說の本能は閨房の事を畫かざれば認められざる乎。

足下よ靜思せよ、今後の小說は其必須條件として眞理善德を包含せしめざれば終に社會より排斥せらるゝの傾向ある事を。幼稚なる我國の社會に於ては未だ斯の如きことを見る能はざれど、此風潮は大に歐洲各國の文壇に瀰漫しつゝあるを知らざる乎、英國文壇に於て「ロバート、エルスミヤ」の歡迎せらるゝは何の故ぞ、「デビット、グーエー」の喝采せらるゝは何の故ぞ、是道德的分子を含むが故に非ずや、トースト、イの作物の嘖々として嘖傳せらるゝも又是が爲めに非ずや。我國の如きも漸次此傾向を帶ぶるに至るべき也、足下は此時に於て全く一文の價すらなからん、足下の末路を推想し來れば吾は一掬の涙を洒がざるを得ず。

足下よ、靜思せよ、願くは道義の一點を顧慮して後筆を執れよ。足下の才思をして空しく徒事に歸せしむるは吾の欲せざる所也。足下の才筆をして徒らに醜陋の事を記せしむるは吾の希はざる所也。紅葉門下の秀才たる風葉足下、願くは此際に於て靜思せ

よ。（三十二年十二月）

失戀を吹聽する者

新躰詩に熱する一青年、斯道の某名家を訪うて談なかばなる時、突然手巾を懐にとりて、朱記せる文字を指さして曰く、我れ失戀の悲しさに、わが肉を傷り、わが血を以て、一篇の悲歌を手巾に書きしと。語り終りて揚々得色ありきと云ふ。讀者希くはこれを以て、一場の笑柄視する勿れ。斯くの如きは、文學を好める青年の間には、敢へて珍らしからざる所也。試みに青年文學雜誌を繙けば、彼等が得々として、失戀を吹聽するに驚かむ。夫れ、年尚は壯にして、青春の血溢るゝ時、異性を思ふは自然の情、固より尤むるに足らじ、而も思ひ達し難しとて、直ちに詩に文に失戀をふりまはすは、何の爲めぞ。詩歌は自己の情感を洩らすの具、之れを假りて、堪へ難き其憂愁いかいかを慰するはよし。之れによりて、失戀を街はんとするに至りては、愚實に極まらずや。昔者巢林子大いに情死の美を歌うてより、痴男痴女の情死を以て一種の光榮となし、死後の名譽と心得、相携へて死するもの、頗る加はりしと云ふ。頃者彼れが如き忌むべき可き現象を、青年の間に見るに至りしもの、今の新體詩人が戀愛を以て、惟一の詩材となし、やたらに失戀をふりまはせし結果、與つて大なるに非るなき乎。新體詩起りて未だ新文壇に貢献するものなく、其弊を傳ふるや已に斯くの如し、亦慨す可きにあらずや。（三十一年六月）

學士號

學位令を改正して、大學出身者以外に學士號を與ふること、博士に於けるが如くするの計畫あるを聞く。眞僞定かならずと雖も、是れ實に當然の事なる也、學術は大學の專賣特許に非ざれば也。然りと雖も、此改正に驚喜して、文部省を謳歌する者あるに至りては、驚かざるを得ず。抑〻學位とは何ぞ、其標準は只だ帝國大學の卒業のみ。而もて帝國大學三年の修學、畢竟何するものぞ。學術は茫々たる大海の如し。之れを眺めて涯なく、之れをあさりて極なし。實すに幾十年を以てするも、眞相極むること固

より得べからず、而して學士なるものは、此茫々たる學海に棹ずこと、僅に三年に過ぎざるを標示するものに外ならざる也。果して然らば、學士號の誇るべきものいづくにかある。學士の肩書をふりかざはして、何の名譽ぞ。若し此虚位を得んが爲めに、如何苦論文を出すが如きものあらば、是れ大俗の骨頂のみ、眞個學術に志す者の齒すべきに非る也。（三十一年六月）

修養の時代

新作家の初めて文壇に出づるや、多くは盛譽雨注して、江湖に喧傳せられ、意氣揚々両肩風を切りて、天下を睥睨す、此時乃公の鼻高きこと三尺、思ひ來れば名を成し易きこと我文壇の如きものあらんや、而して名の保ち難きこと亦我が文壇の如きは非ざるを見る。吾人は敢へて喋々せざるも、事實は之を證して餘りあり。彼の褒譽賞讃の間に文壇に出でたる寧馨兒にして、尚は當時の賞讃を保ち得る者、蓼々屈指するに足らざるに非ずや。是れ固り其因多かるべしと雖も、畢竟するに彼等が、修養足らず、鍛

鍛金からざる結果のみ。夫れ人生三十にして始めて立つ、彼等の名を成す時や、多くは二十を超ゆること漸く三四、即ち退いて書を讀み、學を修むべきの時、彼等は此修養の時代に當りて、只炎ゆるが如き名譽心に驅られ、能先きをのみ動して、名を成さんとす。飢餓補綴僅に彌縫し得るも、破綻は遂に免るゝ能はず、作ること益々多くして、愈々單調に流れ、愈々平凡に陷り、遂に大なる進境無く、大なる發達無し。斯くの如くにして、いかでか往日の地位を保つことを得へき、盛譽忽ちにして去るは、即ち當然の事のみ。

これ實に睹易きの理なり。而も吾人の殊更に云ふもの、我青年諸君のうち、他日の小說家たり、詩人たらんことを欲するの士、少なからざる可きを思ひ、敢へて一言の規を呈する所以なり。

唾棄すべきのみ

猛火炎々將に市を燒き盡くさんとす。此時これに薪を投じ、油を注くものあらば、誰

か其暴を慣らざるを得んや。而して斯くの如きの學は、多少の學識あり、多少の地位ある人によりて、往々我文壇に現はるゝは、痛嘆に堪へざる所也。頃者例の木村湯本の諸氏が『白本主義』に於いて、暴言を逞うするを以て、足れりとせず、更らに一夫多妻の非眞理に非ざるを說く。是れ實に風習を破り、人倫を無視するの言、此紊亂せる風俗をして、一層の紊亂を來たさしむる者は、彼等に非ずして誰ぞ。『早稻田文學』記者、諄々として、彼等の所說を駁して、一毫を假さず、勞頗る多とするに足る。而も彼れが如きの暴論は、一喝して直ちに唾棄すべき也。

虛名の文壇

今の文壇は虛名の文壇也、從て今の文士は一種の虛名家に過ぎざる也、かくの如く喝破し去れば、今の文壇なるものは誠に憐びべきものにあらずや。而して又悲むべきものにあらずや。

吾人は獨りに放言を以て、快を取らんとする者にあらず、吾人が劈頭に於てまかく圖

倒する所以のものは、實に其理由を有すれば也。蓋し今の文士として一家を立つるもの、初めより文士を以て、そが天職としたるにあらず、皆他の事業に失敗して、止むなく、文界に投じ來りしもの也。故に其間、多少の世路を踏み、閱歷經驗を有せざるにあらざれど、實際其學殖に至ては空虛也、其趣味に至ては低卑也、かくの如くにして、焉んぞ清新の詩趣を見ることを得んや、斯くの如くにして焉んぞ高潔の理想を求むるを得んや。我國の文壇か實質なく、特色なく、唯浮沫轉蓬の如く趣味の變化しゆくは、怪むに足らざる也、而して今の作家なるもの、概して此範圍を脫する能はず。斯くの如く憐びべき作家に依て、一半を形成せられつゝある文壇は、全然ブアーも、プロゼッシ也。渠等は曾て一世を驚かすべき作物を出したることある乎、一代を感化すべき大作を公にしたることある乎、朝に一篇を公にし夕べに一文を發表するも、唯自己の御のろけにあらざれば、御里を現はしたる陳套の着想、焉んぞ能く他を敬服せしむるを得んや、殊に其材を取る必ず淫靡の街に於てし、事を敘する醜陋目を蔽はしむるものあり。劣作惡作を以て滿されたる今の文壇は虛名の文壇にあらずして何ぞ

や、又斯くの如き作物を公にして、揚々作家の列にある渠等俗文士は虚名の奴にあらずして何ぞ、虚名の文壇と虚名の文士とは、是我國文壇の特色として誇るべきものなりや否や。（三十三年八月）

劍を執らん乎

今の社會に於て、最も勢力の微弱なるものは文士也。而して又最も意氣地なきものも亦文士也。文士の二字、之を侮蔑的に解釋せらるゝに至りしは、自ら招くの罪のみ。然れども、氣慨あり、熱血あるもの、恐らくは、斯くの如き酷遇に滿足する能はざらん。慨するもの、叫んで曰く、噫、筆を燒きて劍を取らん哉、と。これを以て直ちに不當の言也、不忠實の語也と云ふものは共に人情を語るべからず。止むなくんば、筆を捨て、劍を執れよ。男兒何を好んで社會の侮辱を甘受せんや。（三十三年十月）

一種の仙人

曾て某文士に會す。吾問うて曰く、政友會の將來如何、國民同盟會は如何、渠冷々然として知らざるか如し。清國對日、米、英、露の結果則ち如何、渠又冷々然として知らざるか如し、郵便改正規則は如何米價の昂低は如何、小學校令の可否は如何、渠終に笑うて曰く、僕はかくの如き事に關して、別に知るの要なき也、國家の衰盛、吾に於て何かあらんや。社會の變轉吾に於て何の關する所かあらん、君請ふまかく眞面目なる勿れ、まつ一杯を君に獻して、吾戀愛を語らん乎と、洒々乎たるかな、渠の態度。渠は全く世間なるものと絶緣したるか如し、唯女色を買ひ、美酒に醉ひ得れば、樂之に過ぎずと爲す。渠は此樂の去るときに於て、僅かに憂慮するに過ぎざる也、國家などの事は、毫も關知せず。酷言すれば、これ一種の仙人にあらずや、今の文壇は此仙人の多きに始末か就かざる也。（三十三年十月）

オ子とは何ぞや

第二十

才子とは何ぞや

人若し我に才子とは何ぞやと問ふとあらば、我は直に「俗物」なりと答ふるに躊躇せず、故に我は茲に才子とは大俗を行ふ者の稱呼なる所以を論じて、夫の世の才子たる才子輩を罵殺せんとす。

（一）俗とは何ぞや　大俗を行ふ者は才子也、故に才子を說かんと欲せば、須く先づ「俗とは何ぞや」なる疑問を解釋せさる可からす。俗とは何ぞや、世に俗なる者のあるへき理なし、人は能く俗務と云ひ、俗事と云ふ、世に果して俗務なるものありや、俗事なるものありや、精神的事業のみ高貴にして、肉体的事業は卑賤なりや、局長書記官の事務は俗ならずして屬僚の事務のみ俗なりや、人は理想に依りて貴し、品性に依りて高し。事業の種類は、以て人物の高下を分つに足らさる也、されば活版屋の字拾も、小間物屋の小僧も、車夫も、馬丁も、等しく天より授けられたる神聖なる業務にして、

心に一片の確信あり、覺悟あり、理想あらば、彼等の無位置無勢力も、尚夫の不安心なる位地に疑懼し、類を呼び徒を集めて、朋黨の爭に餘念なき大臣宰相よりも貴き也。故に最も單一なる觀察を以てせば、社會の事業は、悉く神聖にして、尊卑なく、貴賤なし、何ぞ況んや、俗務あり、俗事あらんや。

然れども社會は一個懷疑の團塊也、情のみを以て規矩すべからず、理のみを以て準繩すべからず、否理想と情想とは却て激しく衝突し、理性は常に劣情に制せらるゝ也、之れ則ち社會は、常に下層の勢力に制せらるゝ最大現象にして、覺悟なく信仰なく、理想なき人物が、社會の多數を占むる所以也。何となれば確信あり、守持あり、覺悟ある人は、常に理性の力を以て、情性を制し、理想的方面より力めて、自己を發揮せんとすれば也、されば今の世の常識なる者も、或る極端と、他の極端との調和したる「道」なるには相違なきも、社會が常に下層の勢力に制せらるゝを見る時は、所謂今の世の常識は、寧ろ下層社會の常識なりと云ふを得べし。故に少しく眼を開きて、今の社會を通觀せば、悲むへき者極めて多し。則ち社會の多數者は、變化すべき動機

を有し、進歩すべき機能を有して、而も只食ひ、只語り、只泣き、只笑ひ、只眠り、只働くを知れるの外、天命を知らず、人生を解せず、無意味無意識なる生活を爲すの徒也。故に此徒の心には、變化すべき動機を有して變化せず、進歩すべき機能を有して進歩せざる惰性を成し、物に觸れて感せず、事に接して動かず、反抗力なく、感應力なし、所謂俗物とは、彼徒を云ひ、俗界とは彼徒の社會を云ひ、俗務とは彼徒の事務を云ふ、品性なき故に俗と云ふ也、理想なき故に俗と云ふ也、

(二) 才子とは何ぞや　才子とは何ぞ、如何なる者を才子と云ふ乎、如何にして才子となり得る乎、乞ふ余をして少しく余が有する才子辯を述べしめよ。

世渡りに功なる者を才子と云ふ也、巧言令色に長する者を才子と云ふ也、社會の風潮を趁ふに妙なる者を才子と云ふ也、夫れ世に容れられむ道を求めて、世に諛ひさる者は稀れ也、所謂才子なる者は則ち巧みに世に諛ふる者の謂也、粉飾する者を才子と云ひ、迎合する者を才子と云ふ。故に才子は大俗を行ふ也。

人誰か名を思ひ、利を思はざらん、世に稱せられ、人に稱せらるゝを願はざらん、然

れとも人は到底名利の奴隷にあらざる也、而も所謂才子者流は、功名富貴の念に驅られ、致すべくして求むべからざる名を求めんとして、自ら力むる者にあらずや。彼等は世に容れられんとして、頻りに社會の風潮を趁ひ、名を求めんとして頻りに巧言令色す、故に力めて俗人の喜ぶ所を喜ひ、樂む所を樂み、憂ふる所を憂ふる也、令聞を欲し、利欲に迷ひ、成効を思ふ、勢ひ社會に諛ひざる可からず、俗人の歡心を買はざる可からず、時に或は心にもなき笑を湛へ、時に心にもなき泣音を吐く、亦已むを得ざるのみ。要は只世の常識を趁ひ風潮の下に踊躍して、一擧一動世に投するを面目とす、茲に於てか人に接しては、先づ其色を伺ひ、氣を察し、徐ろに口を開きて、囁嚅し、逡巡す。斯くて官に仕ひては愛を長官に得、野に處しては高く譽げらる。而も已れに利なくむば、十年の親友一日にして仇敵となり、已れの爲に益あるべくむは、十年の仇敵一日にして親友となる。抒擠は才子の本領也。中傷は才子の特色也、故に彼等は常に覆面の人にして、僞善虛飾の下に隱れ、巧言令色を事となす、而も媚介なる者は退けられ、重厚なる者容れられず、悪徴なる者疎せられ、勤行の士排けらる。俗人の笑とする所を怒り、俗人の怒りとする所を笑はゝ、社會は其人を冷遇する也、俗人の喜ふ所を喜ひ俗人の樂む所を樂まざれば、社會は其人を酷待する也、其言ふ所世の常識と相背き其行ふ所世俗を驚かし、我常識の向ふ所に進まんとせば、社會は其人を奇人と呼び、人の求めんとする名を顧はず、人の趁はんとする利を顧みず、人の得んとする位地を捨てゝ、遠く名利の外に立ち、獨自一己の創見を樹て、爲すべきを爲し、行ふべきを行はんとせば、社會は其人を狂者と呼ぶ、嗚呼才子なる哉〳〵、才子にあらざれば志を當世に得ず、名利を當世に得ざる也。

(三)　才子とは何ぞや　謹嚴なるは才子の器にあらず、摯實なる者又才子の資にあらざる也、才子は冷血ならざる可からず、輕薄ならざる可からず、多情なる可からず、多感なる可らざる也。只夫れ冷血也、輕薄也、故に人を擠れ、人を傷け、人を罪し、人を誣ひて、恥ぢざる也、彼等は或点に於て獸性を帶びたり、或場合に於て無感覺也、法律の制裁、德義の制裁、社會の制裁の如きすら、彼等の前には遂に何の効もなき也。一片の俠骨直に人の困厄に赴くと云ふか如きは、才子に望む可からざる也、衷懷の熱

情火よりも熱く、憐なる同性の上に萬行の紅涙を濺ぐと云ふが如きは、才子に求め難き也、嗚呼才子とは何者ぞ、社會の風潮の下に隱れて、一世の傾向の行く處を察し、世に媚び人に諂ひ、天を欺き、人を欺き、而して又自ら欺くもの、之を才子と今の世は呼ぶ。

(四)　故に才子は俗物也　人生才子たらんとを願ふ勿れ、才子とは俗の最も俗なる者の謂にあらずや。無氣力無骨頭、主張なく、本領なく、獨自一己の定見なくして、名に奔り利に赴き、惴々焉として世に容れられ、人に稱せられんと力む。故に才子たらんと欲せば、自己の所信を公言する能はざる也、自己の本領を發揮すると能はざる也、世に諛ひ、人に諂ひ、社會の常識を超はさる可からず、俗人の笑を笑ひ、俗人の喜を喜び、俗人の樂を樂まざる可からず。素より斯くの如くんば、社會は其人を寵遇して地位安全なる可からんも、男子の本領に於て恥なきを得んや。

心にもなき乾笑を濺べ、泡沫の如き名利を慕うて、俗物の是非する所を是非し、俗物の憎惡する所を憎惡し、巧言令色を事として、身は虛飾の人となり、僞善の人となり心の天眞澌滅せば、人間の價値幾干ぞ。品性なく理想なく、精神の修養なきものは、人としての價値なしとせば、彼の所謂才子輩は、只食ひ、只眠り、只泣き、只笑ふを知る一個肉塊の傀儡のみ。彼等は世に容れられんとして、先づ世に諛ひ、人に稱せられんとして、先づ巧言す、泡の如きの虛名と、虛譽とは斯の如くにして求むべきも、千代不磨の名と譽とは、主張なく本領なく、社會の常識と漂漂する彼等の頭上には、輝かざる也。正々堂々我常識の向ふ所に進み、社會の常識の外に特立して、我欲する所を行ひ、我思ふ所を云ひ、信する所あり守る所あり、天眞爛漫一点の虛飾なく、人の前に在ると神明の前に在る如く、世に立つこと巖上に立つ如く、出處自ら明かに進退自ら正しからば、男兒一代の能事了る。

嗚呼滔々たる天下才子たらさるを憂ふる者ありと雖も、世と違ひ俗と背き、眼を百代の末に注ぐの人や乏し矣。社會の民心は漠々として、直下千丈日に俗了し去らんとせば、而も確信あり、憂悟ある人の乏しきとや。奇人なく、狂者なく、大愚もなく、大賢もなし、世は只笑ふの徒のみ、食ふの徒のみ、眠るの徒のみ、血ある者少し、涙ある

者乏し、籍を爲す者なし、絶えてあるとなし。嗚呼奇人出てざる乎、狂者出てざる乎、奇人出でず狂者出でざるは、國家の慶事にあらざる也（三十年一月）

名とは何ぞや

榮祿一世を空うし位人臣を極め得ば、之に過ぐる名譽なき乎。財巨萬を累ね、富侍頓を歷し、飽食暖衣するを得ば、之に過ぐる名譽なき乎。翠麗紅閣に殘軀を貪り、金殿玉樓に榮華の夢濃かならば、天下無上の幸福たり名譽たる乎。金光燦爛大禮服の人たらんとは、現時青年が理想にあらずや。鬼來狗嚙の富を重ねて、圓滿なる生涯を爲さんとは現時青年が希望にあらずや。

今の所謂名なる者、說し來れば皆勢力の別名のみ。彼等は社會に光榮なる脚地を築きて、以て勢力の根底を培はんとせり。政界に商界に文界に、各其好む所の事業に從うて、勢力の地盤を築はんとせり。蓋し勢力の裏には權力宿り、名譽潛み、富貴伴ふを思へば也。故に官民何れの社會にあるに論なく、戰々兢々として不安心の惡に立ち、

自家の地位を保ち、勢力を成さんが爲めに、全力を盡し、長上に諛び、下僚の意を迎ふ。會々高貴の位地にあるものと雖も、亦等しく疑懼の念に鞭たれ、惴々焉薄氷を踏むの心地を以て中傷陷擠の謀に腦漿を摩す、故に曾て一日の慰安を精神界に與へ、飢へたる心靈に糧を給するとを爲さず。氣勞れ神飢へて、彼等の多くは、精神的に自殺せり。麵包のみにて生く、焉ぞ形役の奴隸たらざらんや。而も高貴なる名譽の光は、尙ほ彼等の頭上を照らすと云はば、吾人は疑なき能はず。

夫れ富の分配は、必ずしも快樂を分配せず。貴賤の階級は、必ずしも品性の高下を階級せず、金殿玉樓の榮華の夢は、月淸り風寒き賤か伏屋の貧苦の夢を知る能はず。翠閣紅閣の人到底人生の眞相を知らず、何ぞ人生の眞快樂を知らんや。月淸り風寒き處、天眞存し、金殿玉樓の裡、却て虛僞多し。勞働者が休息時間の喫煙の趣味は、暖衣飽食の徒の知らざる所、農夫が一日の勞を慰する晩酌の趣味は、美味佳肴に飽く王公貴人の知らざる所、若し果して自然の存する所物の本相なりとせば、彼等が虛飾なく僞

善なき生活は、則ち人間生活の眞相にして、人間生活の眞相は則ち人間快樂の眞相存する所也。夫の虛飾に充ち僞善に滿てる浮華榮耀の生活は、人生の自然を蹂れ天眞を距る者、何ぞ此間に生活の眞趣味存し、眞快樂存せんや。我輩の所謂名なるもの、亦誠に斯の如きの理ある也。

敢て反言す。今の所謂名とは何ぞや、惡く虛僞にあらずや、夢幻にあらずや、消えて果敢なき泡沫の如きにあらずや、永遠不朽ならざるにあらずや。時を得勢に乘じ榮華を極め巨富を成さん抔と云へる、覺束なき目前の虛名に、一代の運命を賭せんとする、滔々たる天下の傾向ならずや。若夫れ浮雲の如き功名利達を破屐に托し、知己を百代に待つの覺悟を以て、滿腔の經綸を施さんとする者の如きは、求めて遂に得さる也、是れ豈國家の不祥にあらずや。

試に古來の偉人傑士を見よ、彼等は常に世の風潮に逆抗し、勢力に反敵し、社會の常識を支配し、勢力を左右し、天下をして依りて以て進み、則りて以て處するの道を知らしめたり。故に彼等の精神偽勢力は、則ち彼等をして、いたらしめ、功名誇ゆたらしめ

たり。然るに顧みて、名利の巷に蠢蠢たる今の世の俗士を見るに、彼等は實に社會の風潮の下に跼蹐し勢力の下に整伏し、常識を趁うて遑々平たり。何すれぞ遑々たる、間ふを休めよ、憐むべし彼等は泡の如き名を思へる也、風潮に伴ひ常識を趁ふは世に逆はざらんが爲め也、世に逆はざらんとするは世に容れられんを思へば也、則ち今の名と云ふ者巧みに常識を趁ふの謂也、巧みに常識を趁ふと云ふは、則ち所謂巧に俗と調和するの謂にあらずや。

巧に調和するに非ずんば、名を爲す能はず。故に俗論を恐るゝ也、物議を憚る也、他の意を迎ふる也。所信を枉ぐる也、本領を失ふ也。宜なる哉彼等の頭上に冠らされたる名なる者は、浮雲の如く泡沫の如く、棺を蓋へは七十五日にして周圍に忘れられ、三年五年にして國人に忘れられ、五十年百年にして歷史に忘れらるゝとや。嗚呼虛名畢竟何者ぞ、吾人は實に千載に亘り、万代に飛れ、赫々として青史を照らす不朽の名譽を懷ふ也。

男子世に立ち名を思はゝ、須らく知己を百代に待ち成功を千歲の後に期するの覺悟な

かる可からず、既に此覺悟あらば、以て自己の本領を發揮し、自ら恃み自ら任じ、社會の常識東に向ひ、自己の常識西に向はゞ、則ち斷々として西に向ひ、社會の風潮西に流れ、自己の方針東に向はゞ則ち直往して、東に進むの大勇氣なかる可からず。既に此覺悟あり、此意氣あり、一片耿々たる赤心を以て俯仰天地に愧ちざるの事業を成さば、假令一代を不平に送り無聲無名に終ると云ふとも、千歳の後評價自から定まる者あらん而已。

乞ふ之を歴史に見よ、彦九や、子平や、君平や、彼等は只寛政の三奇士として、一代を赤貧なる儒生に終りぬ、而も天下の常識の上を濶歩し、社會の風潮外に特立し、尊王愛國の至誠を以て國家の爲に運命を賭したる無聲無名の彼等の事業は、數十年の後に於て成効したり。曾て生涯を不遇に終りし彼の儒生等は、今日功名赫々たる天下の勳臣也、彼等は生前に於て失敗し、死後に於て成功したり。生前一布衣の寒生は、死後に於て錦衣の大功臣となれり、之れ素より然るべき理の存したるに依れりと雖も、豈又天地經綸の不可思議なるに驚かざらんや。

活男子須く彼等の氣慨なかる可からず、本領と終始し、主義を一貫したる彼等の如かる可からず、徒らに目前の利を思ひ、夢の如き榮華を羨ひ、社會の常識を趁はんとして主義を缺き、本領を枉げ、眞骨頭を失ひて、尚泡の如き虛名を思ふが如きは、到底子々たる俗骨の爲のみ。

語を寄す、次代の國民よ。乞ふ世に容れられんと期する勿れ、世に容れられんとするは、世に阿ねるの始也。世に阿ねるは圭角を折るの始め也。圭角を折るは本領を失へる也、主義を失へる也、已に本領なく主義なくむば、何ぞ偉大なる事業を成し得ん、偉大なる事業を成し得ずんば、何ぞ光輝ある名譽を得んや、男子須く眞骨頭を立て、正々堂々社會の常識の上に處し、風潮の外に特立し、白日十字街頭を行くの心を以て、只爲すべきを爲し、行ふべきを行へよ、夫の紛々たる小功名小利達、將た何爲者ぞ。（二十九年十二月）

東都は年少者遊學の地にあらず

京地幾萬の學生は、今や暑を避けて皆地方に歸れり。路上短褐破帽の人を見ること稀に、幾多の校舍亦呼吸の聲なし。然りと雖も、二旬の後新涼郊に入りて、滿城の鬱氣大に可なるの候に至らば、彼等は踵を接して來る可く、而して新に遊學せんとして、準備に忙はしき者も少なからざる可し。京地は少年の來る可き地に非ざるを告げて、彼等を誡しめ、彼等の父兄の反省を促すは、頗る急務なるを知る。

東都に學べる學生は、一時十萬を以て數へられき。中頃やゝ減じたりしも、頃者又大に增加し來れるが如し。兎に角東京の車夫と、書生とは其數に於いて、東京見物者が旧舍への屈竟の土產話に値す。而して斯くの如き多數の書生の殆どは地方より來りし者皆父母の膝下を辭して、山川百里遠く京地に來る。志の壯誠に多とす可きが如しと雖も、十萬の士いづれも京地にあらざれば、學修め難き者のみなるか、皆神のいます田園を去りて、惡魔の跳梁する京地に來らざる可からざるか。大學は全國を通じて僅

に二のみ、高等學校は六あるに過ぎず。高等の學術を修めんとする者の京地に來るは、敢へて怪しむに足らざるも、尋常中學に入らんが爲めに、故らに鄕閭を去るは、抑々何の必要にか迫れる。

彼等年少者の京地に來れる第一の原因は、何となく東京の面白しといへる觀念に刺戟せられしに非ざる乎。而して吾人が曾て言へるが如く京地に留學せる書生の歸省するや東京を以て都べての方面に於いて圓滿に發達したるものゝ如くに說き、至る處に東京風を吹かすを以て、一層刺戟せられしに非ざる乎。かくして夢の如き觀念を以て東京を想像し、言語、風俗を始めあらゆるものゝ、田舍と比較すべからざる程美なる東京に遊ぶは、人生の至快なるかの如くに考へ、子煩惱の父母を說き、京地の事情に通ぜざる兄姉に迫り、而して漸く來りしもの、思ふに十中七八を占むるなる可し。なるほど東京の風俗は美也、言語は優也、牛屋の女中は田舍の藝者よりも美しかる可く、寄席の建物は鄕里の寺院よりも大なる可し。然れどもこれ遊學者には如何なる利益ありや、否これ等のものは其志を阻害することの甚しき測り知る可からざるに非ずや。

美なる風俗は其目を奪ひ、優なる言語は其耳を奪ふ。足一歩屋外に出づれば、寄席あり、劇場あり、飲食店あり、街くも肉慾を満足せしむるの具、一として備はらざるなし。外界の誘惑に抗ずる力最も薄き年少者の、漸次學に荒み業に怠り、遂に一事成すなきに終るもの、寧ろ自然の勢にあらずや。且つ之れ年少思慮定まらず、分別固からざるの時、嚴なる監督の下に置くも、尚方向を誤るとなしとせず。況んや父母兄姉遠く百里の外に隔りて、下宿屋に一小天地をなすの時、何によりて意馬の走するを防がんや、交はる所の友は、已に都化して陋習骨に入り髓に徹せしもの、黨を組んで寄席に出入し、隊をなして年少男女に暴行を加ふるが如きの輩、其受くる所の感化は果していかなるものぞ。世危險なるもの、薪を負うて火に臨むに譬ふ、危の至險の極、京地に在る年少者の如きは、いかなる語を以て形容すべき乎。

第二の理由は、地方の中學は東京の中學に比して、學科のいたく低きが爲めなりといふ。然れどもこれも亦思はざるの甚しきもの也。固より吾人は教育について多くを知らず、地方の中學の現況を知ること疎からずと雖も、京地中學の程度高しといふは、恐らく事實

にあらざるべし。東京の中學の規則を見れば、なるほど學科は比較的高尚なるべし。校長に華族樣もある可し。教員の學士は稀らしからざる可く、たまには博士もある可し。然りと雖もこれ等の教員の多くは、内職として中學校に臨むの一事を記臆せざる可からず。或は高等學校、或は高等師範、其他官立學校教授の餘暇に、或は著述の間に來る者にして、餘暇を利用するとなき者は、多く數校を掛持するを常とする也。是を以て其生徒に接する單に路傍の人を見るが如く、學業の進歩は勿論、品性の涵養の如き、毫も關する所に非ず。只一時間の義務を果して幾十錢の報酬を得て滿足するのみ。校長の華族、又は朝に在りて顯要の地を占むる者あるは、あれ即ち學校の看板にして、化粧道具に役者の名を冠すれば、賣れ行き宜しきと同一の理に於いて之を戴くに過ぎず。校長斯くの如し、教員斯くの如し、縱令學科のいかに高尚なるも、何の得る所かある可き。若し得る所ありとせば、そは即ち教員を蔑視するの念と學問を忽にするの情とのみ、換言すれば、毎月幾干の學費を投じて、只一の輕薄の念を得るに止まるのみ。京地遊學の利それいづくにかある。彼地方の中學に職を奉ずる者の如き、

他の學校の餘暇を利用するに非ず、掛持して東奔西走するにも非ず、一校を自己の生命とするが故に、生徒との關係も從つて厚く、教授も勢ひ熱心なるに至る可し。固より今の教育者に通有する幾多の弊風は免るゝ能はざるにせよ、東京の中學の教員と比せば、誠に同日の談に非る可き也。

第三の理由は、中學校の設備の全からざるに在り。地方によりては、校舍の狹隘、教員の不足等より多くの生徒を容るゝ能はざるのみ、蓋し少なきに非ざる可し。然りと雖も、何ぞ必ずしも之が爲め直に京地に來るを要せん。隣縣の中學の大なるに學ばゝ即ち足るに非ずや。頃者帝國大學及び高等學校增設の議を聞く、例令政略的手段に出づるとするも、亦教育界の慶事たるを失はず、然りと雖も之に先つて着手す可きものは、地方中學の增設にあらずや。高等の教育固より一日缺く可からずとするも、普通教育の普及は更に急也、若し設備の全からざるが爲めに、京地に少年の來るを默過せざる可からざるが如きは、教育界の爲め、否國家の爲め、最も憂ふ可きことにあらずや、頃者大學高等學校等の風紀大に紊れ、角帽を細にして登樓する者も少なからずと聞く。然りと雖も、大學及び高等學校の學生の如き、已に丁年に達して、比較的思慮の定まれる者は詮方なし。年少白糸の染まり易き者にして京地に來るは、斷じて得策に非ず。當局の士大に省みざる可からず。

如上述ぶる所、敢へて奇拔の言となすにあらず、而も人は空理空論を說くに忙はしくして、斯くの如く最も憂ふ可き問題を等閑に附するに至りては、吾人の不文、尙ほ默して已む能はざる也。（三十二年八月）

事業とは罪惡の異名也

吾人は今の教育に服せざるもの極めて多し、殊に少年の空想を燃やし、名譽心を煽動するの學わるを見て、憂慮常に措く能はざる也。

少年は最も空想の甚だしき者也、社會の如何なるものなるかを考へず、時勢の如何なるものなるかを知らず、只意の動くに任せて、限りなき空想を燃やす。奈翁の傳を讀み、ナルプスの絕巓を超ゆんと。尙頃の事蹟を聞き

ては、即ち曰く我も亦一擲して百萬の黄金を攫らんと、其意氣其抱負固より稱すべし、然りと雖も、只大ならんことを望み、高からんことを欲するは、人生の目的なるべき乎、大や、高や、遂し得べくんば、快事たるに相違なしと雖も、之に志す前に於いて、一顧せざる可からざる問題は、いかなる道路を經、いかなる筋道を踏みて達す可き乎の一事也。遠き千載の昔はいざ知らず、人心醇朴神世の如き片田舎は云ふ迄もなし、苟くも明治も三十年を過ぎたる今日、競爭是れ事とする鐵火場裏に立ちて、偉大なる事業を遂げんとせば、必ずや幾多の罪惡を積む可きことを覺悟せざる可からず、蓋し今日に於いては、事業と罪惡とは比例をなす。小なる事業には、小なる罪惡を犯さざる可からず、大なる事業には、大なる罪惡を犯さゞる可からず、直截的に解剖し來れば、事業とは罪惡の異名なるのみ、即ち醫骨なる『罪惡』の二字に、脂粉を施し、衣裝を著けて、体裁よき『事業』の名を與へたるのみ。吾人は此處に於いて詳細なる理由を述ぶるの遑なし。只事實について、此が證左を明にせん乎。試みに今日廟堂に在るの士を見よ、天下の大權を掌上に占め、一國の氣運を左右す。固より男子渾の快事なり と雖も、而も進いて斯く迄に至れる道筋に、一瞥を與へなば奈何、己を欺き、人を陷れ、友を賣り、權謀を行ひ、術數を隱らし、陰險の手段、醜穢の去就によりて得たる所に非ずや。思に彼の紳士と稱して、所謂上流社會に位する者を見よ。大廈高樓に住して、勝地に別墅を控へ、駟馬環輪を街頭に馳驅す。是れ今の人の最も快樂なるものとして、羨望措かざる所。而も彼等は何によりて斯くの如き境遇に至りし乎。虛誕百出、詐僞縱横、彼の本領、廉耻、見識、主張等の男らしき否人間らしきものゝ總てを抛ちて、購ひ得たる者なる也、彼等の恐るゝ所は德義の制裁に非ずして、法律の所罰なる也。之れが爲めには、人道を破り、道義に背くを辭せず。家庭の和樂を破り、平和を紊すを避けず、只一意利欲に向つて進む。其他、苟くも社會の上流に位るし、人の頭上に當位を占むる者は、皆這般の手段により、這般の徑路を經來りしものゝみ彼地位といひ、名譽といひ、財産といひ、皆斯くの如くにして得たるもの、吾人が事業とは罪惡の異名なりといふ、可ならずや。世を擧げて、皆混濁の裡に沒し去れり。心弱く氣動き易き少年は、いかにして之に傾か

ざるを得んや。彼等は思へらく、人間の希望は須らく大なる可し、目的の爲めには手段の如何を問ふ可きに非ず、只大名譽を博し、大利益を貪むるを得ば足ると、少年の心事已に斯くの如しとせば、之れを敎へ之れを導く可き敎育者が勉めて邪徑に入らしめざらんとするは、敎育者當然の責務、而も彼等は口を揃へて曰く、男子生れて地に落つ、安んぞ碌々として死す可けんや。一大事業を成して世を驚絶せしむべし。大功は小疵を問はず、万骨枯るゝも、一將功を收むるを得は可也と、火まさに炎にあがらんとする時、薪を加へ油を注ぎ、少年の空想をして、益々大ならしめ、名譽心を煽動す。今の少年が地方に居るを嫌ひ、着實なる事實を忌ばず、只花々しき事を採らんとするの傾向著しきもの、主として是に因す。田舍にてはやゝ資産を有する者の子弟にして、小學の高等科すら卒へさる者多し、之を其父兄に問へば曰く、高等科を卒はれば生意氣になりて家業を喜ばざるの憂あれば也と。生意氣の一語、無量の意味を寓して、今の少年の面目を表はす、而して少年をして、滔々茲に至らしめたる者、即ち今の所謂敎育家なる也、慨せざるを得んや。

嗚呼人道の上より見れば、欺かず僞らざる者ならば、車夫馬丁と雖も、今の宰相貴紳なる者よりも、勝ること万々。吾人は何ぞ、大名譽といはん、大事業といはん、事業は罪過の異名、吾人は只人道と並行し、德義と衝突せざるものを守りて、敢へて偷ることなからんのみ。（三十二年二月）

上流人士の冷血

一般社會の尊敬を享くるものは、ろか報酬として、義務として、己れより下層のものを憐れまざるべからず、恤まざるべからず、唯自己一身の榮華を恋にして他を顧みさらん乎、これ實に無情の冷血漢にして吾人之と齒するを潔しとせざる也。

今の上流人士は果して如上の醜態を有せざる乎、能く貧民の爲めに泣き、下流の爲めに泣くの同情ある乎、孤兒の運命に同情し、寡婦の淚俳を慰するの涙ある乎、公共事業に贊同して、其財産の幾分を寄與するものある乎、若し如上の同情を有すとせば、彼等は上流人士として、社會の尊敬と搖重を享受すべき權利を有す、然れとも今の上流

人士は、自ら這般の權利を拋棄し去らんとするにあらずや。

渠等の大部分は、社會の憐むへき人々に對して一滴の涙すら寄せさる也。天寒うして細民衣の薄きを嘆するも、渠等は冷然として知らざるか如く、錦衣を重ぬるに非ずや、孤兒路頭に迷ひ、饑餓に泣いて、其門前に起つも、渠等は冷然として知らざるが如く、美味に飽き、美食を喫し、嬉々として談笑するにあらずや、寡婦兒を抱いて、世路の險難に泣く、渠等は美妓を擁して、相戲るゝにあらずや、將た又社會的の事業に對して渠等の助力を求むるも、極めて冷淡なる態度を持するにあらずや、渠等涙なき乎、血なき乎、何そ夫れ冷酷なる、何そ夫れ殘忍なる、渠等は唯自己の榮華を盡くし、自己の幸福を維持し得れば足れりとする也、他の饑寒に苦悶するも何等の痛痒を感せさるに非すや、嗚呼斯くの如くにして社會の上層に起つへき價値は夫れ何處にか存する。

彼下流の一賤夫と雖も、路上、乞兒の破絃を彈するを聞きては、覺えず涙を流して、尚一文の錢を惠む、嗚呼渠の一文は、上流人士の美妓を聘ふの黄金よりも貴きものなるに非すや。（三十三年十月）

義太夫崇拜

カーライル先生、曾て英雄崇拜を論ず。英雄を崇拜するは、一種の宗教也。斯くの如き崇拜は、吾人の心性を奮興し、志氣を激發するに偉大なる功力を有す、吾人は固より英雄崇拜を以て全然可なりとは信ぜず、然れとも、其偉大なる功力を蔑視すると能はさる也。

借問す、當代の青年は果して何を崇拜するか、英雄か、あらず、豪傑か、あらず、聖人か、あらず、大學者かあらず、あらず、渠等の崇拜する處は、さかく高尚なるものにあらさる也、渠等の或者は黄金を崇拜し、或者は爵位を崇拜し、或者は女郎を崇拜し、或者は藝妓を崇拜し、又ある部分に至ては、女義太夫を崇拜す、女義太夫崇拜の尤も甚しきは我帝都也、都下十萬の學生中、能く此崇拜熱を排して、毅然其面目を保維するもの果して幾何かある、一にも義太夫、二も義太夫、渠等は娘義太夫を以て、如菩薩と思惟するに似たり、知らず、這般の妖婦、果して何等の魔力を有する乎。

渠等は一の美貌を有す、美貌は實に我青年の心魂を奪ひ去るべき大なる魔力也、吾人は眞正に義太夫の趣味を解せんとするものを捉へて吸々せんとするにあらず、然れども、今の青年は義太夫の趣味よりも寧ろ美貌を渇仰するに非ずや、唯夫美貌を渇仰せるが故に、假令其藝に堪能ならざるものと雖、一の美貌を有すれば、之を謳歌す、されば、恐らくは義太夫に對して、自己の劣惡なる野心を滿足せしめんとするものにあらずして何ぞ醜也、陋也、カーライル先生をして都門の學生が、斯くの如き崇拜熱に病むを見せしめなば、恐らくは、三十棒を喝して、其面上に唾せむか、あらず、寧ろ其愚を嘲笑して、袂を拂うて去らむ。

渠等の娘義太夫を謳歌するの醜、既に嫌ふべし、進んで更らに渠等が行動を檢し來れば、卑むべく、笑ふべきの事實、山の如くなるを見ずや。渠等の或者は、娘義太夫の一顧眄を得るを以て無上の榮譽の如く思へる也。其寄席に出入するの時、背後に從ひて三味線箱を擔ひ、若くは車の後押を爲し、一意、其命するとあらに從ひて、唯々として之に反抗するの氣概なし、直言すれば、渠等は娘義太夫の奴僕を以て此上なき快心の事となす也。嗚呼男兒、獨りに他の命令に服從するを恥づ、況んや、あれ眇たる一賤婦、淫賣に比しき劣の者を菩薩の如く渇仰するに至ては、醜辱の最も大なるものにあらずや、吾人は斯くの如き大愚物の都下に横行して、純潔なる一部の青年を誤らんとを恐るゝ也。

英雄崇拜や可也、然れども娘義太夫の崇拜に至ては、又言の加ふべきを知らず、若し能ふべくんば、這般の愚物を殊數維きにして之を牢獄に投せん歟。（明治三十三年十月）

甚しい哉淫靡の風

淺草公園の北、千頃の田畝列なる所、翠甍碧瓦樓々相接して、糸竹の聲嘈囃たるは、是れ果して何物ぞ。浪穏に風清き品川海の濱、萬燈赫燿として北斗光りなきの下、姿を飾り、裝を凝す三千の紅妓は、是れ果して何の用をなすものぞ。云ふこと勿れ、德義振張すべし、風俗矯正すべしと。如何なる聲も、如何なる叫びも、彼の嘈囃たる歌絃にかき消され、喧鬧なる笑語の中に葬らるゝ也。頃者新紙の傳ふる所によれば、昨

年中芳原に遊べる痴漢のみにて、一百三十萬を超え、遣ひ棄てたるもの、五百萬金に上るべしと云ふ、嗚呼五百萬の黄金を稽まば、優に一隻の艦艦を浮べて、護國の干城たらしむ可きに非ずや、恨殺す、天下痴愚の徒、國家的の觀念なく、德義の思想なく、邦家日に事多くして軍備の擴張益々急を告ぐるの時、莫大の黄金を賤妓の一顧盼に投じて顧るなし、醜の極、陋の極、豈亦云ふに忍ひんや。

而して其家庭を看れば、流連十日皈らざる良人を、空閨に待つ妻女の衷情果して如何ぞ。瓶中蜘蛛の巣の結ぶに任せ、破竈火氣已に絶ゆる時、語るに友なく、訴ふるに人なく、獨り孤燈の暗影に對して、懐想し來れば、千愁萬憂胸を衝いて、身も世もわられぬ思ひせざらんや。夫れ人世眞個の快樂は、家庭の圓滿にして、家庭の圓滿は夫婦の和樂によりてなるもの、而も淫靡の風斯くの如くんば、何を以てか人世の眞味を嘗むるを得ん。慨す可きことの限りならずや。

且つ春街に荆叢を弄せざる者は、妾を蓄へて翠帳紅閨に樂むことをなす。其多くは、柳蔭の私窩子に非ざれば、茜裙の麗人。貞を知るに非ず、道を守るに非ず、只脂粉香

膩これ事として、巫山の象理に倖すれば、即ち其用足る。是を以て貧人若し顔の艶なる者を産めば、喜んで好醫の貨物を得たりとなす。嬌冶媚媚色を人に衒ふを事となし、破貞輕薄黄金を得、利欲に就かんことを思ふ者、眞個の貨物なる也、其風を埃り俗を亂すこと、豈亦云ふに堪ふ可けんや。然れども其害國内に止まらば尚ほ可也。一葉の扁舟名も知らぬ荒原僻地に彷徨して、醜行を逞うする者、數萬に及べりと云ふに非ず や。西比利亞無人の境、探險隊の武官に先ちて已に足跡を印し、關黒亞弗利加にすら、流寓せる者あるを聞く毎に、吾人は邦家の體面を汚すの大なるを思ひ、慨然として嗟嘆す、噫。（明治三十一年二月）

佛教界の現狀

惡魔の蜚と云ふ可き乎、虎狼の徒と稱すべき乎。言の加ふるを知らざる者は、現今佛教界に寄生せる、十萬の僧侶に非ずや、夫れ彼等が耕さずして食ひ、織らずして衣るを得るものは、實に精神界を支配して、且つ末世の混濁を治す可き一大天職を抱ける

が爲め也。若し風俗の頽廢せる今日の如く、德義の敗壞せる今日の如き時に際せば、須らく挺身蹶起是れが矯正挽回の策を講ずべきに非ずや。而も此天職に隱れ、此腐敗を利用して、不義の黃金を求め、浮雲の榮華を貪るは實に一般の狀態也、道を知れるに非ず、法を守るに非ず、衆生濟度を名として說く所は、信徒の血を吸はんとする奸計のみ。矯風淸俗と稱して謀るものは、不義不德の詐謀のみ。天下の政客は口を揃へて、租稅負擔の重きを慨し、廟堂の有司は力を合せて、經費の節減に意を用ふるの時に當り、あらゆる手段を盡くし、幾多の毒計を用ゐて、信徒の財貨を剝奪し、血肉をさらひ取りて、餘す所なからしむ。雲に聳ゆる霞を曳くの大伽藍は、哀れむ可き貧民が厘錢を積で平生に穫得したる財產によりて成れるを思へば、誰か悚として、毛髮森立せざらんや。燦爛たる法衣を着し、山海の珍味に飽くもの、無識の富人を欺いて得たる賽金の作用なるを知らば、誰か鐵の如き其面皮を剝いて、而して唾せんことを欲せざらんや。云ふ勿れ、佛敎界は腐敗せりと。今日は已に業に佛敎なき也、唯十萬の虎狼が陸梁吼哮するを看るのみ。吾人平生佛敎の眞理に服する者、豈縱橫の感慨なきを得んや。知らず、比叡山下に革命の旗幟を飜したる白川黨の諸氏、如今健在なりや、否や。（三十一年二月）

大谷派の改革奈何

吾人、親鸞の一生を思ふ毎に、肅然として襟を正さずんばあらず。佛敎我國に入りて已に千五百年、名僧碩學頻々として輩出せしと雖も、活眼遠く百代を照し、德風洋々萬世に溢るゝ親鸞の如き、果して幾人かある。彼れは實に大乘圓頓の戒相を破壞して、和光同塵煩惱の火宅に躍り入り、厭世的佛敎を變じて、世間的佛敎となし、以て佛界の新紀元を開きたるの大偉人也。佛敎が今日の大宗敎たるに至りしものは、只眞宗あるが爲めにして、眞宗は親鸞の胸臆より溢れ出でたるもの。若しこれ其血統を受けて、一派を主宰すべきものは、常に其遺旨を奉じて、彼れの大精神を發揮するは、即ち當然の責務ならずや。而も眞宗を傷ひ、親鸞の事業を紊す者は、却て此徒なりとは、何等の恨事ぞ。獅子は百獸の王、天下恐るべきものなくして、只身中の小虫の爲めに

獅る。眞宗の現況即ち是れに非ずや。大谷光瑩は眞個獅子身中の虫なる也。

大谷派の腐敗は天下の洽ねく知れる所、而して其腐敗の源泉は、實に法主其者なる也。輪奐鳳立、奇巧巨麗、天に冲する其殿堂は、惡鬼夜叉の魔窟となり、名のみ聞ける奈落の眞景を現して、餘す所なきに至れるものは、其因固より多しと雖も、法主の柔弱浮靡與つて大なるや疑ふ可からず。彼れは實に腐爛腐蝕骨に入り髓に及べるもの、寸毫の德行の看るべきなく、毛厘の美事の聞ゆるなし。只其欲する所は虛名のみ、求むる物は黃金のみ。圓頂緇衣俗界の混濁に超然たる可き身を以て、人爵の虛榮に迷ひ、求だ曾て聞かざる醜態を演じ、天下惡く疲弊困憊に陷れる時、文明國に於て見る可からざる手段を以て、信徒の蓄財を奪ふ。其殘忍刻薄實に言外に絕す。而して其意を得て周旋奔馳する錦繡紫緋の輩は、皆是れ惡魔波旬の徒のみ。斯くの如くにして、如何てか一派を擧けて、腐敗混沌の運命に沈淪せしめざるを得んや。雲に聳へ霞を曳くの大伽藍は世界に誇るに足ると雖も、已に業に眞宗は死せる也、親鸞降誕の祝會は、奈何に盛に行はると雖も、親鸞の事業は正に根滅に歸せる也、嗚呼眞宗の恐るゝ所は外敵の

迫害に非ず、親鸞の敵は他宗に非ずして、法主其者なりとは、痛嘆の極に非ずや。若しこれ今日一派に瀰蔓せる腐氣汚俗を一掃せんと欲せば、只法主を退かしむるの一策あるのみ。圓頂一箇は、以て一宗の運命に代ふ可からざる也。曩に少壯の士奮起して、革命の旗幟を飜したりしも、龍頭蛇尾、毫も得る所なくして終りしものは、親鸞正統の子孫、退かしむるに忍びずとして、執事以下を攻擊せしに止まれるが故のみ。改革は忍ぶ可からざる所を忍ばずんば能はず、一の契緣を斥けて、舞台を入れたるが如きは、只朝三暮四の計、殆んど兒戲に均しきものゝみ、現法主を退かしめずんば、斷じて改革の實を擧ぐるあと能はざる也。聞くが如くんば、頃者篠原順明、法主を廢せんとして、東都に來り、顯門に出入することゝ頻りなりと。風說果して眞なる乎、是れ固より快心の事たるを失はずと雖も、顯門の手によりて、一派の運命を左右せらるゝは、門徒の默し得べき所にあらじ、吾人の望む所は、幾萬の信徒一致結合して法主を廢し、以て夫の葛藤を斬盡し、汚風を打掃するに在り。而して腐敗醫の如くんば、斷然法主制度を廢せざる可からず。斯くの如くにして尙ほ氣氣依然たらん乎、只そ

れ最後の手段に訴ふるのみ。大谷派を滅ぼする、即ち是れ也。（明治三十一年四月）

南洲の銅像

數年の經營功を終へて、南洲翁の銅像愈々成る。來り見る者日に幾百。上野山王臺の邊り常に群をなす。知らずまの人、來りて如何なる感想を起したる乎。

去月十八日除幕の式に會す。西郷大將の令孃が纖手徐ろに幕を開きて、單衣草鞋の像あらはれし時、吾人はそゞろに落ち來る涙を拭ひあゝざりき。嗚呼翁や近古の史上翁の前に翁なく、翁の後に翁なき絶代の偉人。官は文武の樞權を握りて、位は人臣の極に至る。いかなる榮耀も、いかなる嗜欲も、求められざるなく、得られざるなかりしならん。而も無欲瀟洒、淡白霜々、黄金を見ること土芥の如く、官爵を以て敝屣視す。市ヶ谷の兵營に在りし時や、夏は肝に至るの單衣に、兵見帶を纏ひ、冬は一枚の毛布に長夜の夢を結び、征韓論に一跌して、鹿兒島に歸るや、竹の子笠を戴き、利鎌と火の用心の煙草入とを腰にして、日々耕耘に從ひしといふ。其心胸の淡うして水の如

き、其の行爲の清うして玉の如き、いかでか、彼不義の快樂を嘗め盡せる今の貴顯と稱する輩の、倣うて得る所ならんや。三千の薩摩隼人が、喜んで翁の爲めに死せしもの、其性行の磊落瀟洒たるに於いて、最も偉大なる感化を得しに非ざるなからんや。吾人は常に翁が、卓拔の眼光、東亞百年の長計を策せしに感ず。而して無欲淡白、意氣も驕奢淫逸に存せざりしに於いて、最も感ず。

山王臺に建てられたる銅像は、活ける翁の面目也。飛白の單衣と、垢染みたるらしき兵見帶と、破れかゝりし草履とは、實に翁の翁たる眞價値をあらはすもの。日々來り見る幾百の人、いかでか之によりて偉大なる教訓に接する感なきを得んや。仰げば近古の史上稀に見るの偉人にして、無欲淡白彼れが如く。顧れば翁の後塵だも拜するの價値なき我は、驕奢是れ事とするに想ひ到れば、誰か慨殺愧死の情なきを得んや。嗚呼翁の宛然好憎失たる風采は、奢侈淫靡の社會を警醒するの曉鐘にして、爛々たる眼光は、都下百五十萬の傀儡を睥睨する也。言はず語らざる此銅像は、實に風氣革新の鐵壁たる也。（三十二年一月）

東都の書生と娘義太夫

滿都十萬の書生、或は二重橋上曖く紫雲を拜せざる者ある可し。時の首相の名を知らざる者ある可し。然りと雖も、娘義太夫を聞かざるものありや。竹本京子の名を知らざる者ありや。神田本郷に軒を列ぬる下宿樓上、燈光洩るゝこと少なくして、木綿三紋の頻々たる出入を寄席に見る。嗚呼是れ學界の慶事なる乎。

吾人は今更常套の文句を列ねて、是れを警むることをなさゝる可し。彼等の學資は父兄の汗によりて得るものなると、青春の時は一刻尚ほ忽にすべからざることなどは、聞き慣れたる彼等には、蛙面の水ほどの價値もなかる可ければ也。然りと雖も、吾人の云はずして已む能はざる者は、彼等は何等の鐵面厚顏、娘義太夫を聞くかに在り。試に思へ、一藝に達せる者、一藝に秀でたる者は、必ずや常人の夢想せざる苦楚を經たる者也、偉人は凡人の眠る間に働きたるなりとは、豈偉人のみならんや。解牛の徒、承蜩の輩と雖も、苟くも其道に達せる者は、亦皆然るのみ。竹本京子なる者は、書生間に於いて、最も人氣ありといふ。而も彼や僅に三五の一少婦の身を以て、拔已に堂奧に達し、滿座中に泣きつ笑ひつして平然たるに至りしもの、今日の書生が、悠々逸樂、何のなすこともなきが如くにして、いかで出來得べき。必ずや躰を弱め、腹を傷め、身を疲らして、漸く得たるなる可し。若し夫れ之れを思はゞ、いかなる鐵面厚顏の徒と雖も自己の職を外にして平然之れを聞くに堪へんや。彼れや纖弱の一少女。我れや堂々たる青年。而して彼れや己に業を成して自立し、我れや何の得る所もなく父兄によりて衣食す。思ひ茲に至れる時、尚ほ毎夜詰めかけて。ドースルを連呼するの勇氣ありや。

曾て『新著月刊』の一小說を讀む、書工某東北漫遊の途次、一妓樓に逗遊す。偶々一雛妓の腕に痣あるを見て、其故を問ひしに、舞を習ひしも進むこと遲く、師の爲に打れし也といふ。聞きて醒然悟りて曰く、嗚呼我れ誤てり、妓樓の賤婦の如くにして、其道の爲めに苦しむ尚ほ且つ斯くの如し。我れや前途に大希望を抱ける者、何を以てか一時も徒過すべけんやと、直に杯を投じて去る。是れ『無相窟』の描ける所。我れ讀過して思ひき、是れ實に好箴の立志篇なりと。固く腦底に刻して、爾來惰心の起るあれば、

直ちに之れを以て戒め、今に至りて尚ほ忘れず。竹本某の事を記するに當りて、附記して、學生諸子の猛省を促す。（三十二年一月）

教育者に教ふ

教育界由來棒腹すべきこと多し。頃日學生の近視眼を避けしめんとて、教科書の文字に制限を加へしに至りては、實に滑稽の極に非ずや。文字の間を何々にせよ。上下の空間を何々にせよと計算を施し、以て書生の近眼を防ぐべしとなす。其方法の馬鹿氣たる、其手段の愚なる、既に『文藝』の時文記者の冷嘲し盡くせる所。吾人又茲に喋々せざるも、只彼等が眼光の餘りに狹小なるを思へば、一片の婆心、豈適切の策を記して、彼等に教へざるを得んや、乞ふ聞け。

適切の策とは他なし、學生の近眼鏡を徹し去らしむるの一あるのみ。今日の學生中視力の薄弱なる者は、其三の一を超ゆ可し。若し夫れ彼等にして、盛書の苦を積み來つて、視力を害せしものとせば、是れ實に學界の一大慶事、寧ろ祝すべしと雖も、悠々

安臥、何の爲す所もなく、何の動むるところもなくして、日を送るは半ばを超ゆる者の狀況に非ずや。彼等は何を以てか。讀書によりて眼を弱するの理あらんや。而も近視眼は學生界の三分の一以上の多數を占むるもの。畢竟するに眼鏡を用ふるが爲めのみ。古は眼鏡を以て衰弱を表すものとなし、老者尚ほ用ふるを屑しとせざりき、今は全然然らず、血氣正に旺なるの青年にして、鼻頭金線を閃すを以て、其風采を飾るに足るとなし、相競うて之を用ふ、宛然學生たるの徽章に異ならざるに至れり。而して其初めや度數極めて弱きものを用ふと雖も、視力次第に減し去りて、遂に之をとれば、蹌踉として歩む可からざるに至る。彼等の近視や自然に來るに非ずして、即ち自ら求むるもの、其眼鏡や視力を調和するが爲めに非ずして、却て健全なるものを弱らしむるの具也。故に初めより之を用ゐずんば、學生の近視は、其大半必ずや減ずべきも也。是を以て教育の局に當る者、深く此点に留意して、視力の尚ほ盛なる者には、嚴に眼鏡を用ゐることを禁ぜよ、効果の大疑はずして可也。（三十三年一月）

冷淡なる講師

一友曾て某の講習會に臨みて、某教授の講義を聞く、其講義は單に某書籍を朗讀するに過ぎずして往々難解の点あり。友問うて曰く、今云々せられし所、頗る要領を得ず、願くは、再び細説せられんことを望む、と。教授、傲然として肩を聳やかし、友を睨一睨して曰く、汝何ぞ師に對して無禮の言動を爲すや、汝は耳を有せざる乎、子弟の地位にありて、我言を議するか如きは禮を知らざるの甚しきもの也、と。友激して又云はず、沸然として教場を去る。

あれ一場の話説也として輕々に默過すべからざる也。知らず、彼某教授なるものは何か爲めに書を講する乎、或一學科を未知の子弟に傳へんか爲めにあらずや、果して然りとせば、子弟をして充分理解に容易ならしめざるべからず。若し解する能はざるものあらば詢々として、其理を説き、飽迄了解せしむるを要す、若し然らずして、猥りに之を威壓し、質問に答へざるが如きは、あれ教授の精神に背反せるものにあらずや、既に教授の精神を破壞して顧みざるは、あれ教授の資格を滅却し去りたるものにあらずや。

思ふに斯くの如き醜態を爲して少しも恥つる所なきは、其精神既に腐敗し去りたるが故也。渠の願ふ所は、如何にして一學科を講修し了らしめんかと云ふにあらず、如何にして安全に報酬を獲得せんかと云ふにあり、渠の目的は、教授にあらずして黄金にある也、唯單に黄金さへ得れば、渠は直ちに滿足せんのみ、渠の精神、既に斯くの如くなるが故に、教場に起ちて學を講すると云ふも、極めて形式的也、皮相的也、若し云ひ得べくんば渠は、教授の椅子に坐せる一個の機械人形のみ、何等の生命なく、何等の活力なし、之を聞くもの、迷惑、誠に大ならずや。

今の教育界は、如上の冷淡なる講師を以て滿されつゝある也、かくても猶講師と云ひ得べくんば、無學の者と雖も、八字髭を附け、洋服を粧り、豪然肩を聳やかせば立派なる講師殿にあらずや、教育界、由來、茶番的見戯に富む、冷淡なる講師も亦其一にあらずや。（三十三年十月）

生意氣なる女學生

或人曾て吾に告げて曰く、『今の女學生ほど生意氣なる者はありません、高等女學校などへやると、唯理窟はかり云つて、致方ないです』と、あれ餘りに鏤骨の言也と雖も、今の女學生にして、此譏を免れざるもの、果して幾人ありや。嗚呼果して幾人ありや。男子にして生意氣なるもの、其醜既に厭ふべし、殊に温良靜淑を旨とすべき女性にして、生意氣ならんには、醜態殆んど見るべからず、吾其面に唾して痛罵せずんは止む能はさる也。

渠等の路上を行くや、往々英語を以て男子の容貌好惡を批評するとあり、之れ吾の屢は見聞する所なりとす。白日路上、斯くの如き大膽なる行爲を敢てして、少しも恥つるの風なきは、あれ生意氣の頂点に非ずして何ぞや、渠等は男性との交際に於て、最も其品性を守らさる可からず、而かも渠一語、是れ一語、卑猥聞くに忍ひさる言語を弄して、恬然として恥つるの色なきは、あれ生意氣の頂点にあらずして何ぞや。

渠等の師に對するや、其間、何等の禮讓と敬意とを存せさる也。これ一は其師の品性に缺くる所あるに依ると雖も、生徒は生徒としての禮を盡くさゞるべからす、然るに某校の女生徒の如きは、師に對して揶揄的言辭を弄し、朋友的態度を執りて少しも顧る所なきものあり、これ生意氣の極に非ずして何ぞ。渠等の學ひ得たる處果して幾何、吾素より之を知らす、然れとも、其云ふ所、或は西歐の詩文人を上下し、時た又猥りに漫語、洋語を用ひ、得々として其才學をブラウドせんとするものあり。若し識者傍らにありて其幼稚なる囈語を聞かば、恐らくは、噴飯絶倒するとを禁ずる能はさらむ。あれを慮らずして、輕々、自己の學殖を衒ふに至ては、生意氣の極にあらずして何ぞや。

一言、以て之を蔽へは、今の女學生は生意氣の三字を以て概評するとを得へし、素より其間に於て、幾分か温良なるものなきに非すと雖、其大部分は、吾人か舉げ來りし弊害の幾分を脱する能はさるもの也、學を言ふ勿れ、才を說く勿れ、吾は今の生意氣なる女學生よりも、無知無學にして天眞爛漫たる田園の少女を取らん、あれ寧ろ渠等に

比して、幾段々優れる所あるを確信する也。（三十三年十月）

地方の風俗

垢膩塵埃を以て、充ち滿てる都會は今更云ふ迄もなし。風俗素朴にして、人心醇和神世ながらの美風を遺せし田舍も、次第々々に都風に浸染して、蜻蛉州の首尾將に靡烟し盡くさんとするは、實に嘆くべき限りならずや。而して其茲に至らしめし素因や、極めて多しと雖も、吾人は學生の歸省を以て其主なるものの一に數へんとす。夫れ地方人士の想像する東京は、殆と天上界也。言語といはず、風俗といはず、生活といはず、都てのものの皆圓滿に發達しつくせりとなす。是を以て、言語風俗生活、出來得る限り其想像に近からんことを勉む、是れ彼一歌曲の出でゝ半歲を閱せざるに、至る所播謠せらるゝを見ても、其一班を知るに足る可し。而して東都に遊學せる幾萬の學生は、毎年夏季の候となるや、名譽ある名譽なき、成績を双肩に掛けて故山に歸る也。彼等の歸省や恰も洋行歸りの紳士の、交際場裏に出づるが如し。往く所として歡待せられざ

るなく、會ふ人として揖讓尊敬せざるなし。是に於いてか、乃公の鼻低に三尺を加へて、意氣頗る揚々、至る所に東京通をふりまく、其柔弱なる擧動、浮靡なる風采は、爭でか四隅に反響して、田舍人士就中少壯者を刺擊せざらんや。彼等の一呼一吸は、暗々裡に田舍の天眞を破り去る也。地方人士は毎歲夏季に至るや、惡疫の流行を愛ふるとは甚し、而も這般最も恐る可きパチルスの侵入に意注かざるは何の故ぞ。（三十二年二月）

高等乞食

高等淫賣なるものありて、中流以上の社會に跳梁を極むるといふ。吾人は高等乞食なるものゝ一部の間に、頗る跋扈するを看る。

暮夜赤ケットを被りて、大臣の門に出入し、黄金幾片、其節操を切賣する代議士は、是れ高等乞食と稱すべき者にあらずや。嘔嚅笑語人の意に投ずるを勉めて、巧みに顯貴に貪接せんとする官吏の如き、舞文曲筆頭を垂れ腰を曲げ、只管財利の慾を恣にせんとする操觚者の如き、亦一の乞食にあらずや、聳跟曲拳赤髯の塵を拂うて衣食の資を求

め、巧言令色門徒の歓心を求むるに汲々たる宗教家は、乞食の最たるものに非ずや、其他教育家、實業家と稱する徒の、巧官媚婦間と雖も、尚ほ詎くせざる叩頭學を解する者は、皆束ねて此高等乞食の群に投ず可し。

彼の門に立ちて、破三味線にはかなき命を托し、はた母子橋下に伏して、通行者の影に哀を乞ふの徒、もとより社會下層の人間なるに相違なし。然れども彼等は斯くの如き境遇に陥る可き、必然の逕路を踏み來れる者也。或は商業に烈しき失敗を來し、或は不時の災難に困しめられ、或は物價の騰貴に厄せらるゝ等、種々の困厄に遭遇せるも、体弱くして、自己の汗に食を求むること難く、學なくして、人の上に立つの道なく、氣正しくして賊となること能はず。已むに已まれずして、遂に一椀の惠を、人に乞ふに至る。思ひ來れば、彼等は世に最も悲しむべく、最も憐れなる者の限りならずや。吾人の所謂高等乞食は然らず、皆相應の學識あり、相當の置位に在る者 若し自ら持すること固く、守るところ深からば、昂々然として、男子漢の本色を失はざるは、もとより易々たる事のみ。而も彼等は名譽を捨て、躰面を捨て、氣節を捨て、都へての男らしきものを捨てゝ、一の黄金を求めんとす。貪る所の量の多きによりて、高等乞食と稱するも、單に一箇の乞食として見れば、最下等の非人なる也。（三十二年七月）

咄々怪事

東都春に入りて、火の起ること頻々たり、警鐘の亂打に濃き夜半の夢を破られしと幾度なるを知らず。米價の騰貴は日に烈しく、金融益々切迫し來る時、幾萬の財産、冲天の伽藍、忽然として烏有に歸す。悲慘斯くの如きもの、亦多からんや。而も此大悲劇を現せしむるものゝ多くは、乳臭の一少年ならんとは、咄々怪事、誰か亦驚かざるものぞ。去月三十日養育院に入りし一少年あり 歳僅に十歳許、院員の問ふが儘に答ふる所を聞けば、放火せし所數ふるに遑あらずと云ふ。而も恬然として得意氣に語るに至りては、誰か白糸の染り易きに驚かざらんや。人の性や善、もと玲瓏無塵の美徳あり。而して生れながらにして、醜厲恢悪のうちに墮ち、墮ちて之を知らず、天下の不幸之に加ふるものありや。今の宗教家教育家は之を聞いて、如何なる感想を起せ

る。否ペイブルの外を知らず、教科書以外を解せざる彼等は、此問題に與かること能はじ。吾人は切に今の作家が、精緻なる眼光を放ちて、此間の消息を研究せられんことを望む。社會は久しく單調なる戀愛小説に飽きつゝあるを知らずや。（卅一年五月）

雜居後の我婦女

事は既に數年の昔となれり、而も思ひ來れば、感想常に新たなるを覺ゆ。日清の間砲烟の裡に見たし廿七年の秋なりき、我友某鎌倉に遊び、八幡祠に至れば、一婦人の褻する者あり、其風俗によりて一見清人の妾なるを知る、俛頭瞑目して祈る所を聞けば、曰く旦那のお國をして勝たしめよと。嗚呼國人敵愾の熱血全身の脈絡を通じ、愛國の義氣天を衝くの時、神洲の土に生れ神洲の粟を食ふ者にして、平然敵國の捷を祈る、是れ實に其肉を食ふも尚ほ飽かざる者に非ずや。而して横濱附近の洋妾について觀察すれば、斯くの如き輩は甚だ少なからずといふ。

今や新條約によりて内地を開放し、外人の雜居に任せり。日光と、富士と、吉原とよ

り知らざる外人は、多年躊躇せし一小天地を出でい、至る處にいかなる醜行を恣にすべき乎。其心を本國に遺し來れる彼等に向て德義を説くも何の効なし。只我婦女の愛の尚ぶべきを知らず、處女の純潔を保つを勉めず、黄金と果敢なき欲望とに驅られて、外人の弄するに任ずるもの、所在見るに至る可きを思へば、滿身悚然熱時尚ほ寒殺せらるゝを覺ゆ。雜居の準備は、俄にリーダーの一を讀みはじむるのみに非ず、心あらん者、希くは今後の我風俗に留意する所あれ。（三十二年四月）

嗚呼驕奢の俗

上　何の進歩ぞ

傲慢、不遜、自貧、己惚等の自贊的惡德を網羅せる者は、即ち我日本國民也、蝸牛角上の一小天地を神國なりと稱し、外人を見れば直に夷狄と罵り、蠻人と嘲りし昔は今いはず、明治に入りて漸く三十年、長足なる進歩をなして、歐米の文明國と雁行の位置に進せりとて誇るに至りては、驚くべき己惚の極に非ずや。知らず、一大進歩とは何ぞ、歐米と雁行するものとは何物ぞ。張皇社會の諸方面を觀來るも、果して是れを見出し得る乎。

政治や如何、教育や如何、文學や如何、宗教や如何。事の政界に關するものは、今姑く措き、他方面を見るに、學術や大に進歩せしとなきに非ざるも、只一部少數の間に過きず、不學の子弟は至る處に存して、無教育を恥ぢざるの徒極めて多し。文界や幼態稚容又依然、作家に大理想を抱ける者なく、著作に雄篇傑作を見る能はず、讀書界

の趣味益々墮落して、徒に講談物の跋扈に任すのみ、若し宗教界に至りては、混沌暗黑の裡に彷徨して、蕊微不振の狀見るに忍びざるものあり。其他交通機關の如き、諸種の職業の如き、はた貿易事業の如きは勿論、文明の利器たり、進歩の皷吹者たる、新聞雜誌にしてほ尙、規模や小、企圖や淺、歐米に對比せば、宛然兒戲の觀を免れざる也、斯くの如くんば、歐米と雁行するに足るといふものいつくにかある、長足の進歩とは抑々何を指して稱する乎。自贊、己惚、こゝに至りて、亦極まれりといふ可し。若し强ひて長足の進歩をなせしものを擧ぐれば、只ろれ風俗の驕奢ならん乎、今日の狀を以て、三十年前の昔と比す、長足突飛、まさに極端より極端に走りたるもの、目を放てば、綾羅錦繡の袖は行く處に飄り、耳を欹つれば、管絃吹歌の聲は至る處に聞ゆ。煉瓦石房は康衢を壓して建ち、駟馬瓊輪は街頭を縱橫に馳驅す。食や必ず佳、居や必ず壯、一事一物皆年と共に、美を加へ華を增し、生活の程度は益々進みて抵止する處を知る可からず、若し維新以前の古老を地下に起して是れを見せしめば、安んぞ駭心慄魄、自國にあらざるの感なきを得んや、斯くの如くにして進まば五年の後は如何、

十年の後は如何、濫觴を綱うて、泥土の中に半生を送る農夫も、糟糠に甘じて、一枚の板に浮世の浪を隔つる漁夫も、最早再び見る可からざる過時代の人となる可く、高帽三紋の乞食を、寒村僻邑に見るといふも、強ち一片の空想に非る可し、故に吾人の目より見れば、長足の進歩をなしたりとすべき者は、只生活の驕奢のみ、風俗の華美のみ、若し今日の社會に文明の俤（しかいふを得可くんば）ありとせば、ろは、至高議政の府たる帝國議事堂にもあらず、天下の眞材を出すといふ帝國大學にもあらず。烟突の烟不斷の雲を靡す處にもあらず、只砂を飛ばし塵を擧げて路人を叱咤する馬車の裡に、燦爛光を月と爭うて不夜城の觀を呈する電燈の影に、存す可きのみ。

自費人種が口を極めて誇る、文明國の眞相は、實に斯くの如し、吾人は此現狀に甘んぜざる可からざる乎、嗚呼天下を掩へる驕奢の俗は、自然の趨勢なりとして、默す可きものなる乎。乞ふ暫く吾人の説く所を聞け。

第一　奢侈とは何ぞ

中　奢侈は全然非行也

ロッシュエルの言ひし如く、奢侈は絶對的の名稱に非ずして、

相對的名稱也。故に一時一處に於いて奢侈と目せらるゝものも、他時他處に於いては、必ずしも奢侈に非ず。野蠻人の驕奢なりとするものにして、文明國人の節儉の極なりとするもあるべく、往時には費に過ぎしとせしも、今は儉を超えたるもある可し。奢侈は都べての時と處とに於いて、概定すること難しとせば、一定の丈尺を以て明劃に奢侈と節儉とを區別すると、決して容易の業に非る也。然りと雖も試みに此間より一の不變則を抽象し來れば、奢侈とは必要ならざる裝飾に向つて、高價を拂ふものと云ふを得可し、換言すれば、勞働者が永き時間の苦しみによりて、成し得たるものにして、精神を脩め、肉躰を養ふに於いて、何等の裨益する所なき物品を、使用若しくは消費するの謂也。

第二　奢侈は慾望に伴ふ

歴史以前の穴居人種すら、獸骨に刻みたる海狸馴鹿の形等に於いて已に文飾を好めることを表はせり。今日の建築彫刻等は、這審美的官能の發達せしものに外ならず。詮ずる所人間は裝飾的動物也、麻を組みて衣とする者は毛を織りて被らんことを欲し、麥を焚いて食とする者は、更に肉を煮て食はんことを

風ひ、行燈を捨てゝ洋燈を求め、鎚石を捨てゝマッチをとるは、人欲自然の發達也、然りと雖も、是れを以て直に奢侈とはなす可からず、是れ皆日常必須のものにして、美術上より見るも、生理上より云ふも、毫も非難す可き所なきのみならず、野蠻の狀態に昏睡する種族を醒覺せしむる動機たるものは、斯る慾望に外ならざる也。只人間の慾望には限りなく、其想像極りなし。若し望蜀の念の走るに任せて節慾を加ふるなくして、不急の業を起し、無用の營をなすに至りて、即ち奢侈の弊は起る。而して此風一度生ずるや、人々相競うて驀を傾け庫を空うして、他に及ばざらんことを恐れ、陋俗次第に浸染し來りて、甚しきものは、實存せざる驕奢を想像のうちに描いて、之に達するを樂しむに至る。各國の國民が其想像の區域の漸々大なると共に、奢侈の度の從つて大なるに於いて一致せり、今日の英國々民のうち、リチンを以て第一の晴衣となすは、貧の最も甚しき者とせらるゝも、中世に於いて之れを服する者は、富の大を誇るに足る可き徽章視せられ、王家貴族の名媛が、許嫁の引出物として、襦衣に製したるものを贈る程なりき。德川氏の千代田に城きてより實曆の頃までは、貴人にあらされば用ふるあたはず、偶々男子の褄著に用ゐて華美を飾りし博多の帶も、今は市井の商賈も珍とせざるに至れり。是れ實に自然の理法にして、斯る例は指を屈するに千百、尙ほ足る可からず、然らば今後慾望の發達するに放任して、毫も節制することなくんば、奢侈は如何なる程度に迄進むべき乎、是れ豈今日に於いて吾人の想像し得る所ならんや。

第三 奢侈は虛榮心に發す

思へ今の人の物品を愛するは、自己一個の判斷によるものいくばくかある、多くは他人の批評によりて、始めて其物に價値ありと思ふに非ずや。是を以て相競ひ相爭うて求むる所のものは、以て自己精神の安慰を得んとするに非ず。肉体を攝生し、はた鍛錬せんとするにも非ず、只他人の羨望と嘆賞とを博せんとするに止まる也。岩崎久彌は四千萬の富を積むといふ、大廈高樓に住して勝地を別墅を搆へ、山海の珍を集めて五味を和す。堂々の觀ありといふべし。然りと雖も退いて考ふれは、其居る所は五尺の体軀を容るゝに過ぎず。食ふ所惟一の胃を滿たすに過ぎず、彼れの快なりとなすものは、只世人一般に富を重するが故に、四千萬の黃金

を積むと云ふ名稱に於いて、其慾望を得るに止るなからんや。田沼の寵妾某の生父が、隅田の別墅に方六尺の硝子板を箝めて雪見の亭を造りしといふも、若し彼れにして、無人島に在らば、いかでか斯る狂奢を試みんや。由來流行には服從せざる可からざるの理由なし、而して今の人の沿々擧げて流行に後れざらんことを願ひ、甘んじて服飾の奴隷となるものは、畢竟するに此意味に外ならざる也。只肉慾の奢侈のみは此理を以て律す可からず、美食を喰ひ佳肴を貪るもの、自己の渴望を滿たさんが爲めにして、必ずしも他の羨望と嘆賞とを博せんか爲めに非ざれば也。然りと雖も肉慾の極端に走れるものは、亦必ず虛榮心の伴ふことを免れず、あらゆる肉慾を想像のうちに描くものは、瑣細なる味を珍重して、嗜味の精微に誇るに至る。クレヲパトラが、眞珠を金杯に溶かして飲料とせる、或はヘリヲガブラスが、鶯の舌を煮て、食膳に供したるが如き、即ち虛榮心に出つる所にして、自己の渴望を滿たさんが爲めに非ず、斯くの如くんば、奢侈は自動的に非ずして他動的也。自己の精神より湧くにあらずして、他の刺激によるもの也。是れ豈內にする所あり、俗流に盲從するを肯はざる者のなす可き

とならんや。

第四　奢侈に眞快樂なし　由來人間の快樂とするものに限りなし。時にとりて異り、場合によりて異り、人によりて異なると雖も、天下のもの一として快樂たるの價値なきはおらず。奢侈豈快樂を求め得可からずとせんや。然りと雖も、奢侈によりて得る所の快樂は、最も皮相淺薄にして、且つ到底永く安じ得可きものに非ざる也。蓋し是れ其快とするものは物に存し、意に適するものは外界に止まれば也。試みに一例を擧げん乎。奢侈の徒は美なる衣服を纏ふ、是れ彼等の快樂なる可し。而も流行一度變ずれば、忽ちにして其快樂は去る。彼等は黃金を積んで虛榮を衒はんと欲す。是れ彼等の大快樂なるべし。而も一朝破產の厄に遭へば、彼等は天下の最大不幸兒となるべき也。且つや慾望に限る所なければ、寸を得て尺を思ひ、尺を求めて丈を欲するは當然の理、而して涯りなき空想は遂に實在に得可からず。茲に於いてか生涯を碌々煩悶の裡に終るに至る也。斯くの如くんば、奢侈によりて得る所の快樂はそれいくばくぞ。蓋し人生眞個の快樂は外に非ずして內に在り。物に存せずして心に潛む。若し心裡寬

裕にして胸襟清白、常に快樂を咀嚼す可き一道の餘裕を存し、而して人を欺かず、己を欺かず、俯仰天地に恥づる所なくんば、始めて眞個の快樂を嘗むるを得可し。邸宅の大、家門の壯、衣の美、食の佳、集め盡くすと雖も、豈吾人の所謂快樂を求むるを得可けんや。孔子は落魄困頓あらゆる窮厄を嘗め盡くせる者、滔々たる世上の俗物は見て以て哀れむ可きの極となさん。而も彼れは平然として曰く、蔬食を喰ひ、水を飲み、肱を曲げて枕とす、樂み亦其中に在りと。是れ何の故ぞや、畢竟するに、孔子は快樂を物躰に求めずして、其理想のうちに得たるが故のみ、已に理想のうちに快樂を存す、千の飢餓萬の困厄、苟くも肉体に屬する都べてを集め來るも、遂に其快樂を奪ふこと能はざる可き也。更に這般の實例を眼前脚下に徵せよ。吾人が街頭を歩する時、紅塵萬丈眼を掩ひ鼻を塞く間に、夫は千斤の重荷を曳き、妻は赤兒を負うて後押しをなすを見る。道路目して慘まれに加ふるものなしとす。然りと雖も、彼等は自家の職分によりて、自家の安心を求め得可きもの、若しろれ他に呵らず、人を欺かず、正直に勤め、正直に働きて、其の天分に悖るあとなくんば、例令肉爛れ骨碎くるの苦しみあるにもせよ、胸中の平安は、波穏にして滑らかなる春の海の如かる可し。而して一日の業を太陽と共に終へ、欣々家に飯るや、一家團欒食饌を共にして、妻が手製の捫み料理に、滞身の疲勞を忘れ去る樂天居の眞趣味に至りては、いかでか綾羅の裝を飾へして、大牢の滋味に飽く蠱の解し得る所ならん。

第五　奢侈は品格を造らす

服飾は固より人の儀容と威嚴とを表はすに相適なし。天下幾億萬の人、其賢と不肖とは、肥瘦を以て分たる可きに非す、容貌を以て知る可きに非す、幾分か衣服の好尚によりて其人を知る可く、外部の裝飾によりて、其性を窺ふことを得可し。然れども是れ儀容あり威嚴ある人に於いて、初めて適す可きのみ。寶石は良工の琢磨に遭うて益々光彩を加ふ可し、土塊を包むに金爛を以てするも土塊は依然として土塊たる可き也。笑ふ可きは奢侈の徒に非すや、這般看易きの理を顧みすして、單に炫服覩粧以て紳士たり淑女たるを得可しとなす。若し彼等に授くるに、純金の指環、金剛石の頸飾、優美なる燕美服、都雅なる絹帽を以てせば、直ちに莊重なる品格を作り得可しとする乎。若し能ふ可くんば、今日の紳士たり淑女たらん

には、高等の教育を受くるに及ばず、高尚なる思想を養ふの要もなし。只小間物屋乃至服屋若しくは裝飾會社に足を運ぶあと平日ならば、直ちに其資格を有するを得ん。吾人は文明の世のありがたさに、感泣して尚ほ足らざるを覺ゆ。而して這般の筆法を以て論じ來らば、周遊休せず、席暖ならず、終歲戚々として一日逸居するあとなかりし釋迦は、燦爛としてあたり眩ゆき法衣を着、曼に聲を曳くの大伽藍に晏坐する今の管長門跡なる者より、遙に數等の下に在るべく、二十年の長き貧と孤獨とを忍びしカーライルは、驕奢淫逸道を街ひ、粹を誇る今の大文豪連の後塵を拜せざる可からざるものなる可し。斯の如き論法は奢侈の徒以外に於いて通用せず。

第六　奢侈は美的感情に反す　都べての動物に智情意なきはあらず、肉食の佳なるは狗尙ほ知り、齋椽の暖なるは、猫尙ほ且つ解す、而して遂に人間に伍すること能はざるは、何ぞや。彼等に美的感情を缺けはなり。何をか美的感情といふ。是れ一毫の汚風の容る可き間隙なく、一點の纖塵の乘す可き缺陷なき至純至精の感情にして、且つ智意の羈絆を脫して、高く天地の外に立つ可きものをいふ。人間の空氣は出來汚濁なり、幾多の罪惡、幾多の苦痛、幾多の煩惱等は、常に此間に潛む、而して皆是れ智と意とによりて起るものに外ならざるなり、獨り美的感情は、よく此智意を脫却して、都べての汚濁を拭ひ、あらゆる腐敗を清め、以て清白、雄大、高潔等の諸德の中に包容藏括せしむ、試みに一葉の小舟春風に任せて、襟懷を清波に洗ひ、はた秋風蒼條の裡、斗牛の間に燦たる無數の星宿を眺むれば、誰か至純至精の感情縱橫に湧き來りて、罪なく、汚なく、慾なく、濁世の外に在ること三萬里の感なきを得んや。斯くの如くんば、セリングが人間最終の願望は、美的發達に在りといひしもの誠に宜なりといふ可し。社會の風紀を紊り、經濟を亂す彼の奢侈の徒は、亦此美的感情に反抗し、破壞しまるものなり。試みに彼等の舉動嗜好等によりて、其感情の高卑をはかり來れ。いづれか汚濁醜惡の極なることを證せざる、外面の虛榮に汲々として、流行の奴隸に甘じ、善に向つて進むの力を消磨し、惡に向つて抗するの氣を阻喪せるものは、眞に僞惡醜の極、何を以て至高至純の美感は、其頭腦に宿らんや。思想の卑野にして趣味の墮落せる、寧ろ當然の事のみ。固り彼等として美を愛せざるに非ず、偶々美を愛するの觀念

を起すも、そは美を自己の所有物として、初めて愛するの念を生じ來るなり。見よ、彼等は萬金を費して庭園を築く、前に泉水あり、後に築山あり、鯉魚潑溂此處に躍り櫻花瀾熳彼處に咲き亂る、綠陰清風垢膩を洗ふに足らずとせず。然りと雖も、自然を樂むは、何ぞ必ずしも巨費を投じて、役夫を勞せしむるの要あらん。一たび孤節飄然として都門の外に出づれば、到る所に自然の大油繪は、其觀望に任かす也。而して其光景の偉なる、皆を決して萬里望斷するの觀あるは、豈一小庭園の比ならんや。只それ彼等の樂しむ所は全然主我的なり、單に美なるが故に愛するに非ずして、美の己がものたるが故に愛するなり、美術に於ける亦然り、彼等の樂しむ所は、色澤の配合、形線の調和等に存せずして、原料の高價なるに在るなり、一錢だに値せざる原料を以て造られたる土偶は、奈何なる美趣あるも、毫も顧みずして、寶石を鏤めたる金銀の像は、如何に趣味の卑下なるにもせよ、珍藏賞玩措かざるなり。彼茶湯の如きは、最も趣味の閑雅なるものにして、主として、則を自然にとる。故に器必ずしも備はるを求めず、食必ずしも佳なるを要せず、否其全からざるに任ずる所に價値あるなり。而も

奢侈の徒は、自然に則る可きを忘れ、汲々として古器珍物を求め、之れが爲めに千金を擲つて惜しむなきもの少なからず。故に今や茶湯といへば、奢侈の別名なるが如きに至れり。

畢竟するに彼等が美を樂しむといふも、單に虛榮を衒ふの手段に過ぎずして、奢盲に入れる驕奢の病根は、遂に美的感情を喚起すること能はざるなり。極言すれば、彼等は肉食の佳なるを知り、南椽の暖なるを解する狗猫に伍すべきものゝみ。

第七　奢侈は虛禮を伴ふ

今日吉凶慶吊の際の贈答を見よ、贈る者、紛飾塗抹只外觀の美を恣にして、毫も眞情實意を籠むることなく、受くる者、亦贈遺の多寡によりて、直ちに親疎の分を判す可しとなす。是に於いてか富者は己が欲するまゝに、華美を衒ひ、粉飾を恣にし、貧者亦日用必須の物品を典却して、之を調ふるに至る。是れ滔々たる社會一般の狀況にして、奢侈の弊風は終に禮の本末を全く顚倒するに至らしめし也。夫れ道は自他相互の間に存し、調和親睦の度に從つて進む。吉凶相來往し、寒暑信を通じて、以て感情の圓滿を保つは、誠に人生の美事也。而も言詞のみにては、

其意を達するをと能はすとなし、更に物品を贈答して、以て誠意を表するに至る、是れ固り可、而も其可なる所以は、只限りなき誠意深情の籠れるか爲めなるのみ。若し全然形式的儀式的に止まらは、本末を誤れるの甚しきもの、亦何の稱すへきとか是れあらん。邦人よく彼の支那又は朝鮮に於いて、數多の泣男を雇うて、葬式の盛大を裝ふの具となすを笑ふ。是れ固り卑陋笑ふに堪へさるもの、而も笑ふ我れには遣般の笑ふ可きおとなき乎。頃者やゝ義へたりといへとも、彼の十數對百數對の花筒の行列を葬式に見るは實に泣男に劣らさる馬鹿氣たることにわちずや。夫れ祭葬の事は、誠に人生の最大事也。子たる者、其の父祖の葬儀を行ふに當りて、外觀を壯にせんとするは、情酌む可きものなしとせす。殊に父祖の功勳學識、一世を蔽ふものある時は、送者幾千、馬車幾百、路上見る者をして、其の偉績を追想せしめ、其の功勳を謳歌せしめんとするは古來よりの常とする所也。然りと雖も、人間の胸臆より湧き出づる誠は遣般無用の供具を以て易へ得可きものにあらす。同情の熱涙は到底虚禮虚飾の行列によりて求め得可きにあらず、彼の贈花の膨しき、一大花堤を街頭に築きたるが如きは、徒らに人をして哀悼の情減じて、厚忌の念を萠さしむるのみにわちずや、斯くの如くんば哀悼の意を表す可き葬儀たるの實いづくにかある。是れ獨り祭葬の事につきてのみ言はんや。歳暮新年に巨大なる折を車に積んで往來するが如き、冠婚の賀に酒泉肴丘、肉慾を恣にするを以て、其本分となすが如き、皆禮の如何を知らざるものにして、社會に害毒を流すこと實に少なからざる也。

第八　奢侈は實用を碑すると大ならず

奢侈に耽くる者は、衣服に飲食に家屋に求むる所大なるが故に、終日之れを思ひ、終夜之を夢み、全力を擧げて物質的慾望の渦中に沒し去りて、彼文學を樂み美術を愛する等の高雅なる思想は、全然湮滅し去る也。而して奢侈斯くの如く精神の發達を害するものとせば、實用上に於いて裨益を與ふる所大なるべき乎。否亦何等の益することあるなし。試みに思へ、人は皆居の大なることを欲すと雖も、大厦高樓に住して何の快かある。巍々高く空に聳え、堂々嚴ちんこと雖も、大厦高樓に住して何の快かある。巍々高く空に聳え、堂々嚴術を壓して建つ、壯は即ち壯也と雖も、是れ唯外觀のみ。徒らに華美にして、極めて軟弱なる我建築物に一毫の稱す可き所かあらん。地震毎に飛び出す煉瓦造りと、洪水毎

に洗ひ去らるゝ鐵道工事とは、我土木事業の不正なるを證して餘りあらずや。又綾羅錦繡と雖も、纏うて何の得る所かある可き、硬き木綿に鍛ひ上げたる身体と、絹布に纏はれたる身体とは、恰も草木の山中に生長したるものと、温室に生長したるものとの差ある也。滔々として食の佳なるを求めて、一幅餓鬼道の圖をあらはし來ると雖も、食何ぞ山海の珍美を要せん。常人に感ずること能はざる些細の眹に誇り、或は眞珠を金杯に溶かして飲むも、鶯の舌を煮て食するも、是れ只今一片の空想を充すに止まるものにして、毫末も肉体を裨することなし。其他粱肉に飽き大牢を貪るもの、衛生に資するといふも、穀物野菜の身体に利あるは、肉食の遙かに及ばずといふ有力なる議論すらある也。是れを事實に徵し來れ、經穢を纏ひ、糟粕に甘じ、檐傾いて月敗床を訪ふ所に安ずるものは、身健にして氣剛、山岳の嶮、風濤の難、凌ぎ去りて平々坦々大路を行くが如しと雖も、金殿の奥に晏坐して綾羅の裝を飾し、粱肉に飽く者は、柔軟羸弱、吹けば飛ぶが如き幽靈然たるものゝみに非ずや。

第九　奢侈には何等の理由なし

片々として流行を逐ふの徒は曰く、流行は自然

の理法也と。是れ何を以て云ふか、一事物の流行し來るや、天下を擧げて直ちに同化せらる、是れを以て流行は自然の大勢、小數者の抗し得可きものに非ずとなす乎。試へて問ふ、汝の庭内に雜草蔓り、荊棘充つるも、自然の勢也として默視するを得るか。滔々たる濁水汝の沃野に汎濫するも、是れ已む可からざるあとなりとして、看過するを得るか。自然の理法なるが故に、抗す可からざるの理いづくにかある。更に一歩を進めて流行の起因に一瞥を與へよ、身体頭部等の裝飾品は、多くは花柳社會、若しくは梨園社會より胚胎し來るに非ずや。而して名工の銀猫も、沙門の掌に轉ずれば、瓦礫と同じく、剝落の破聲も、王侯の手に入れば、價自ら尊きが如く、物に對する趣味は區々にして、一部少數者流の嗜好を以て全躰を律す可からず。況んや俳優妓等の最下等の人物の嗜好に於いてをや。彼等は妓を售り、色を鬻き、淫を賣るの徒、趣味の最も墮落せるもの也。嗜好は最も低きもの也。換言すれは品格に於いて最も缺乏せるもの也。奈何に炫服覩粧を事とするも、其野鄙陋劣の本色は、到底掩ふ可くもあらず。斯くの如き輩の嗜好に投ずるものにして、如何でか高尚なる趣味を有すべき。

而して吾人は何等の理由によりて、趣味なき流行を追はざる可からざるか。且つ狡猾なる商賈が彼等を利用して、自己の商品を流行せしむるは珍らしからざる所。寧ろれ遣手段に弄せられて流行を逐ふは、只狡商の財嚢を肥すに止まるもの、痴呆實に極まるものといふ可し。

第十　奢侈は拜金の弊風を惹起す

俚語にいふ、親子の間も金錢は別也と。是れ最も黄金の勢力を的破せし警語也。骨肉至親の愛は、實に人情の精粋にして、天倫に出づ。火は物として焚かざるはなけれども、親子の愛は焚き得可きに非らず。水は物として溺らさるはなけれども、骨肉の情を溺らし得可きに非ず。只これを焚き、これを溺らし得可きものは、唯一の黄金なりといふに至りては、誠に人慾の極點に非ずや。一には黄金、二には黄金、黄金の觀念を以て頭腦を滿たし、銅臭を以て身躰を被ふは、殆んど一般の狀にして、其之れを求むるの急なるや、自己額上の汗によりて得んことを思はず、虚誕百出、詐僞自在、或は囁嚅笑語人の意に投ずるを勉め、巧言令色頭を垂れ腰を曲げ、以て其慾を滿たさんとする也。劣卑野なる商賈は固より、

無節なる政治家もいふに足らず、抗懷獨歩、利慾の外に昂々然として、國民の精粋と稱せられし學者の如きにして、尚ほ此類波のうちに沒し去れる也。亦以て拜金のいかに猖獗なるかは想像に餘りある可し。然り而して何を以て此陋俗の浸染、今日の如く甚じきに至れるか。思ふに經濟思想の發達、國家機關の複雜等與つて大なるものあらん。而も一面は明かに奢侈に起因する也。今は實に黄金萬能の時代にして、富者跳梁の世、若しろれ黄金積むこと山の如く、庫裡財貨を以て滿たさば、天下のもの求めて來らざるなく、望んで得られざるなし。金殿玉樓、寶車銀鞍、意に從つて得べく、國士の節を折り、淑女の操を破る、亦難からず。斯くの如くんば、奢侈に耽くる徒の匆々遑々として、利のある所に麗至蟻聚するに至るは、當然の事に非ずや。彼等は一枚の晴衣を製せんが爲めに、叩頭幾百回し、一個の金時計を求めんとして、聲跪曲拳して人に事ふる也。嗚呼拜金の汚風吹く所、志氣亡び正義の光なし。而して奢侈は此汚風をして、今日の如く甚だしからしめし也。

第十一　奢侈は經濟の目的に反す

奢侈品の使用によりて、其勞働者は口を糊す

るを得るに非ずや。とは奢侈の徒の最後の鎖壁として恃む所の辭柄也。固り奢侈品の製造によりて、賃銀を受くるものはあらん。奢侈品の賣買によりて利を得る者は之れあらん。然れども利を得るが故に必要なりといはば、天下何物か必要ならざるとある可き。肉を賣り情を鬻ぐ淫賣婦も、莫大の利を得るが故に、毫も非難すべき所なかる可きに非ずや。吾人は奢侈品の製造賣買によりて生活する者は、殆ど不德の淫賣婦に均しと云はんとす。言の矯激に失するを咎むる勿れ。人を愚にし、家を貧ならしむるに於いて、兩者果していくばくの徑庭がある。而して彼等を驅りて斯る境遇に至らしめし者は、奢侈を喜ぶの徒なる也。若しこれ奢侈に煙散霧消する黃金を轉じて、有益なる事業に施さば、彼等は不正の職業を去りて、高貴の職業につき、以て大に社會の富を增すことを得可く、曩には外界の虛榮を衒はんが爲めに消費せる同じ財產を以て、不毛を開拓し、材木を栽培し、交通を便ならしむる等、幾多公共に益ある事業を成すを得可し。是れ最も富の運用の宜しきを得たるものに非ずや。是れ尙ほ爲すを得ず、奢侈は經濟の目的に反するを知らざるの徒は、恐らくは都市を灰燼に附し、手を

拍て笑ひ棄れまじき人物也。一市民としては巴里の炎燒を悲しむも、經濟學者として、は之れを喜ぶと放言せる者、佛國に在りき。

下　勤儉の美風を鼓吹す

奢侈心は如何に痴愚にして、其行爲は如何に不正なるか、讀者庶幾は從來吾人の說き來りし所によりて、略々了せられたるならんか。而して吾人の言にして已に誤る所なくんば、須らく這弊風を根本的に打掃せざる可からず、これ常識ある者のなすべき當然の事に非ずや。已に奢侈は何等の實用を裨するおとなく、品格を造るおとなく、經濟の目的に反すといふ。美なる衣を裂き、腦れる食を捨て、大なる家を去るに於いて、何の躊躇か要せん。虛禮は道に反すること大なるものならば、直ちに廢し去る可きのみ。流行を追ふは最も愚なるもの、何を以てか時と移り世に從うて服飾の奴隸に終らん。其他日常生活の都べてに意を注いで、百事を質素ならしむ可し。斯くして奢侈の弊を除かれたる社會は何等の不都合ありや、個人の生活に何等の不便ありや。奢侈品の製造者は、一時之れが爲めに職を喪ぶべし。然りと雖も、奢侈の爲めに蠹し

たる巨萬の黄金を、更に有益なる事業に向つて投ぜば、幾多高貴の職業は、彼等を得つに至らん。其名目に變動を來すも、勞働者の數には何等の影響あることなし。更に吾人日常の生活に見るも、苟くも生活の用を達し得可くんば、金殿玉樓も、陋屋茅舍も、毫末の異あるなく、錦繡綾羅も盗襤破片も、何等の差違なき也。殊に奢侈に耽心るが爲めに要せし時間と、苦心とを擧げて、精神の修養に費さば、果して如何。外形の花は内部の實に若かず。形骸の美は精神の美に及ばざる也。

然りと雖も、奢侈を排し、節儉を勤むれば、其以外に於いて盡す可きものなきか。思へ、徒食職を勵まず、晏坐業を勉むることなくんば、節儉抑々何の効かある。消極は必ずや積極と相待つを要す。吾人は更に職業の觀念を皷吹せざる可からず。職業は吾人の天職也、吾人の有する五感と四肢とは、生活の義務を了せんが爲に作られたるものにして、娯樂に耽り、悠遊日を送らんが爲めの具に非ず。吾人が社會に立ちてよく獨立の躰面を確持し得るものは、畢竟するに、完全なる職業を有するに由る、之れを以て一時一刻左右を顧眄せずして、自己の業に進むは、吾人の背く可からざる義務也。貧者に於いては固り云ふ迄もなし、富者と雖も、何を以てか徒らに祖先の餘澤に日を糊して、晏然日を送り得るの理あらんや。凡そ義務に伴はれざる權利あることなし。富者亦必ず自己の費す所は、自己の得る所ならざるべからず。我國一部の間に往々無職業を誇る者ありと雖も、是れ實に其大恥辱なるを知らざるものにして、抑々亦彼等が墮落に入るの門戸實に茲に存す、蓋し職業なくんば、職業以外に生活の途を求めざる可からず、而して職業外に於いて何等の方法ありや、只乞うて得ると奪うて得るとの二あるのみ。自己の躰面を沒し、獨立の精神を喪ひ、黄金の前に拜跪して顧みざるもの、はた世を瞞し、人を欺き、あらゆる不德を冒して、不義の榮華を貪らんとする者、畢竟するに無職業に由りて起れる自然の順序なるに過ぎず。是れが最も適切なる例を擧くれば、彼壯士なるものなるべし。易水の風蕭々今尚ほ寒く、夷門の雲暗々昔に變らざるに、壯士の名已に其實を失ひて、風霜の氣見るに由なきに至れるもの、即ち何等の職業なく、徒食を以て本分と心得しが爲めに非ずや。苟くも自己の躰面を重じ、獨立を欲するものは、職業の尚ぶべきものなることを、深く腦裡に刻せざる

べからず。

優勝劣敗の活劇場の正面を渡る男子に於いては、固り云ふ迄もなしと雖も、吾人は亦女子に向つて大に職業の必要なるを說かざるべからず。例令女子なるにもせよ、健全なる身躰と、永き時間とを有する以上は、坐臥悠々男子の勤苦勞役を袖手傍觀するの權利あるとなし、亦須らく一種の職業を選擇して、適度の勞働に從はざるべからず。而して之れによりて享くる利益を擧くれば、第一は女子の置位を高むること也。今日の女子の置位は、實に氣の毒に堪へざる程也。彼男女同權論の如きは、之れを救はんが爲めに出でたるもの、理に於いては、必ずしも不可ならずと雖も、遂に空論に終るを免れ能はざりしは、女子に何等の實力なければ也。到底生存競爭の激甚なる社會を渡ると能はざれば也。若し女子にして紅粉美裝に日を送るを以て本分となすの愚を止め、相當の職業に勵み、一定の勞働を勤め、入りては夫を扶けて家庭の活氣を添へ、出でゝは獨自一己他に倚らずして生活するを得るに至らば、位置求めずして、自ら上るを得可き也。第二は女子の墮落を拒ぐを得るに在り。想ふに我國の女子ほど、墮落の甚しき

ものゝわらんや。名目に於いては立派なる處女たり、淑女たりと雖も、事實は賣淫婦たるを證するもの、滔々擧げて數ふべからず。是れ其慾情の走るに任せて、斯くの如きに至れるものあるべしと雖も、多くは一家生計の困難、又は自己獨立の出來得ざるに由る。若し彼等にして早く職業に身を投じて倦まざらば、其得る所の報酬は、優に此等の墮落に遠ざかるを得べし。吾人は親の爲めと稱して節操を賣り、夫を濟ふを名として、淫街に沈むものある毎に、其思はざるの甚しきに悵然として涙なき能はず。次きに數ふべきは一家の生計を豐にするあと也。これ敢へて說明するの要なかるべし。

以上三個の利益は、實に職業によりて得る所。女子たる者、豈怪哉躊躇すべきことならんや。頃者我國女子の職業は漸く發達し來りて、五百種に上りしと雖も、英米兩國に比すれば、尙ほ微々たるを免れず。吾人は一日も早く、至る處に纖手を揮うて、頷上の汗を拭ふに暇なきの光景に接せんことを望む。

言走りて少しく岐路に入れりと雖も、讀者庶幾は吾人の希望を了せられたるならんか、吾人の云ふ所は極めて單純也。只一方に於いては百事を儉にし、一方に於いては、自

家の職分を守れといふに過ぎず。約言すれば勤儉を奬むに在るのみ。勤儉といふ、朋友なる道學者先生の口吻を學ぶに似たり、而も陳腐にして單純なる此二字は、實に幾多の美德の集りて組織したるものにして、責任此内に籠り、職分此内に存し、獨立の精神此内に潜み、剛健の氣象此内に在り。彼暴惡、汚濁、醜陋、不健全等、苟も敢せる分子の入るべき缺陷は毫末もあるなし。閉ずれば只僅に二文字、開けば幾多の美德は溢々として溢れ出づ、勤儉は實に百行の基、百善の源、人間處世の要訣は遂に此外になし。天下を肅清ならしむるものは、實に勤儉に非ずや。不羈獨立、体面を全うせしむる、亦勤儉にあらずや。

而して勤儉は、斯くの如くにして、其用を盡し得たるか。然りとせは、是れ未だ大に稱すべきに非ず。何となれば單に自己を利するに止まれば也。衣食住を大に儉にせりといふ、是れ頗る可也。孜々職に勉めて他を顧みずといふ、亦最も喜ぶべし。然りと雖も、若し身に綿服を著て、懷に巨金を蓄へなば、綾羅錦繡を飾ると何の差なきに非ずや。心を傷め躰を苦しめて、單に金庫を増すを喜ばい、所謂黄金の奴隷に過ぎざる

に非ずや。勤儉の眞諦は自ら溺くすると共に、更に他を厚うするに在り。即ち悉に蓄ふるの黄金あらば、分ちて人に惠まざるべからず。庫に積むの紙幣あらば、散じて他に施さゞるべからず、是れ實に人間自然の情より酌み來りし不文の大律法にして、吾人の地球上に生存せん限りは、欠くべからざる所のものにあらずや。他の爲めに財を分つといふ、偶然見來れば、難事なるが如しと雖も、決して然らず。奈何となれば、是れ自家門外の雪を掃ふことを止めて、他人池邊の氷を碎けといふにあらず。三度の食事を廢して、隣家の哀子に惠めといふにあらず。只節儉によりて省き得たる冗費を、他の爲めに投ずるのみ、況んや之れを鼓舞奬勵するに足るべき一種愉快の念は、常に伴ふに於いてをや、試みに思へ、青銅僅に一錢の儉は、母子門に立ちて破三昧線に、果敢なき命を托するの徒十人をして、失望せしめざるを得るに非ずや。橋下に伏して通行者の影に哀を乞ふ者を慰むると、十人なるを得べきに非ずや。只僅に一錢、之れを煙に易ふれば、一時間を支ふるに足らざるべく、酒を求めて、一滴の葡萄を得難かるべし。而も之れを利用すれば、十人の意を慰め、十人の情を奬ますに足る。是れ何等

快心の事ぞ。其勢に比して報酬の大なること斯くの如きは、いづくにか求めて得べき。而して此心を進めて、更に社會に及ぼさしめよ。換言すれば、個人的慈善を押し擴めて、社會的慈善たらしめよ。社會的慈善とは何ぞや。公共の爲めに財を割き、衆人の爲めに富を分つに在り。教育事業の如き、衛生事業の如き、事の公共に係るものに費を投じて、其業を助くるに在り。之れによりて受くる所の快は、豈個人的慈善の比ならんや。自ら求めて、不老の藥を飲まんよりは、衆人の躰を强め、身を健ならしむるの快なるを曉らは、獨り道を尋ね理を極むるは、衆人と共にするの樂に若かざるを思はゝ、財に饒なる者の、爭うて採るべき所のものにあらずや。而して資を社會に分つの心にして、百尺竿頭一歩を進むれば、富を國家の爲めに割くの精神となる也。一部の人に盡す心を及ぼして、國家に效す、即ち一部の間より得し樂を、四千萬人の多きより受くる也、自己一箇の資によりて、德を四千萬の民衆に分つもの也。是れ實に快の最も快なるものにして、善の最も善なるものに非ずや。天下よく此心を以て心とせば、社會革新の企圖は、意の如くに行はれ、國家經營の事業從つて成らん。而して是れ自ら薄うして人に厚きの心を擴めたる結果に過ぎず。勤儉の德の大なる猶くべきに非ずや。記して深く驕奢の徒を戒む。

（三十一年十二月）

三十棒 終

明治三十三年十一月三十日印刷
明治三十三年十二月一日發行
明治三十四年三月十五日再版

定價 金貳拾錢

東京市神田區錦町二丁目六番地
發行兼編輯人 佐藤儀助

東京市神田區錦町二丁目三番地
印刷人 池田良藏

東京市神田區錦町二丁目三番地
印刷所 知足堂

東京市神田區錦町二丁目六番地
發行所 新聲社

不許複製

正岡藝陽君著

新聞社の裏面

（三月五日發行）定價廿錢　郵稅四錢

「新聞社は文明の產み出したる新らしき惡魔也」と絕叫したる著者は、いかに新聞社の裏面を觀察したる乎。江湖試みに讀一過せよ。久しく閉されたる新聞社會の大秘密は、あゝに暴露せられて、社會の木鐸と稱する大鬼小鬼の、利に奔り色に嗅ぐ醜狀、目を掩はざるを得ざるべし、斷じて近來絕無の奇書。

小林柳村君著

戀愛と文學

（三月廿日發行）定價廿錢　郵稅四錢

戀愛!!何等美くしく清らかなる詩題ぞ、其名を聞くだに、滿身の血のわき來るを覺ゆるに、今著者が艶麗比ひなき筆を以て之を描くあり。文學艶にして浮あらず、綺にして紊れず、初戀の樂しきを歌ふ所、望さく春の野に若き男女の逍遙ふを見る如く、失戀の悲しみを述ぶるや、秋風孤閨に泣く少女の思ひにも似たり。心にあやみある者を慰む、いかで此書に及ぶものあるべしや。

新聲社近刊書類

緒方流水君著

文學社會雜著

塵影錄

（三月廿日發行）定價三十錢　郵稅六錢

著者の特色は、月旦の直筆讜言、一毫阿ねらざるに在り。觀察の該博にして奇警あるにあり。文章の洒脫にして才氣溢くが如きに在り。されば人林立の我文壇に立ちて、優に一方の雄たる所以乎。近著『塵影錄』筆を「滿都の人皆孤あり」に起して、「眉山と鏡花を論ず」に結ぶ。長短錯落約七十篇、社會論あり、人物論あり、作物の批評あり、文士の月旦あり、雜然稿を集たるが如しと雖も、實は一貫の系統をおして潛に明治文學史の裏面を說明せんとするもの。

注意

以上掲くる所の三書は、印刷中に在るを以て、頁數未だ定まらず、其定價郵稅の如き、多少の差を生ぜざるを保し難し。且つ發行期日も大定の見積也。

刷新の後の新聲

江湖の同情はいかばかり、刷新の新聲に注かれたる乎第一號は一月十八日(發行後二日)已に東京市中一部を見ざるに至り、第二號は更に數千部を增刷して、今や純文學雜誌中、第一の發行部數となれり。誌友天下に滿ちて一言一議、四方の反響を得べきを思へば、快寐に云ふ可からず、創刊以來茲に六歲、寸を得て尺に進み尺を得て丈に達し、幾多の猜忌と排擠を受けて遂に屈せず、今や事實に於いて文藝雜誌界を獨歩するに至る。而も吾人の所期尙遙遠、益々奮うて我新の宣言を終始すべし。只常に本誌の進歩を見る毎に慚愧し周章し、あらゆる毒言を放ちて自ら慰むるの徒は、爾後いかなる態度を以て吾人に對せんとする乎。一顧の値なしと雖も、空威張り、狗よがりの內に自滅すべきを思へば、亦一片哀憫の情なきに非ざる也。

出版目錄

新聲社

青年文壇之中堅

新聲

新聲は文學美術兩界に亘しる大雜誌なり、掲くる所、評論、小說、美文韻文、雜餘等の『主張』欄は、社中同人の虹霓の氣を吐く所にして、文藝小觀、社會時言の二に分つ。『人物』の文士月旦と、文壇風聞記は、他に比を見る可からざる者、一は森嚴の筆當代の名家を評論し、一は文壇の奇譚珍話を網羅す。『餘材』の甘言苦語には、覆面の武者長刀を揮うて辻斬を試むるあり、言、文學美術社會演劇の各方面に亘りて百人百樣の觀察、亦一代の奇觀也。其他の諸欄皆青年文士の熱血になり、一篇一章三誦に價せざるはなし。而して本年より大に**美術的趣味**を鼓吹せんが爲め、穂、其他新派畫家の筆になれる**繪畫**を毎月十數面を掲け、且泰西の版に製して出し、間々文士の肖像を載す。一卷約**百頁**而して滿紙、**舶來の光澤**紙を用ゐて印刷を鮮明にす、內容外形の完美斯くの如き『新聲』が今や**旭日**の天に朝する勢を以て文壇を横行濶歩し、文學雜誌中發行部數多きと第一に至れは偶然に非る也、

定價一部拾貳錢、六部六拾六錢、十二部壹圓廿錢、郵稅一部一錢○毎月一回十五日發行○

金子薫園君著

片われ月

落合直文君序　大町桂月君序
與謝野鐵幹君序
（訂正再版出來）

紙質良好＊裝釘頗美

著者徒爾に歌はず、歌へば乃ち吟腔鳴り韵致亮劉として盡くべからざらむとす。著者が名、江湖に聲喧せられて、其歌一々定評あり、此に懸疏の胥を呈するに忍びず。唯信ず、滿壑の松影、水に落ちて、一禽雨を呼ふの夕、燈を剔り梧に凭りて、靜かに其詩句を味へば、益する所、啻に神靈を清うするに止まらざるべし。一卷の「片われ月」所載和歌數百首あり、美文十數篇あり、情致纏綿にして雄力雄麗以て近時詞壇の標靶とすべし。

中村不折君畫　結城素明君畫
一條成美君畫

（寫眞銅版印刷）

定價廿五錢　郵税四錢

『墳墓』は絶好の詩題に非ずや

單調なる文壇、正に此奇書なかるべからず

新案製版
定價廿錢
郵税四錢

本書は、人生の平和靜安なる安息所とも云ふべき墳墓に就いて、種々の方面より觀察を下したり。章を墳墓とは何ぞや、墳墓と薄暮、陵墓の沿革、死と墳墓、墳墓と偉人、無緣塔、墳墓と詩人と、墳墓と歴史、墓畔の感慨、比翼塚、月と墳墓、鏡供塔婆の十二に分ち、精細奇警の觀察、流暢典雅の筆致讀者をして感極つて涙滂沱たらしむる者あり。殊に比翼塚と無緣塔とは雙つ乍ら美文の極粹金璽にして玉振なるもの、墳墓と薄暮及び月と墳墓の二章は、何故にろのよく調和する乎の疑問につき一々古歌古詩を例證として立論し、議論精緻一讀の下首肯するに吝ならざる可く、其他の諸篇、皆苦心慘憺の餘に成るもの、もと尤然たる大冊子にあらざるも、階に世の流行を趁うて出板する雜書と異なり、趣味饒多なること殆んどその比類を見ざる可し。

新聲社編輯局編

創作苦心談

定價貳拾錢
郵稅金四錢

凡そ一藝一業に秀づるもの、必ずや常人の夢想せざる苦心あり、解牛の徒、承蜩の蟹と雖も、其道に達せるものは、其言以て師となすに足る。況んや名を騷壇に立て、一篇一章常に讀書界を動す人の、苦心に至りては、後進のまさに繙に書して三省す可きものにあらずや。本書は蹄伴、柳浪、水蔭、宙外、魯庵、鏡花、風葉の諸子を始め、當代知名の文士に就いて親しく其苦心談を聞き、以て一書を成せるもの也。文章についての苦心談あり、材料の蒐集についての苦心談あり、或は批評家に對する氣焰あり、文壇に對する抱負あり、作物中の人物に關する談話は興味最も深く、作者の經歷談亦深く味ふべし。小說美文の筆を執る人は勿論、志を明治文壇に寄する人は必ず一本を座右に置く可く、明治文學史を編する人に在りても、少なからぬ裨益あるべし。

無名氏著◎山中古洞君表紙畫

新刊

目次

第一 總論……
第二 海……
第三 山……
第四 草木
第五 天象
第六 風……
第七 雨……
第八 雪……
第九 霧と雲
第十 露……
第十一 雜種
第十二 鳥獸
第十三 色相論

全一冊 定價郵稅共金貳拾錢

巍峨たる山、澎湃たる水、天は泄邇として無數の日月を懸け、地は寥曠として百二の山河を載す、春秋代謝して花〻の觀、朱紫盡きず、風雨調和して禽蟲の聲、遂に尽いず、是れ實に自然の一大美觀に非ずや、若夫れ萬斛の吟思凝つて斯を忘我の樂境に躍らむとするの時に至ては、我は六根汚濁の人の子にあらずして、既に自然の寵兒たらんとする也、著者は能の奇矯と識の博該を以て名を當代の文壇に馳する者、自然に吟嘯する茲に幾年、詩の眼光に映じて種々の觀察を恣にし、此を『自然美觀』と題して梓に上す、均しく自然の寵兒たらむ者は、請ふ讀過十嚼して其の價値と興味とを玩把叩嚼せよ。

新聲社同人著

三十棒

再版發賣

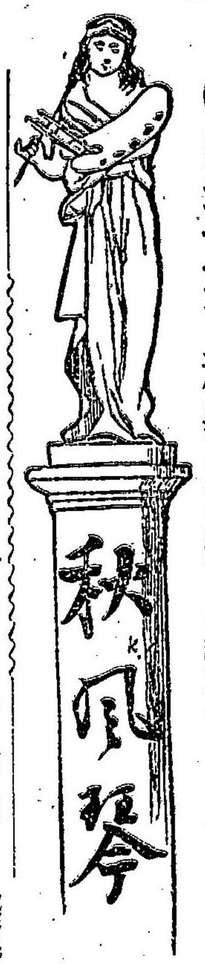
（宣言）危機頭上に落ち來る、常套の警語を以て排し得可きにあらず。我黨口を開けば熱罵、筆を執れば烈罵、好んで敵を天下に求むるもの、豈奇を衒ふが爲ならんや。吟花嘯月江湖別に其人あり、我黨一管の筆、只社會革新の爲に揮うて天職を全うせんのみ。

（『萬朝報』評（よろづ文學記者）　新聲社同人中に頭角を抽んずる橘香と梅溪の著也、吟ずる所は、文藝問題の多岐に亘り、文章は概して懇切れよく、且つ氣焔あり、開書殊に面白く讀まる、諷評、盲評、或はさんちんかんの說をなすもの多き當節、熱罵苦言、敢へて厭はざる二子の意氣や太だ欣ぶべし、而して更に欣ぶべきは、其熱罵苦言の聰明なる判斷に出づることなり、『三十棒』の題名、正に其實質に適ふ。

『大阪毎日新聞』評　こは新聲社中の人々の手になれるもの抱負、主張、論議等を蒐集し一冊子となせるもの、勇往の文、縱橫の筆、氣焔天に揚るの意氣あり、この抱負あり、以て文壇に驍騰するに足る、また一讀すべきの好冊子たらんか。

○紙數百七十五頁……定價貳拾錢、郵稅四錢○

◎明治文壇の精華を集めて此一卷を成す○紙數大判百四十頁定價郵稅共拾九錢



秋風琴

（秋風琴要目）

訂正參版

小說
夜叉池　内田魯庵
零落車　德富蘆花
春　小栗風葉
監督　泉鏡花

評論
水の詩趣　久保天隨
詩人の評價　後藤宙外
非功ム心論　緒方流水
宗教界文士　佐藤橘香
戀と詩　中村春雨

美文
わが初戀　與謝野鐵幹
村の白壁　田山花袋
野調　澤田泣菫
韻法　小島烏水
師　蒲原有明
嘆き　妖魔居士
天なる嘆き　某文士

韻文
文壇風聞記　長谷川天渓
文界一夕談　支々子
文士雅號譚　梨園子
文界と梨園　月峰

寫眞
大町桂月○嶋崎藤村○德富蘆花○小栗風葉○泉鏡花○内田魯庵○田山花袋○大野酒竹の諸君

筆蹟（寫眞）尾崎紅葉君、正岡子規君（俳句）（綴版）故一葉女史（傑作十三夜之原稿）

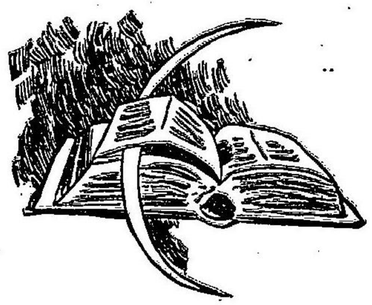
材料最豊富　定價の至廉比なし

新聲記者編

弦月

青年文集

全一冊洋製
定價二拾錢
郵稅金四錢



青年文士の作を集めて『弦月』を編す。彫むるところの文、無量數十篇、江湖後輩の筆に成れるもの、美文あり小說あり、圖畫あり、一篇ごとに趣味饒多にして詩境自ら新脆、之れを響ふれば、秋蓮水を蒲して奇香雨に濕ぶが如く、落梅檐を撲つて冷艷風に裂せたるが如し、『弦月』は近時文壇の珍寶を以て自ら許すもの也。

月蓮風蓮

國府犀東君著

國府犀東君豪宕矯健の筆と、縱橫四面の才を負ひ、夙に一代の奇俠見を以て稱せらる。本書は君が雜著を集めたるもの、世を嘲るの涙あり、自然を歌ふの聲あり、一字一涙、一句一血、興趣緒端に逸飛し、韻聲縹緲として終に盡くへからざらんとす、一卷悉く是れ三嘆九誦の出色文字。

（定價二十五錢、郵稅金四錢）

白露集

文學士 久保天隨君 合著
文學士 淺野馮虛君
文學士 戶澤姑射君 著（三版）

中村不折君 畫
下村爲山君 畫

ろも觸れなば碎けん白玉のうちに湛き涙をつゝみて、天地の萬象をうつすものは露にあらずや。白露を以て名とせる此集は、やがて戀や、無常や、運命や、人の世のあはれの數々を、わらはして剩すなし。人生の運命を知らんとする者は此集を見よ、自然の奧秘を叩かんとする者は此集を繙め。若しろれ其文に至りては、誠に當代の絕品、艶麗豪宕悲慨、皆其妙を極めて、一語一句鏗然耳に徹し、渙然目を奪ふ。美文に志を寄する者の机上、殊に此集なかる可からず。寫眞銅版に刷して卷中に挿める不折爲山二子の畫は驚心鏤肝の餘に成りて、錦上花を添ふるもの。今回訂正第三版發行す。

美文壇之絕品　總クロース金文字入○定價參拾錢郵稅金四錢

大町桂月君著

文學小觀

第三版

文壇洛寞、人皆大町文學士が英姿颯爽、文界を横行せし當時を懷ふ、本書は實に子が文學的論文を集め盡くせるもの、半生の心血注いであゝに在り。論の新、文の雄、加ふるに湧くが如き同情を以てす、文字自ら生命あり。

目次

○人生に於ける文學の意義○文學と時世○音樂と詩歌との分離○文と改良論者に告ぐ○哲學者と大詩人○不平の大小○國民論者に告ぐ○文學者に告ぐ○土地○日本人が文學と美術の嗜好○文學者と日本人○不平○國民論の特質○內地雜居と國民の性格○文學○混淆○滑稽の方面○狂熱○東部の文壇を去る辭○人生の意義○文學と時世○音樂○詩歌○文學者の特質○美術と道德○滑稽文學○馬琴の得失○天地の情○悲劇と同情○小說の諧謔○國語の短所○詩に於ける措辭○詩と同情○文體○詩の嗜好○文學者と土地○日本人が文學と美術○活潑○裸體畫○江戸文學の研究○門戸の陋見を去れ○文學者○洗練の趣味○馬琴の美少年錄○日本主義○明治會雜誌と日本主義○其人物○日本の詩形を論ず○冷罵十則○文學士の性質○內地雜居と國民○危言○文學士の狂熱○貴族○文學○狂歌の缺乏○滑稽の方面○

●定價參拾錢●郵稅四錢●

著者妖魔居士とはいりなる人ぞ下に列記せる諸文士の風采逸話學殖等人の知ちんと欲するべくの內幕談を忌憚なく暴露して剛すなし、却は砂を嚙むが如きものを以て、諸たゞる我讀書社會に在りて、興味津々たる此の書の如きは、眞に比を求む可からざる者なり。

文壇風聞記

定價金拾五錢

露伴。紅葉。逍遙。鷗外。櫻痴。堂村。緑雨。眉山。柳浪。南翠。魯庵。四迷。宙外。天外。鏡花。風葉。水蔭。浪六。麗水。蘆。乙羽。濤柿。花袋。學海。甫知。嵯峨の屋。三味。抱一庵。廿三階堂。弦齋。思案。松葉。秋聲。天囚。霞亭。幽芳。秋濤。秋聲。枯川。青軒。蘇峰。湖南。礦堂。翔川。桂月。嵐雲。櫛牛

大日本文章學會編

文章形容辭典

上製 定價三十錢 郵稅四錢
並製 金文字入 定價二十五錢 郵稅四錢
クロース 袖珍洋裝 美製本

文章の基礎は實に形容語に在り、常に之を豐にして滿腹便々、時に應じて筆端窘束するの虞あらしむ可からず。本書は古今の文學書類より出所正しき形容語を集め、題によりて分ち、順に從つて次第し、難解の句には一一明細なる註解を附せるなど、用意極て親切也。若し夫れ机上常に此書を友とする時は、形容の辭句に苦しむことなく、意味不明の文字を挿みて、文意を害するが如きは斷じてなかる可き也。

文科大學教授 文學士 芳賀矢一君校閲
大野洒竹君序 沼波瓊音君著述

俳諧音調論

全一冊 定價郵稅共
洋裝 金貳拾錢

俳句は十七字の最短詩形なれば一音一字の關する所極めて大、まさに其音調を正うして、內容と副はさゞる可からず。而も從來音調の研究を試みしもの誠に寥々、著者大に之を慨し、深く古人の說を參考し、廣く音韻學語學等を尋ねて、俳句音調の研究に資し、以て本書を著はせり、說く所極めて平易、條理又整然、一目瞭然たるを得せし。

小嶋烏水君著
結城素明君畫

木蘭舟

（訂正再版）

全一冊　定價貳拾錢
美本　郵稅四錢

自然の美を謳ひ、天地の悠久を叙するや、才情流露、好箇無韻の詩、と りて朗々高く歌ふ可く、天下の痛苦に同情し、世の薄倖見を吊するや、至誠 測々、涙痕文字に滿ちて、冷情鐵の如きの徒尚ほ泣く可し。此特長を發揮し たるもの、即『木蘭舟』也。

田山花袋君著

ふるさと

五版　全一冊　定價貳拾錢
郵稅金四錢

ふる郷は好箇の題目なり、ふる郷は人生に於ける最も清く最も美しき舞臺な り。ふる郷は人間が最後に至るまでの長き追懷なり。著者今詩的幽艶の筆を 抑うて、此ふる郷を寫す。而も著者の寫すや、半は正面より、半は側面より し、奇正縱横殆ど端睨すべからざるの概あり。眞に明治文壇有數の佳作。

文學士　久保天隨君著述

山水美論

中村不折君畫
口繪四葉

紀行文家として文壇に獨歩する天隨君が、周遊多年の間に得たる風景論にして、山を論じ、海を說き雲を叙し、或は旅行を奬勵し、或は風懷の高士を說く。其言や詩人の如く徒に空想に流れず、其論や科學者の如く無味ならず、巧に美の根本を視て、豪健瑰麗の筆よく之をあらはす、蓋し天隨君にあらざれば、斷じて成し得べからざるの書也。

定價廿五錢　郵稅四錢

柳宗元

東西文豪評傳
第壹編

『柳宗元』は少壯漢學家の巨擘久保文學士の筆になる、觀察奇警、論斷妥當、而して文字雄健奔放、子が專門の智識を傾倒して剩すなし。濃艶桃治の四六文を一掃して八代の衰を起し。其文は超詣奮邁、自ら清新の一路を拓開して他を蹈襲せず。其性は雋傑廉悍、識見常に天下の膽を破れる文界千古の巨人の全き面目を知らんと欲せば、正に本書に就いて一閲せよ。

定價廿五錢　郵稅四錢

正編五版
續編三版

俳句評釋

河東碧梧桐君著

批評

新派の驍將河東碧梧桐氏が蕪雑集を離れも解し得る樣に丁寧に評釋を加へたるもの何れもその精神を捉へ得て、點睛匠流奪索の末に走らざるはし、且つまた以て新派に立脚地を與ふる得べく、初心者が座右の珍とすべし。（大阪毎日）

俳句は詩形の短小なるが故に、簡警瀟麗を主として餘韻を含蓄せしめ、且つ故事歴史等を援引し來るが故に、古今の名句多くは解し易からず、是れ初學の士の最も憂ふる所、本書は古今の名句を選み、丁寧懇切なる註解を加へ、其苦心經營の存する所を知らしめ、傍ら著者が自家の工夫を述べて、作句上の秘訣を教へたるもの也。

正編

續編

『俳句評釋』の一卷を公にするや、初學の士趨走して皆是を求む、著者江湖囑望の厚きに激し、勵精更に筆を續ぐに執り、正編に洩れたる秋春の二季を評釋し、以て完璧缺くるなきものとなす。其評論の嚴正にして痛快なる、實に快刀一閃、亂麻を斷つの趣あり。試に讀一過せば、俳句を鑑識する上に於て、作法の妙機を知る上に於て、少からざる益を得べし。

全貳册　袖珍美本　色彩表紙

定價參拾五錢郵税四錢

美文韻文集

わか草

定價郵税共貳拾錢

美の神は偏頗なし、等しく美に讃仰する者を愛す。笑ふ可き哉、彼偏狹の徒、僅に成せる名を恃みて、何派と號し何黨と稱へ、故らに關門を築きて、後進の進路を妨ぐ。關門毀たざる可からず、關門破らざる可からず。二十世紀の文壇は、最も自由に、最も清新なるを要する也。青年文士の傑作を集めたる一卷の『わか草』は、窮に關門打破の急先鋒を以て自任す。

新聲社編纂（參版）

紅葉舟

定價拾五錢
郵税二錢

滝まくら　大町桂月
懐紙雲記　戸澤姑射
翠虹萬丈　島崎藤村
荒磯物語　久保天隨
多おもり影　江見水蔭
れぼろの紅葉　小杉天外
京　淺野馬鹿
河東碧梧桐

本書は當代一流の名家の作と、青年文壇に嘖々の名ある人々の作とを掲げたるもの詩文約百篇一として諷誦に値せざるはなし。

月桂冠

本書は賞を懸けて江湖に募集せる小説美文韻文評論等を收めたる者

全一册大判洋裝美本
定價税郵共金拾錢

附錄
豆州の名勝　久保天隨
村　薄田泣菫
彩　雲　蒲原有明

應募約一萬篇中より最も見る可き者を拔たれば文想共に秀拔を極む

評釋叢書

著者は許斯道の名家、流麗暢達の筆を揮うて難解の好句を解し、詞章の巧拙を議し、其思想を論じ、作者の精神を發揮す。世上の飜譯、講義類と同日に談すべからず。

全部六冊　六冊帙入定價郵稅共一圓四十錢

評釋叢書

漢詩評釋　壹編　定價廿錢　郵稅四錢
文學士　久保天隨君著（第二版）

漢文評釋　貳編　定價廿錢　郵稅四錢
文學士　阪本四方太君著（第二版）

評釋叢書

俳文評釋　參編　定價廿錢　郵稅四錢
文學士　內海弘藏君著（第二版）

國文評釋　四編　定價廿錢　郵稅四錢
文學士　淺野馮虛君著（第二版）

英文評釋　五編　定價廿錢　郵稅四錢
文學士　久保天隨君著

古詩評釋　六編　定價廿錢　郵稅四錢